

# 笠利町宇宿の八月踊り

## —概観と歌詞の局面から—

内田 敦・久万田 晋

(注1) (注2)  
うちだ あつし くまだすすむ

### 1 はじめに

本論は鹿児島県奄美大島笠利町宇宿集落に伝承される八月踊りを、奏演形態・旋律・歌詞・舞踊などの多局面から捉え、その実体を明らかにする研究の一環として、主に全体的概観と歌詞の局面について報告考察するものである。

奄美大島の八月踊りについて記述した文献でまず挙げられるのが『南島雑話』（名越1979）であろう。幕末期における奄美大島の姿を記述した中に八月踊りなども紹介している。民俗学的研究としては金久1963、恵原1973などがある。文学研究・歌詞収録集成としては文1933、池野1983、恵原1987、1988、斬新な方法論で関連諸分野に幅広い影響を及ぼした小川1979、奄美諸島全域の歌謡を体系的に集成した田畑英勝他1979などがある。音楽研究においては、長期にわたり奄美に関する唯一の楽譜集であった久保1960、日本民謡研究の広い枠組みから奄美音楽を捉えた小島1982、奄美歌謡の諸ジャンルを眺観した内田るり子1983、奄美諸島全体の諸歌謡を楽譜化し解説も施した『日本民謡大観（沖縄奄美）奄美諸島篇』（日本放送協会1993）、奄美大島全域の八月踊り伝承曲を調査した松原1988、1989、1990、笠利町内の八月踊り曲を比較した山1973などがある。芸能論的研究としては、八月踊りの成立と展開について考察した大石1990、松原1992、久万田1995などがある。

このように大きく奄美全体を視点として論述・比較をした研究から、最近は特定集落に焦点を当て、綿密な調査をもとにした芸能民俗誌的な論稿が増えてきている。徳之島日手久における歌のあり方を音楽民族誌的見地から捉えた酒井1989、笠利町城前田の八月踊りの多局面的な実態を捉えた久万田1988、1990、1991、1994、竜郷町秋名の八月踊りを年中行事等の視点を含め記述した久万田・寺内1992、住用村西仲間の年中行事と八月踊りの概要を記した内田敦1991、大和村名音の八月踊りに伝わる膨大な歌詞を緻密に記述した田畑千秋1991、笠

利町佐仁の八月踊りを取りまく言説に注目した中原1992などがある。

本稿でとりあげる宇宿集落についての報告としては、民俗学の立場から集落の全体像を記述した跡見1983、アラセツ行事における八月踊りの実態を報告した内田敦1990などがある。

本稿では笠利町宇宿集落の八月踊りについて、概観および歌詞の局面に焦点を当て、特にナラベと呼ばれる歌詞の掛け合いの分析を中心に報告を行う。

## 2 宇宿概況

宇宿集落（うしゅく 方言名：うしく）は奄美大島笠利町の東海岸沿いの中部に位置する人口307人110戸（1994年度町勢要覧に基づく）の集落である。主産業は砂糖黍を中心とした畑作農業であるが、漁業や紬工業に従事するものもいる。古今に渡り交通の往来も激しく、宇宿フカミチ貝塚からは縄文・弥生の土器類始め「グスク時代」には当時一般的でないといわれている仏教文化の産物の蔵骨器も出土されている。また、「那覇ん世」（沖縄に支配統括されていた時代）には首里王府より1529年に宇宿親方（役職名）が任命され周辺地域統括による政治権力の一所在地となり、1571年に琉球王尚元が大島親征した際の上陸地点にもなったと言われている<sup>(注3)</sup>。現在も近くに奄美空港、集落地域に宇宿港があり、将来的にも宇宿を中心地として奄美パーク古代村の計画が進んでいる。

## 3 宇宿八月踊り概観

### (1) 八月踊りの奏演形態とレパートリー

ここでは宇宿集落の八月踊りの概観を簡単に述べる。八月踊りは南西諸島で行われている夏折日行事の一環としてアラセツ（旧8月の初丙）の前日より3日間、シバサン（アラセツ後の初壬）の前日より3日間、集落の各家を廻りながら行われる<sup>(注4)</sup>。踊りは男女のグループが一円の輪となり、ツィヅィンと呼ぶくさびを打ち込むことで張力を調整する筒形両面太鼓を叩きながら掛け合いで歌う（踊りの参加人数が多くなると円は二重になったり、状況によっては渦巻形にもなる）。輪は、男性のリーダー（歌い出しをする人＝ウチジャンという）を

先頭に経験順（主に年齢順）に並び反時計回りに、女性も同様に時計回りに並ぶ。太鼓役は必ず女性のウチジャン数名がつとめ、主に女性から歌い始める。歌はゆっくりしたテンポで始まり、一方が旋律一節を歌い終わらないうちに他方が歌い始める。故に各節末尾は必ず双方の歌が重なり合うことになる。テンポはだんだんと加速され（このことをアラシャゲルという）、急速のクライマックスを迎えた中、「トーザイ（東西）」の合図によって終息を迎える。<sup>(注5)</sup>

また、一つの踊りで、テンポを加速していく中、今までと別の旋律に移行して歌い継いでいく手法があるが、こうした付随的旋律を宇宿ではアラシャゲと呼んでいる。<sup>(注6)</sup> 踊りによりアラシャゲを複数持つもの、一つ持つもの、持たないものと分かれている。一つの踊りの始まりやアラシャゲの始めの歌詞はたいがいその旋律固有の歌詞であるが、これを歌い終わると、どの踊りに歌ってもよい共通歌詞を歌いつないでいく。<sup>(注7)</sup>

共通歌詞のつなげ方に2種類の手法があり、一つはナガレ、一つはナラベと呼ぶ。ナガレとは、一般的には全体でストーリー性をもつ一連の歌詞群で、歌詞の順番がしっかりと決められている。本集落では歌集に「かんでくならべ」と「縁の流れ」が記録されているのみで、実際には演唱されていない（歌詞群でなく、一歌詞としてナラベの中に使用されることはある）。ナラベはそれに対して歌詞の順番は決められていないが、歌われた一歌詞から連想される歌詞を次々と並べていく手法である。本集落で行われる掛け合いはこのナラベによるものといってよい。アラシャゲていく中でのナラベの掛け合いでは、ウチジャン（歌い出し）役の人は数百ある歌詞のストックから適切な歌詞を瞬時にして選び抜かねばならず、相当な知識を必要とされる。「歌は勝負」と言われる所以である。宇宿の八月踊りの場において次のような掛け合いの歌詞がよく歌われる。「しゅんにゃしゅんにゃ<sup>いさま</sup>汝等や、吾等と唄比しゅんにゃ、<sup>さばじり</sup>鱧釣ぬ如に、<sup>おし</sup>曲ぎてい<sup>おし</sup>差上ろ」（するかするかおまえ達、私達と冗談〈歌比べ〉をするかおまえ達、鮫を釣る釣り針のようにぺしゃんこに曲げてやろう 資料1 158)、「<sup>さばじり</sup>鱧釣ぬ如に、<sup>おし</sup>曲ぎい<sup>いさま</sup>きらば<sup>おし</sup>曲ぎい<sup>い</sup>れい、<sup>いさま</sup>汝等に<sup>おし</sup>曲ぎい<sup>わぬ</sup>られる、吾ぬやあらぬ」（鮫を釣る釣り針のように私達を曲げられるなら曲げて見なさい。おまえ達に曲げられる私じゃないよ 資料1 142)。このように「わきゃとらさげしゅんにゃ」、私達と歌比べ、歌の勝負をするつもりかという意味の歌詞があり、それがよく歌われていることから、八月踊りでの歌の掛け合いは勝負だとい

う人々の意識が伺われる。

以上が一奏演の次第であるが、踊りは各家にて3種類（そのうちの一曲目は必ず〈祝つけ〉）踊って家々を廻る。現在は一日の始めの家での2曲目には〈まけまけ〉、一日の終わりの家での3曲目は〈あがれ明雲〉を踊る。古老の話では、昔は三日三晩続けて踊り明かすのが通例であったため、一日の踊り終わりの踊りはなかったという。しかし夜中踊り明かして明け方頃に踊る踊りがたいい〈あがれ明け雲〉であったので、現在は一日の終わりの踊りとして使用しているのではないかという。

次に、宇宿集落の八月踊りのレパートリーに目を向けてみたい。本集落の八月踊りで伝承されている曲を表1にまとめた。<sup>(注8)</sup>踊りは歌集等から23曲確認できるが、筆者が1987年以降に実況伝承として確認出来たものは〈あじそい〉、〈チェンチェン〉を除く21曲であった。また確認出来た旋律は踊り旋律22種、アラシヤゲ旋律10種である。以下に、曲名を列挙する。

八月踊り曲 ※（ ）内は別称

- |                   |              |
|-------------------|--------------|
| 01 〈祝つけ〉          | 02 〈まけまけ〉    |
| 03 〈宇宿踊りくわ（浦富）〉   | 04 〈しゅんかねくわ〉 |
| 05 〈ハイソーラ（ねんごろ女）〉 | 06 〈浜千鳥〉     |
| 07 〈近雲（ヤサレスドイドイ）〉 | 08 〈芦花部一番〉   |
| 09 〈高さの坂〉         | 10 〈港笹草〉     |
| 11 〈ほう女童〉         | 12 〈塩道長浜〉    |
| 13 〈東明け雲〉         | 14 〈あがんむら〉   |
| 15 〈岬とんぱら〉        | 16 〈屋仁川の沙魚〉  |
| 17 〈安実主（屋仁ぬ安実主）〉  | 18 〈あじそい〉    |
| 19 〈足くみくみ〉        | 20 〈一合二合〉    |
| 21 〈赤木名観音堂〉       | 22 〈今ぬ風雲〉    |
| 23 〈チェンチェン〉       |              |

アラシヤゲ旋律（付随旋律）

- |              |               |
|--------------|---------------|
| A 1 [あらしやげ]  | A 2 [ドンドン節]   |
| A 3 [ほうめらべ]  | A 4 [あらしやげ]   |
| A 5 [西ぬ仲原]   | A 6 [ヤレコー]    |
| A 7 [喜界や湾泊り] | A 8 [おもてヨイソラ] |
| A 9 [油だらだら]  | A 10 [稲摺り節]   |

表1 笠利町宇宿八月踊り伝承曲一覧

この表は、宇宿の八月踊りの全曲について、曲名、1987年アラスセツ行事での演奏回数、1987年の伝承状態、演唱形式、歌詞の詞型、備考をまとめたものである。  
 ・「曲名」の冒頭に通し番号を付した。曲名に別称がある場合は( )内に記した。またアラスセツ行事(付随旋律)は、それが歌われる曲の後に示し(旋律名は〔 〕内)、Aの後にアラスセツ行事で通し番号を示した。これらの通し番号は資料3に付けた番号とも一致している。曲順は、歌集KA3をもとに作成した。  
 ・「回数」は、各踊り曲の1987年度アラスセツ行事で各曲が踊られた通算演奏回数である。  
 ・「伝承」は、1987年において旋律・歌詞・舞踏すべて伝承されていたものを○、旋律・歌詞のみ伝承されていたものを△、反復形式とハヤシ詞を片仮名で記した。相手側が歌う場合はa・b・c・dとし、反復形式とハヤシ詞を片仮名で記した。相手側が歌う場合はa・b・c・Dとし、各句の一部分を歌う場合を△、反復形式とハヤシ詞を片仮名で記した。  
 ・「詞型」は、その曲で歌われる歌詞の基本的な音数律を記した。複数ある場合は8886・7775などと羅列した。  
 ・「備考」は、各曲についての補足的な情報を記した。

曲名(別称)	回数	伝承	演唱形式	詞型	備考
01<祝つけ>	51	○	ハルハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	8886	各家での始めに必ず踊る儀礼的な踊り
A1 [あらしやげ]		○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	8886	舞踏の変化あり
A2 [ドンドン筋]		○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	8886・7775	A句の途中より歌う事あり
A3 [ほうめらべ]		○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	8886	11と同旋律
02<まげまげ>	15	○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	7775	一日の一軒目二曲目で必ず踊る
A4 [あらしやげ]		○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	8886	歌い始めはA句省略
A5 [西ぬ仲原]		○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	8886・9999	
A6 [ヤレコー]		○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	888(6)	D句は歌われない
03<宇宿踊りくわ(浦富)>	9	○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	8888	
04<しゅんかねくわ>	7	○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	8886	
05<ハイソラー(ねんごろ女)>	9	○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	8886	
A7 [薑界や湾泊り]		○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	8886	
06<浜千鳥>	4	○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	8886	
07<近雲(ヤサヌドイ)>	3	○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	8886	
08<声花部一番>	1	○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	3876	現在踊られていない
A8 [おもてヨイソラー]*2		△	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	8886	
09<高さの坂>	6	○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	8888	
10<港草>	7	○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	8888	
11<ほう女童>	3	○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	8886	A3と同旋律
12<塩運長浜>	6	○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	8886	
13<東明(雲)>	4	○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	8886	一日の最後に踊る
A9 [油だらだら]		○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	757558・8886	舞踏の変化あり
14<あがんむら>	3	○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	8886	
15<岬とんぼら>	6	○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	8886	
16<屋仁川の砂魚>	3	○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	8886	
17<安実主(屋仁ぬ安実主)>	4	○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	8886	
18<あじさい>	0	X			
19<足くみくみ>	3	○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	8886	最近踊られなくなった
20<一合二合>	1	○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	88	
21<赤木名観音堂>	4	○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	8886	
A10 [稲摺り節]		○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	7575	
22<今ぬ風雲>	4	○	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	8888	
23<チエンチエン>	0	△	ハルハルCエハルDエハルC(ハルハルハル)ハルCエハルDエハルC	88	現在踊られていない

\*1〔〕内は歌集KA1(資料2)に記載されたもの \*2現在の伝承では曲名を聞き取れなかったもので、歌い出しから命名した。

ここで表に記せなかった事柄を簡単に補足しておく。〈祝いつけ〉は各家を廻るヤサガシ（家探し）においても、公民館前で踊るクワイバウドゥリ（会場踊り）においても必ず始めに踊られる儀式的性格を持っており、八月踊りの中では数少ない裏声を使用する踊りである。この裏声のことを集落ではキャングイ（黄色い声）と呼ぶ。〈まけまけ〉、〈宇宿踊りくわ〉、〈ハイソーラ〉等は人々から好まれている踊りと思われる。〈あじそい〉、〈足くみくみ〉、〈一合二合〉は、後述するように呼称・歌詞・旋律の関係において混乱を生じている。現在は〈足くみくみ〉、〈一合二合〉は別の踊りとして踊られており、旋律・舞踊とも異なっているが、集落の故老によると〈一合二合〉と〈足くみくみ〉はおなじだと言う説もあり、後述する歌集の中にも同様なことが見られる。〈今ぬ風雲〉はくるくると回転する踊りで、旋律はシマウタ（三味線歌）にある同名曲とだいたい同じである。また、〈赤木名観音堂〉のアラシャゲ（付随旋律）である〔稲摺り節〕は、本集落において八月踊りとは別におこなわれる芸能としても歌われている。

## (2) 八月踊りの変遷

ここで集落の人々の話や筆者の調査から本集落の八月踊りがどの様に変化してきているのかまとめてみる。

まず、八月踊りの踊られる機会が減少したことが挙げられる。以前は浜下り・お盆・ミーハチガツ（アラセツ・シバサン・ドゥンガの3行事をいう）・敬老会など、従来からの年中行事で踊られる他、年の祝い・正月の祝いなど事あることに踊られてきたが、生活の変化に伴い八月踊りの場も変化してきているのが現状である。集落行事外の町行事が増えるとともに、集落における行事の統合・簡略化<sup>(注9)</sup>が行われた。本来は別行事である種下ろし行事がミーハチガツ時期に統合されるようになったのは、昭和45～6年だという。新生活運動（生活改善運動）の考え方からも問題になるのが、一年間の集落運営資金調達ともなる種下ろし行事のあり方で、帰郷者数が多いミーハチガツ時期に資金を集めた方がよいとのことで、アラセツ・シバサン行事に統合されるようになったと<sup>(注10)</sup>いう。そのために八月踊りを踊る時間も相対的に減小し、そのあり方も変化してきた。かつてアラセツ・シバサンで行なわれた、集落の各戸を廻って踊るヤ

サガシ（家探し）では、まずアラセツで集落の片端から踊り始めて集落の全戸を廻り、シバサンではアラセツと逆順で再び集落の全戸を廻っていた。このようにヤサガシの踊りは集落の端まで踊ったら再び踊って戻って来なければならず、現在のアラセツ・シバサンを通じて全戸を廻るやり方は、昔は「カタオドリ（片踊り）」と呼び、行なってはならないとされていた。またアラセツ・シバサンとはまた別に種下し行事でも集落の全戸を踊って廻っていた（この時は〈六調〉などの手踊り曲）。

このような機会の減少を経て、現在はアラセツ・シバサン、敬老会で八月踊りが踊られている。最近では、学校の運動会、空港のイベント等町の行事に出演したりと、八月踊りを行う機会も多様化・変容を見せている。<sup>(注11)</sup>

次にヤサガシの行われ方の変化が挙げられる。ここ数年間の軌跡を追ってみると、1987年までは集落内の家々を一軒ずつ廻るヤサガシを行っていたが、<sup>(注12)</sup>1988、1989年はヤサガシは行わずに公民館庭でクワイバウドゥリを2日間づつ（各祭り日とその前日）踊った。これは、ヤサガシにおける各家の負担が増大したためであり、また一ヶ所<sup>(注13)</sup>で踊ることにより、高齢者でもそこに参加すれば一日の八月踊りを楽しむことが出来るという考えもあったようである。この方式は各家の負担は減少するが、その分集落役員の負担は大きいという。この場合、八月踊りが行われる4日間を集落の戸数で割り、それぞれグループ当番制でふるまいの料理をつくった。それ以外の支度は集落の役員が行った。しかし1990年には、何軒かを一まとめにして路上やそのグループ中の庭の広い家で踊る形式に変化した。この場合は各家の負担も考え、一軒に対して負担金は一律2000円と決められた。これは伝統的なヤサガシと一ヶ所<sup>(注13)</sup>で踊るクワイバウドゥリとの折衷案でもあり、集落の人々が八月踊りの伝統をいかに現代にマッチさせていくかの工夫のあらわれでもある。また、前述のように資金集めにおいても、公民館で行うより出来るだけヤサガシに近い形で行った方が有利である。1990年には踊りの一まとまりが10軒程度であったのが、1991年には5～7軒になり、踊りの期間も祭り日の前後3日間と以前に戻っている。1992年からは3～6軒に、さらに1994年には1軒で行う家もいくつかあり、徐々に元の姿により近い形で行われるようになってきている。しかし集落の人によれば、現在のグループ単位で行う形式がベストで、元の形には戻らないだろうという。こ

のグループ単位は、ここ2年はだいたい平均4軒で一グループだが、必ずしも前年と同じグループに加入するとは限らない。回る順序が決まっているとはいえ（現在では家を回る順序が前年と逆順になるように行っている）、実際には転入出・分家等、年毎の変化にあわせて行っている。また1987年以前に、ある家が門口の位置を変えた為、回る順が変化したこともあったという。

その他には男女で異なる旋律の混同・レパートリーの消失・ウチジャシの歌い方におけるテンポの変化などが挙げられる。本来男女で旋律が異なっていた幾つかの曲において、女声旋律への統一化という変化が起こっている。これはすでに現在のベテランの世代において男女旋律の混乱が生じており、そのために男女で旋律を歌い分ける意識が薄らいだためと思われる。現在の若い世代は、声の高い女声旋律に引き付けられて演唱しているようである。また、歌詞レパートリーにおいては、共通歌詞はもとより元歌でも最近では歌われない歌詞もあるようである。たとえば、〈まけまけ〉の第1アラジャゲ旋律の〔あらしやげ〕は現在は共通歌詞の119（資料1番号）を元歌のように演唱しているが、以前は231「曲がりょ高嶺なんてい・・・」という他集落でも見られる〈曲がりょ高嶺〉の元歌を歌っていたという。

踊りのレパートリーも様々な理由によって減少しつつある。〈チェンチェン〉は踊り方が分からなくなったため現在行われていない。〈一合二合〉は踊り方が最近不確かになり1990年以降は踊られていない。〈芦花部一番〉の前に歌われていた〔おもていヨイソレ〕は歌詞が良くないという理由で現在行われていない。また、年配者の話では、昔は現在のウチジャシ（歌い出し）のテンポよりゆっくりと始まっていたという。これも生活や嗜好の変化に伴う八月踊りの変化といえよう。

### (3) 郷友会活動

この項の最後に、八月踊りにも重要な関わりをもつ郷友会について述べておく。郷友会は集落出身者が他地域でまとまりをなし、望郷の念と集落の持つアイデンティティを子孫へ伝え互いの絆を深めて行く集団であるが、このような集団も集落の歴史的変遷の中から生み出されたものと言える。宇宿と関わりを持つ各郷友会は全国規模で設立された全国宇宿連合会という組織の傘下にあ



る。全国宇宿連合会は宇宿校区出身者の近況連絡等の為の全国的連絡網として全国宇宿会という名称で昭和27年10月に母体ができ、その後、昭和41年5月に本名称に改め設立された。その下で地域の郷友会として活動しているものに、名瀬市宇宿郷友会・名瀬宇宿校区郷友会を始め、鹿児島宇宿会・京阪神宇宿会・東京宇宿会などが挙げられる。これらの郷友会は名瀬市宇宿郷友会を除き校区単位（崎原・土盛・宇宿・城間・万屋の5集落）のメンバーで構成されており、宇宿一集落の郷友会ではない。<sup>(注14)</sup>

ここで、簡単に各郷友会の設立沿革等を記しておこう。鹿児島宇宿郷友会は昭和21年11月に設立されており、鹿児島笠利会と共に提携して奄美復帰運動を行った。また、全国宇宿連合会の組織の中で「全国宇宿ニュース」を発行するなど盛んな活動を続けている。東京宇宿会は昭和22年3月に設立された（設立者の橋口良秋氏は鹿児島笠利会の設立者でもある）。現在でも毎月の八月踊り親睦を始め、敬老会等様々な行事を行っている。平成7年10月には地元との八月踊りの交流も計画されている。京阪神宇宿会は昭和22年10月に設立され、近畿笠利会の中核となっている。

奄美大島内には名瀬宇宿校区郷友会と名瀬市宇宿郷友会がある。これらの郷友会は地理的条件などから本土の郷友会組織と比べ成立の経緯、あるいは組織の性質などに特殊性が見られるので、ここではこの二つの郷友会について多少詳しく述べることにする。

名瀬宇宿校区郷友会は他の郷友会組織設立時より遅く、昭和42年1月に設立されている。これは、当時宇宿郷友会・万屋城間郷友会・土盛郷友会など各集落単位の郷友会がすでに名瀬市内に設立されていた為、本土のように校区単位の郷友会を作る必要性がなかったからである。<sup>(注15)</sup>それが、本土の各郷友会を束ねる全国宇宿連合会設立に伴い、名瀬市でも校区郷友会を設立、全国宇宿連合会の傘下に入るに至った。ただ、市内に各集落郷友会が存在したにも関わらず、より大規模な会設立に至った背景として、(1)全国規模で行う行事の際、他と同等に参加できる団体がないこと、(2)当時、徐々に八月踊りのベテランが減少し、踊りの盛り上がりは欠けてきたため、古老の反対の中、各集落合同で踊ろうという風潮があったということも忘れてはならない。郷友会活動はかつて運動会など行ったこともあるが、現在年中行事的な活動は行っていない。最近

では、全国規模の行事の宇宿校区顕彰之碑建立の際、活動している。他の郷友会や全国宇宿連合会等との連動による活動が主のようである。

集落郷友会の名瀬市宇宿郷友会は昭和24年に設立された。戦前にも同郷人同士のコンタクトはあったが、会組織には至っていなかった。戦争で出身者がばらばらになった経験から、会設立の動議が出され設立の運びとなった（本土の郷友会設立においても同様な経緯を見ることができる）。現在の郷友会活動は、年中行事として八月踊り・敬老会（運動会）がある。八月踊りはアラセツ・シバサンを避けた近日名瀬市内の公園で、敬老会（運動会）は会場の学校確保の都合上、決まった月日はないが秋に行われる。いずれも地元集落からの応援が必要なため、集落行事のない日取りに行う。敬老会の後には必ず八月踊りが踊られる。以前は敬老会で運動会を行うことはなかったが、参加者が減少したため子・孫等も交えての運動会へと性格を変質させていったという。運動会はかつては4年に一度ずつ集落と合同で行っていたが、現在は集落を含めては行っていない。役職には会長・会計・庶務があるが、会計・庶務は兼務する。会の中に以前は婦人部・青年部があったが、現在は青年部は活動がなく、部自体がなくなっている。会の一年の運営資金は八月踊りと敬老会の際の会員からの寄付で賄い、郷友会費の徴収は行なわない。これらの資金は、八月踊り開催（広告代・弁当代・集落からの応援の為のバス貸切り代等）、敬老会開催（敬老者への記念品或はお金・弁当代等）に伴う資金、婦人部活動費、慶弔見舞金（会員葬祭の花輪代・新聞掲載補助等）等に使用される。名瀬市に在住する宇宿出身者は自動的に郷友会会員となるが、活動参加の強制はなく、郷友会員として熱意のある人が参加している。現在は既に2世3世の時代となっているが、総じて郷里との関係が薄く「親は宇宿出身だが自分は名瀬の人間」という意識が強いため、郷友会活動に参加する人が減少してきている。

以上が各郷友会の概略だが、ここで注意したい点は、郷友会設立の経緯が特殊な名瀬宇宿校区郷友会を除き、全てが戦争直後に設立されていることである。緊急時における同胞との連帯の必要性が設立の理由と思われる。

集落との関係で記すべき点は、宇宿一集落の郷友会組織である名瀬市宇宿郷友会と地元との関係であろう。集落は敬老会などで本郷友会から寄付金を貰い、本郷友会は名瀬市内で行われる郷友会の八月踊りで集落から応援を求める

(名瀬市内では八月踊り時期になると各集落郷友会が市内の公園を借りて八月踊りを行っている)。このように本郷友会と集落との結び付きは強く、互助的要素が見られる。

#### 4 宇宿の八月踊り歌集について

このように八月踊りをとりまく状況が刻々と変化をし続ける中において、集落の人々は八月踊りで歌われるあまたある歌詞をどのように捉えているのだろうか。ここでは集落の人々が八月踊りのなかの歌詞という一局面を、どの様に認識し、扱っているのか探してみたい。

八月踊りで歌われる歌詞について、集落の人々が実際の踊りの場から離れていても反省的に考え、さらにはより深く習得できるように、それらを文字化し歌集を作成することは、かなり長い歴史をもっている。現在筆者は、これまでに宇宿集落でつくられた歌集を5冊確認しており、その他にも覚書原稿が幾つか存在している。一つの集落に5冊もの歌集が存在することは普通には考えられないことだが、この背景には松田宝蔵という本集落出身で、八月踊りの歌詞収集に熱心であった教育者が存在したことがある。松田宝蔵氏（明治40年～昭和54年）は明治40年本集落に生まれ、昭和9年より5年間宇宿小学校訓導となっている。台湾出向後に宇宿小学校校長に就任、その後は名瀬市に居を構え、名瀬宇宿校区初代会長を務めた。絵画・音楽等芸術に堪能で「そてつの実」など作曲も手がけている。昭和54年には、勲五等瑞宝章を受賞している。

現在筆者が確認している歌集のうち4冊の作成に松田宝蔵氏が関与している。ここでは、それら5冊の歌集の概要を説明する。なお、本稿では覚書原稿については触れず、冊子になったものだけを対象とする。また、各歌集により踊りやアラジャゲ旋律の数など収集内容が異なるので歌集に掲載された曲名も記すことにする。

- 歌集 KA1:「資料3号八月踊りの唄—宇宿方面で唄われたものを中心にして—」  
(資料2に翻刻)<sup>(注16)</sup>

松田宝蔵氏が名瀬市在住時に作成されたものと思われる。本論ではこれを資料2として翻刻化している。B4の原稿用紙27枚からなり、氏の直筆で記されている。歌詞は漢字と仮名で記録され、基本的に漢字には片仮名の読みがルビで記されている。漢字は方言の意味を表す当て字なども使用している。当て字などを用いても詳細な意味が表せない場合は原稿用紙欄外にその注釈を記してある。

構成は1. 宇宿を主題とした唄の部 2. 教訓歌の部 3. 敬老歌の部 4. 祝歌編 5. 人生観・生活反省歌編 6. 恋情歌編 7. 旧八月を主題とした歌編 8. 椰楡歌編 9. 類似歌編 10. 歌い返し編 11. 連歌編 12. 雑集編 13. 七七五調編 14. 七七七四調編 15. 八月踊り主題歌編の15部から成る。10. 歌い返し編では、ナラベの一例が43首にわたって規範的に記されており、当時のナラベのあり方をみる上で重要であろう（本稿では、人々が本来はこういう順序で歌われるべきと考える、いわば規範的認識ともいえるナラベのことを規範的ナラベと呼ぶ）。11. 連歌編には「かんでく並べ」、「縁ぬ流れ」という2つのナガレ39首（内3首不明分含む）を、伝承者名入りで掲載しているのも特徴である。15. 八月踊り主題歌編では22曲が1～22の曲番号と共に一曲ずつ曲名・歌詞の順に記されている。歌詞は演唱される通りにハヤシ・反復をそのまま記してある。踊りの元歌をアラシャゲ旋律歌詞と区別するために歌詞の上に「本」または「主」、アラシャゲ旋律歌詞の上には「ア」または「ク」と記されているが、その中には後述するような問題点も含んでいる。それぞれ、「本」は本歌、「主」は主題歌、「ア」はアラシャゲ、「ク」はクズシの略であろう。本書では、旋律のみ変化するものをアラシャゲ、旋律と共に踊りも変化するものをクズシと使い分けているようである。しかし現在の伝承では、この区別はされず両方ともアラシャゲと呼ばれている。「本」と「主」の違いについては今のところ分らない。

また、50音に書き表せない方言固有の発音表記にも工夫が施され、50音にない音は、それに近い50音内の文字をあて、その右側に△記号をつけ、50音内の発音と区別している。掲載された歌詞も268首と5冊中で最も多い（重複歌詞を含む）。また、本書の後ろの見開き部分に「予定 1集 唄詞集 2集 曲集 3集 踊り所作集」とのメモ書きがあるところを見ると、氏は八月踊り

を多様な局面から見て、その全容を記録する計画であったようである。

掲載曲は、1. 祝し°き° 2. 播け播け 3. 浦富 4. しゅんかね 5. ねんごろ女 6. 浜千鳥 7. 近雲 8. 芦花部一番 9. 高さ坂 10. 港笹草 11. ほう女童 12. 塩道長浜 13. 東明雲 14. アガンムラ 15. 岬頓原 16. 屋仁川ぬ沙魚 17. 安実主 18. あじそい 19. 一合二合 20. 赤木名観音堂 21. ちえんちえん 22. 今ぬ風雲

・歌集 KA2：「民謡八月踊りの唄宇宿方面で唄われている唄を中心に・・・」

歌集 KA1と同様のスタイルで、B4の原稿用紙28枚からなり、やはり松田宝蔵氏が名瀬市在住時に作成されたものと思われる。書式も構成も概ね歌集 KA1に準じており、やはり氏の直筆からなる。ただし KA1、KA2ともに具体的な成立年が不明のため、両者の前後関係は分からない。構成は、KA1における9. が省略され、また KA1の13. 14. がひとつにまとめられているので、13部構成となっている。KA1と同様、クズシとアラシャゲの使い分けが行われている。歌集の最後には、方言発音記号表が付けられ、表には記号と発音例の双方が記されている。方言の共通語化が進行している現在、この表の存在は集落民にとって大きな意味を持つであろう。また原稿用紙欄外には注釈が多く記されている。掲載された歌詞は総数250首（含重複歌詞）である。

掲載曲は、1. 祝し°き° 2. 播け播け 3. 浦富 4. しゅんかね 5. ねんごろ女 6. 浜千鳥 7. ヒヤルガフェ 8. 近雲 9. 芦花部一番 10. 高さ坂 11. 港笹草 12. ほう女童 13. 塩道長浜 14. 東明雲 15. あがん村 16. 岬頓原 17. 屋仁川ぬ沙魚 18. 安実主 19. あじそい 20. 足くみくみ 21. 赤木名観音堂 22. ち°えんちえん 23. 今ぬ風雲

・歌集 KA3：「民謡八月踊りの唄\*宇宿方面で歌われている唄\*」

唯一の活字印刷された歌集で、B6の42頁からなる。昭和40年代、名瀬宇宿校区郷友会青年部発足時に作成したもので、KA1、KA2と同じく松田宝蔵氏が編集、氏の手元にあった原稿を元としている。書式・構成はだいたい歌集 KA1に準じているが、本書では発音記号は省略されている。構成は KA1の9. 11. が省略され13. 14. は部立て以外に掲載。歌い止め編として新項目が

増えているため、12部構成となっている。各歌詞毎でないので詳細はわからないが、歌集の最後に伝承者名が記されている。掲載された歌詞は230首である（重複歌詞を含む）。また、本歌集ではKA1、KA2に見られるようなアラジャゲ・クズシの別はなく、総てアラジャゲに統一されている。

掲載曲は、1. 祝着け 2. 息子撒け撒け 3. 浦富 4. しゅんかね 5. ねんごろ女 6. 浜千鳥 7. 近雲 8. 芦花部一番 9. 高さ坂 10. 港笹草 11. ほう女童 12. 塩道長浜 13. 東明雲 14. あがんむら 15. 岬頓原 16. 屋仁川ぬ沙魚 17. 安実主 18. あじそい 19. あしくみくみ 20. 一合二合 21. 赤木名観音堂 22. 今ぬ風雲 23. チエンチエン

• 歌集 KA4 : (書名不明)

松田宝蔵氏が昭和17～18年頃、出征者に手渡しした手書きのガリ版刷り原稿歌集。当時、松田氏は出征する若者が無事帰還した時に歌えるようにと20人くらいに渡したという。書式・構成はやはり歌集KA1と同様と思われるが、戦中の原稿ゆえ表紙をはじめ原稿の幾つかが散乱し、現在では箕輪中栄氏（宇宿集落在住）が部分的に所有しているのを確認するのみである。

• 歌集 KB : 「八月踊りの唄」

昭和30年頃に前田篤夫氏（昭和8年生）と大瀬義一氏（大正14年生）（共に宇宿集落在住）により作られた原稿を元に宇宿部落会が昭和61年9月に作成したもので、B6、40頁からなる手書きコピーである。構成は各踊りの元歌と共通歌詞に分かれて編集されている。（元歌56首、共通歌詞59首の計115首）。書式は漢字・仮名が混ざって、元歌は歌われる通りの形で記されている。踊りは19曲掲載され、共通歌詞はできるだけナラベに近い形に規範的に並べられている。これもKA1～KA3同様当時の規範的なナラベのあり方を見せていると言えよう。

掲載踊り曲は、1. 祝つけ 2. まけまけ 3. うらとみ 4. ハイソーラ 5. しゅん金くわ 6. みなとささくさ 7. しゅみちながはま 8. あがれあきぐも 9. 近雲 10. 高さの坂 11. ほう女童 12. 屋仁川ぬ沙魚 13. 安実主 14. あしくみくみ 15. 赤木名観音堂 16. 一合二合 17. 今ぬ風雲 18. あがんむら 19. みさきとんぱら

以上、5冊の歌集について、特徴を述べてきたが、その中には多くの問題点が含まれている。それらすべての翻刻や詳細な検討は本稿の目的から外れるため行わないが、ここで考えるべき点は踊り曲の掲載数とその関係である。特に〈あじそい〉、〈一合二合〉、〈足くみくみ〉についての扱いであるが、KA1には〈あじそい〉の元歌（主と記載）として現在の〈足くみくみ〉の元歌が記載され、その他に〈一合二合〉の踊りが記載されている。また、KA2では〈あじそい〉の元歌（主と記載）として現在の〈一合二合〉の元歌が記載され、アラジャゲ（クと記載）として現在の〈足くみくみ〉の元歌が記載されている。また、現在の伝承では、〈あじそい〉は〈足くみくみ〉のことだという認識もあることから、色々な推測をもたらしてくれる。これらの踊りについて、ここに紹介した歌集が作成されてきた期間においても、踊りの曲名や元歌が大きく変化してきたことを想像させる。近隣集落にも〈あじそい〉等同名曲の元歌があることなどから、踊りの伝播経路や一集落内での踊りの変遷について示唆を与えるものである。

上記の歌集に収められた規範的ナラベの数は、KA1が43首に対してKA2は47首、KA3には46首記されている。これらを筆者が集落の人々に教えていただいた規範的ナラベと照合しても、若干の差異が認められることから、規範的ナラベの並び順は絶対的なものとは言えず、そこにはナラベとして認識伝承されていく過程での個人差などがうかがわれる。

それらの諸問題については別稿に譲ることとして、これらの歌集を考察することにより、集落の半世紀にわたった集落の人々の、八月踊りの歌詞に対する反省的認識の歴史を読み取ることができるだろう。<sup>(注17)</sup>

今まで、集落の人々の反省的行為として成立してきた歌集について述べてきたが、人々には実際には記録がなされなくとも、人生の中で度ある局面においてそれらの歌詞を格言のように思い起こし、人生生活を導く知恵や指針としてきている。例えば予期せぬ昇進や栄達に慢心する心を戒めるような時には、「山ぬ木ぬ高さ 風に憎まれる 気分高さ持ていば 他人が誇う」（山の高い木が風に憎まれるように、人間も気持ちを高く持って高慢になると他人から笑われる 資料1 252）と自重の歌を思い起こす。また、不安定な自分の人生に対して、「年齢や取てい行きゆり 先や定まらぬ 荒海に浮ちゆる 舟ぬ如に」

(年は取って行くが自分の指針は決まらない、丁度荒海に浮かんだ船のようだ資料1 178) と、不安な心境を歌に託したりするのである。

それでは、八月踊りの歌詞は、実際に演唱される場においてどのように扱われているのであろうかまた、前述の諸歌集が示している歌詞の持つ意味をどう解釈したらよいのだろうか。これらの歌詞について集落の人に尋ねると、さきに説明したいずれの歌集にも載っていない歌詞や、その人なりの歌詞のヴァリエーションを聞くことがたびたびある。これは伝承者による伝承経路の差異や、時代や男女差からくる歌詞の変化を示すものと考えられる。

また旋律や舞踊に関して、実際の八月踊りの場以外で旋律だけを歌うなど、限られた局面だけを意識的に取り出して確認するような場合があるのであろうか。宇宿集落では、旋律や舞踊を記録した旋律集・舞踊集などというものは現在確認していない。それは、歌詞に比べて、旋律・舞踊などは記号化が困難だからであろう。しかし冊子にこそなっていないが、身体によりこうした意識的な確認行為をすることはある。たとえば、集落の若者等に八月踊りの勉強会を開いて教えたりする場合がそうである。しかし、八月踊りは、本来踊りの場において踊り歌って見よう見まねで覚えていくのが自然な教習の方法であり、実際踊りの場で若者に指導する年輩者を見かけることも度々ある。こうした実際の踊りの場における八月踊りの習得においては、まず踊りの足のステップ（アックミという）から覚え、次にそれに合わせて手の振りを覚える。アックミは踊りの輪の中で向い合いになる年輩者の踊りを見ながら覚えるのが普通だという。ただし最近、大島各地では学校で子供達に八月踊りを教えているので、今後、集落間に存する踊りの微妙な差異に対する意識が薄らいでいくように思われる。

## 5 歌の掛け合いにおけるナラベの構造－歌集からみた規範的ナラベ－

では、歌詞が知識として、また実際の踊りの場においてどのような形で表現されているのであろうか。まず、前章でも記したような「人々が本来はこうい



う順序で歌われるべきと考える、いわば規範的認識ともいえるナラベ」である規範的ナラベという視点から、資料2の10. 歌い返し編を手がかりに考察していくことにする。

まず、KA1-108～KA1-118を見てみる。歌詞表記は資料2に準じた。

KA1-108 貴方達創あらぬ 私達始め° あらぬ 昔祖先ぬ 慣例掟

KA1-109 昔祖先ぬ 島建て° ぬ悪さ 加那が島吾島 間切変し

KA1-110 加那が島吾島 糸縄ばかり° 面影ぬ立て° ば 手繰り寄せ° ろ

KA1-111 面影や立ちゆり し° ぎ° ららぬ時や 童声立てて° ナ° 泣こば  
かり

KA1-112 童声立てて° 泣枯やし° るな 泣枯やし° れ° ば 他人が笑う

KA1-113 他人からや誇る 親からや折檻る 折檻て° 折檻殺るし 親ぬ  
迷惑

KA1-114 鼓ぐわや打て° ば 馬の皮ど° 打ちゆる 継子や打て° ば 百名  
立ちゆり

KA1-115 遊び好き吾や 探みて° 探み° ららぬ 島ぬ尻口に 探み° て遊  
ぼ

KA1-116 島ぬ尻口に 探み° きれ° ば探み° れ° 汝達に探み° られぬ  
吾やあらぬ

KA1-117 是程ぬ遊び 組立てて° からや 夜ぬ明けて 太陽ぬ 上がる迄も

KA1-118 ナ夜む明け加那志 鶏む啼て° がなし 是程ぬあそび止み° がな  
りゆむ

(次節への連結に使用される部分を下線で示した)

KA1-108～112では、すべて前節のC句を受け継いで反復していることがわかる (KA1-110～111はC句を変形、KA1-111～KA1-112はCD句を反復、ただしD句は変形)。なお、本稿では琉歌形式の音数律8・8・8・6の各句をA句、B句、C句、D句と呼ぶことにする。KA1-108では「貴方達が始めたのではない。私達が始めたのではない。昔の御先祖様が躰定めたものだ」と祖先から受け継いだ慣例という民俗的な歌詞の内容を歌っているが、KA1-109になると「昔祖先ぬ」という語句により連結して、「昔の先祖の集落の作りは悪い。彼女が住む集落と、私が住む集落との間に境界を作っているから」と、恋の悩み

から行政区画の苦情を訴えるというように、歌詞の内容が変わっている。ここでは歌詞の連結を支えるテーマが、「祖先」から「恋」へと移行していることがわかる。次節の KA1-110 では「(そんな行政区画など関係ない、) 愛しい彼女の住んでいる集落と自分の住んでいる集落とに糸縄をかけて思い出したときは手繰り寄せろ」と、悩みに対する返答を C 句の「加那が島吾島」から受け継いでいる。歌詞の連結を支えるテーマは変わらず「恋」である。そして、ここまで連結を支えたテーマは「昔祖先」、「加那が島吾島」と祖先や島に関わるものであったが、KA1-111 への連結からは彼女の「面影」となり、面影の立った切ない気持ちを「童声」で表し、それに「泣く」を結びつけ、次節 KA1-112 への連結で「童声立てて° 泣枯やし° るな」と受け継いでいる。

次に、KA1-113 では「そこでは泣いたりしていると他人に笑われてしまう」と、前節の D 句「他人が笑う」を受けて、これまでの連結を支えてきたと「恋」から、「教訓」へと歌詞のテーマが移っている。KA 1-114 は、前歌詞の句を直接には受け継がないが、前節の親が子に折檻するという行為を連想として受け、継子を叩くと噂が立つと言っている。ここでも折檻をめぐる「教訓」が、歌詞連結を支えるテーマとなっている。KA1-115 でも、やはり前歌詞からの句は直接は受け継がないが、前節中の「鼓」から八月踊りの遊びを連想し、更に「遊び」から恋の遊びを連想していると考えられる。ここで歌詞連結を支えるテーマが、「教訓」から「遊び」に転換したことになる。そして歌のテーマは更に「遊び」から男女の恋の駆引きへと移ってゆく。KA1-115 の CD 句を受け継いだ KA1-116 の歌詞のテーマは「恋の駆引き」である。次の KA1-117 では、KA1-116 の「恋の駆引き」から「遊び」という恋にも八月踊りにもつながる歌詞のテーマを連想することで連結し、朝まで遊ぼうと持ちかける。そして KA1-118 では、前節の C 句を A 句で受けて「もう夜も明けて鳥も鳴きだしているけれど、これほどの遊びだからまだまだ止めることは出来ない」と、前節に対する同意の内容の返歌となる。ここでの歌詞連結を支えるテーマは「遊び」である。

このように規範的なナラベの例を数首にわたってみてきたが、この一連の歌詞の連結を支えるテーマは「祖先からの慣例」(1首)→「恋の悩みと返答」(4首)→「教訓」(2首)→「恋の駆引き」(2首)→「遊び」(2首)と、次々

に変化していることがわかる。それ以降のナラベのあり方を以下に纏めてみた。(左段=歌集ナンバー、中段=前節からの連結方法、右段=前節からの連結を支えるテーマ)

KA1-119

KA1-120	節の一部を変化	「遊び」
KA1-121	節の一部を変化	「遊び」
KA1-122	語「遊び」受け継ぎ	「遊び」
KA1-123	語「思う」受け継ぎ	「時、教訓」
KA1-124	C D句受け継ぎ	「逢う節、教訓」
KA1-125	語「水」受け継ぎ	「恋愛」
KA1-126	C D句」受け継ぎ	「恋愛」・返歌
KA1-127	×	「恋愛」
KA1-128	C D句受け継ぎ	「恋愛」・返歌
KA1-129	語「妬る人」を受け継ぎ	「恋愛」・返歌
KA1-130	×	
KA1-131	C D句受け継ぎ	「酒、祝い」
KA1-132	×	
KA1-133	語「女子」受け継ぎ	「恋愛」
KA1-134	句意から連想	「遊び」
KA1-135	C句受け継ぎ	「遊び」
KA1-136	語「面影」受け継ぎ	「遊び」
KA1-137	C D句受け継ぎ	「遊び」
KA1-138	D句受け継ぎ	「教訓」
KA1-139	D句受け継ぎ	「教訓」
KA1-140	語から連想	(「八月踊り」)
KA1-141	C D句受け継ぎ	「戻る節、年頃」
KA1-142	語「何時」受け継ぎ	「祝い」
KA1-143	C句受け継ぎ	「祝い」
KA1-144	語「吾」受け継ぎ	
KA1-145	語「歌」受け継ぎ	「歌」

KA1-146	語「先生」受け継ぎ	「歌」・返歌
KA1-147	CD句受け継ぎ	「歌」・返歌
KA1-148	語「歌」受け継ぎ	「歌」・返歌
KA1-149	語「歌」受け継ぎ	「歌」・返歌
KA1-150	CD句受け継ぎ	「競争」・返歌

(これらはナラベなので総て返歌であるが、節単位で特別にセットになっているもののみ返歌と記した。また KA1-137～139は、資料2においては「(以下前記)」と記された部分であるが、筆者の解釈によりこの3首を想定した。)

このように見てみると、ナラベの連結方法には、以下のような方法が使用されているといえよう。

**\*前節に現れる語句・句を直接に用いて連結する直接連結**

- ・前節の一部を置換させて受け継ぐ連結 (3首)
- ・前節のCD句(下句)を(殆ど)そのまま受け継ぐ連結 (9首)
- ・前節の一句を受け継ぐ連結 (9首)
- ・前節の語句を受け継ぐ連結 (11首)

**\*前節に現れる語句・句を直接には用いず、前節の内容からの暗示連想により連結する間接連結**

- ・前節と同様な意味内容を持つ歌詞を連想し受ける連結 (7首)

このように規範的なナラベは、多彩な連結方法を用いて作られているが、直接連結が最も多く、間接連結は主題を転換させる時などに用いているようである。そしてそこでの歌詞連結を支えているテーマは、「恋」、「遊び」、「歌」、「教訓」などである。これらのテーマには、ここで見てきた規範的なナラベにおける宇宿集落の人々の嗜好がよく現れているといえよう。

八月踊りの奏演中は、歌の掛け合いを展開している意識と、踊りを奏演している意識が常に対立的に、もしくは並行的に存在している。これらのナラベにおいて、たとえば KA1-119～KA1-121の3首は、特に踊りのテンポ感など八月踊りの奏演形態に対する注文の歌詞である。これらは、それまで展開されてきたナラベのテーマを変更する時にも使用されるが、その時の八月踊りの奏演に対して、もっとテンポを速めて踊りを盛り上げたい時に歌い出すことが多い

ようである。

## 6 歌の掛け合いにおけるナラベの構造－八月踊りの場における実際のナラベ－

前章では、歌集にみられる規範的なナラベをもとにナラベのあり方を探ってきたが、実際に八月踊りが奏演される場の中で、ナラベはどの様に行われているのであろうか。ここでは1987年のアラセツ行事での八月踊り奏演における歌詞の記録をもとに、その現れ方を見てゆく。資料3は、アラセツ行事において演唱された全内容である。ここから、ナラベという側面だけ切り取ってダイヤグラムにまとめたのが図1である。<sup>(注18)</sup>本資料の持つ意味等は後述するとして、まず、具体的に図1から読み取れるナラベの技法とテーマについて考察してみたい。以下に実況の場での演唱例を紹介する。演唱例はアラセツ当日の2軒目の3番目の踊りで演唱された〈しゅんかねくわ〉の全歌詞で（資料3参照）、左から演唱歌詞の通し番号、3桁の資料1の歌詞番号、演唱歌詞の順に記した。歌詞表記は資料1に準じた。また、連結が分かりやすいように次節へ直接連結する語句部分に下線を引いた。

〈しゅんかねくわ〉

1. 157しゅんかねくわが節や吾が熟しうしゃが 三味線持ちいもれ着きいてい  
おしいろ
2. 157しゅんかねくわが節や吾が熟しうしゃが 三味線持ちいもれ着きいてい  
おしいろ
3. 157しゅんかねくわが節や吾が熟しうしゃが 三味線持ちいもれ着きいてい  
おしいろ
4. 119今日ぬ祝しゃや何時よりも勝り 何時も斯の如にあらし給れ
5. 211八月ぬ節や繕り戻り戻り 吾等が年頃や な何時戻ろ
6. 264吾等が年頃や夜ぬ暮れいどう待ちゆる 何時が夜ぬ暮れいてい 吾自由  
なりゆり
7. 134是程ぬ遊び組立ていていからや 夜ぬあけてい太陽ぬ 上る迄も

8. 197 ナ夜む明け加那志 鶏む啼ていがなし 是程ぬあそび 止みいかなりゆむい
9. 187 貴方達とうわきや集てい 何時遊でい見りゆり 遊ぶ時やしゅま 解け  
いてい遊ぼ
10. 012 遊ばそが為に 引き寄しいてい置しゃが ひとりゆしいゆしいとう 遊  
でいたぼれ
11. 014 遊び好き吾や 探みいてい探みいららぬ 島ぬ尻口に 探みいてい遊ぼ
12. 152 島ぬ尻口に 探みいきいれいば探みいれい 汝等に探みられる 吾や  
あらぬ
13. 004 遠方から此処に 遊びしが来もし ゆさり夜や此処に 遊でい給れ
14. 255 ゆさり夜や此処に 色々ぬあそび 明日じ面影ぬ 立ていばきゃしゅり
15. 090 面影や立ちゅり 絶難ららぬ時や 童声立ていていな泣こばかり
16. 273 童声立ていてい 泣きがでいやしいるな 泣きがでいやしいれいば 他  
人が笑う
17. 258 他人からや誇う 親からや折檻る 折檻てい折檻殺るし 親ぬ迷惑
18. 020 近辺妨げや 榕樹ぬヤ枝 他人が妨げや なるなヨ加那
19. 252 山ぬ木ぬ高さ 風に憎まれる 気分高さ持ていば 他人が誇う
20. 160 白雲や勝り 風連れいてい行きゅり 吾や汝方連れいてい 行きかなりよ  
むえ
21. 271 吾や汝等連れいてい 行き欲しゃややしいが 先に妬る人ぬ 居れいば何  
しゅり
22. 036 行きょ行きょにすれば 後めささやしいが おろおろにすれば 義理ぬ立  
たぬ
23. 074 有難どうやりょうる 果報しゃれどうやりょうる 来年ぬ稲加那志 畦枕
24. 036 行きょ行きょにすれば 後めささやしいが おろおろにすれば 義理ぬ立  
たぬ
25. 131 今年年加奈志 果報な年加奈志 道ぬ枯草に 真米稔りゅり

この奏演では、まず1.～3.と元歌を男女で3節歌い、次に、4.119で祝いを述べる。5節目ではナラベの始めの歌詞である5.211を歌う。それに返される6.264はC句を受け継いだ直接連結である。この演唱例では、第4節と5節の

「何時」という語句を受け継いだ直接連結からナラベが始められているが、普通は第4節の歌詞(119)は歌わず、歌詞211からナラベが始められる。211と264の2首はナラベ始めの常套句と認識されている。

このあたりから歌詞の連結を支えるテーマは「八月の節」から「夜＝遊び」と移って行く。7.134は「夜」という語句を受けた直接連結であり、連結のテーマは「夜＝遊び」となる。8.197へは「夜・是程ぬ遊び」という語句を受けた直接連結で、同じ連結のテーマのもとで7.に対する同意を告げている。9.187では、8.の同意に対する「遊び」の誘いかけをD句で表現する。ここでは連結を支えるテーマは「遊び」に絞られ、連結も「遊び」という語句による直接連結である。10.012でも連結のテーマは「遊び」で、やはり同じ語による直接連結となっている。11.014から12.152において、連結を支えるテーマは「遊び」から男女の「恋」へと暗示的に発展を見せるが、13.004ではまた「遊び」という連結のテーマに戻って行く。連結方法は、10.～11.は「遊び」を受け継ぐ直接連結、11.～12.はCD句を受け継いだ直接連結、12.～13.は遊び・訪問というイメージからくる間接連結である。14.255から17.258まではCD句、あるいはC句かD句の直接連結でナラベが進行する。13.004～14.255は「遊び」が依然として連結のテーマだが、15.090になると、連結のテーマは「恋・遊び」に移っていく。そして16.273へは連結を支えるテーマは「慰め・戒め」となり、15.への返歌としている。17.258へは、連結を支えるテーマが前節の戒めから「教訓」となり、大きく主題が転換がされている。

ここから3節は、「教訓」を連結のテーマとしてナラベを展開している。18.020、19.252は、共に前節(17.258)の「他人」という語句を受けた直接連結、20.160では「風」という語句を受け継いだ直接連結で、連結のテーマを再び「恋」の方向に引き戻している。21.271は、前節のCD句を受けた直接連結で、前節の返歌として恋のやり取りをしている。ここでも連結のテーマは「恋」である。22.036～25.131は、各家での踊り納めに必ず歌われる常套的歌词である。この演唱のナラベは21.271で終わっている。

このナラベの中では、16.～18.にあるように「他人」対「自己・家族」のあり方や、それに対する人々の視点というものが表現されている。また18.～20.における直接連結では、他の歌詞へのナラベの可能性もあるにも関わらず、そ

れらが選択された背景には、枝→木=(山)→白雲という別の連想も働いての選択と思える。この演唱では25首の演唱のうちナラベに関わらない元歌1.～3.と、各家での踊り納めの歌詞22.～25.の7首を除いた18首すべてがナラベで歌われている。

ここで〈しゅんかねくわ〉におけるナラベの歌詞連結を支えるテーマ、連結の方法、連結を媒介する語句について整理してみよう。まず、連結を支えるテーマの内訳を見てみると、連結18回のうち、「恋」8回、「遊び」7回、「教訓」3回、「祝い」1回、「節」1回となっている。また、連結を媒介する語句としては、「遊び」4、「夜」3、「他人」3、「鳥、尻口」2となり、あとは「何時」「風」など6種類が1回ずつある。また、連結の方法では直接連結16回、間接連結1回が見られる。ここではこれ以上の演唱例はあげないが、ナラベの技法という側面から述べれば、間接連結に比べて直接連結が非常に多いことがわかる。そして、連結を支えるテーマは「遊び」「恋」「教訓」などが多く、連結を媒介する語句は「遊び」「夜」などが多い。これらは実際の踊りの場において人々が好んで選択するテーマであり、ナラベを行うにあたって好んで用いる連結方法といえよう。

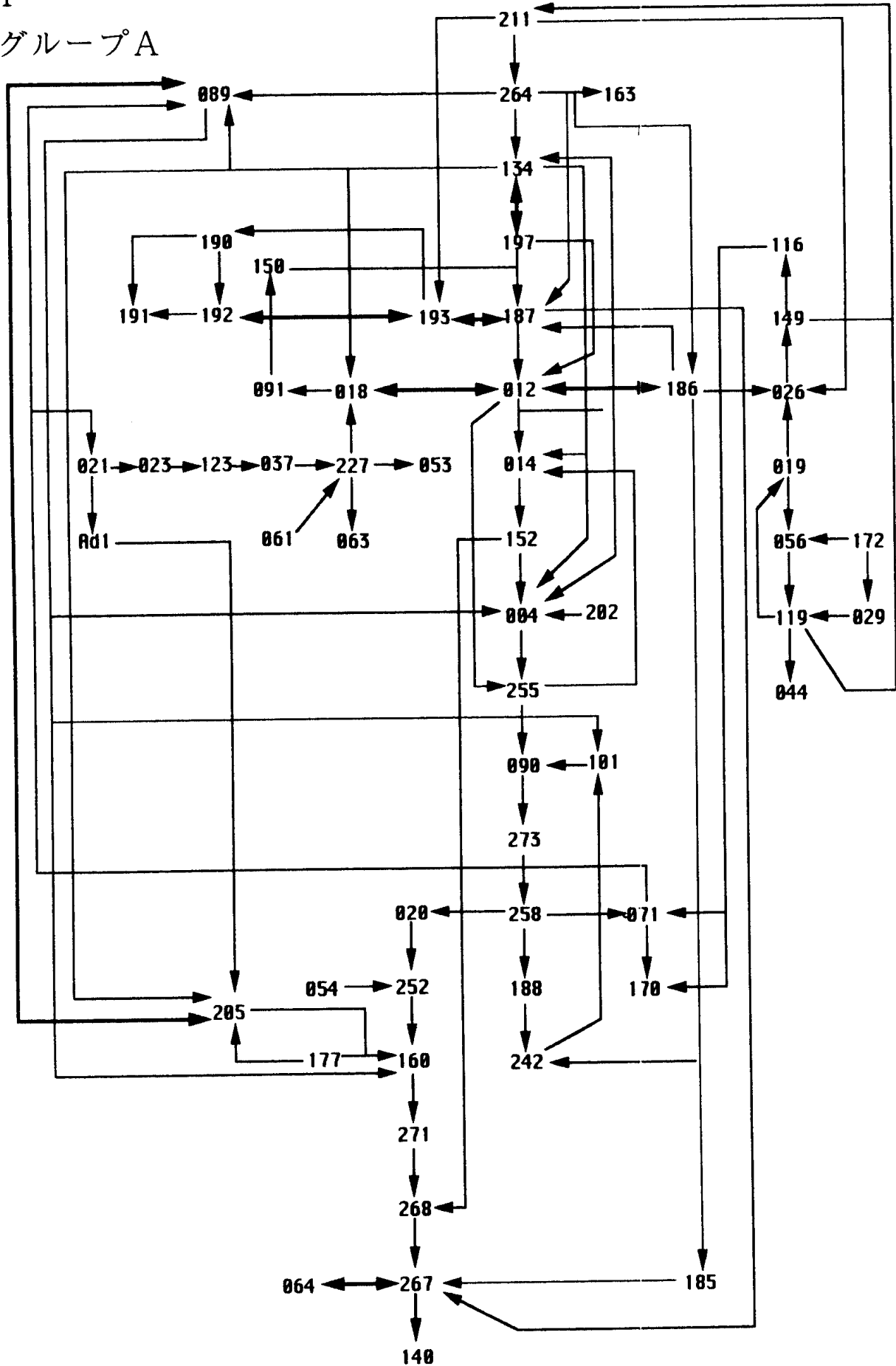
次に、前節で検討した規範的ナラベ（資料2 10. 歌い返し編参照）と、ここでの実況のナラベを比較して見よう。両者で同様なナラベを行っているものに(1)211→264、(2)134→197、(3)014→152、(4)255→090→273→258、(5)160→271が挙げられる。ここでは実況におけるナラベとして紹介した17首の中、規範的ナラベで見られる歌詞と一致する歌詞が5例12首存在する。これはかなりの高率で、規範的ナラベが実際の演唱においても歌われたことを示している。ここでは実況演唱をすべての規範的ナラベと照合することは行わない。しかし、宇宿集落で規範的ナラベとして認識されている歌詞群が、かなりの割合で実況演唱にも盛り込まれているといえる。

そこで、図1を見てみよう。図1は大きいグループAと小さなグループB、Cからなっている。それぞれに記されている数字は資料1での歌詞番号であり、矢印でナラベとしてあらわれた歌詞の連結の方向を示した。ここに記したナラベ、すなわち歌詞連結は、最低一度は実況演唱において歌われたものである。実況演唱でのナラベはまず、ナラベ始めの歌詞211（グループA）から始まり、

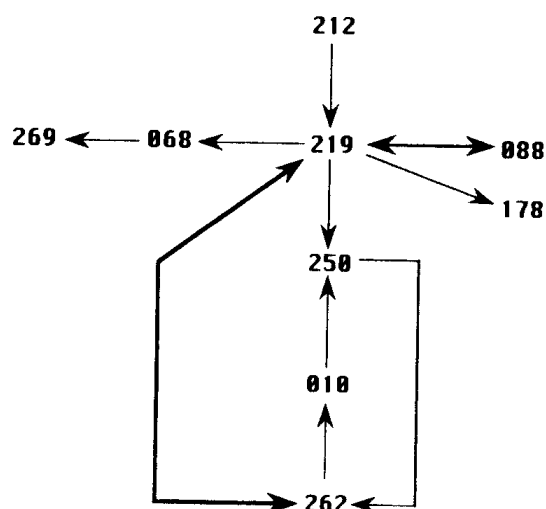


図 1

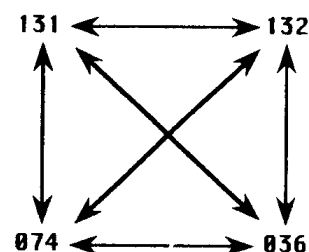
グループA



## グループB



## グループC



歌詞264を経て展開されて行くのが常套的であるため、必ず「八月・夜」→「遊び」という連結を支えるテーマに基づく展開が行われる。先に示した演唱例は、この211から258まで中央ラインを下に進み、258で左下のラインに移った例といえよう。図1は歌詞の持つイメージの多様性や、主題展開の可能性を見る上で重要な意味を持つと思われる。グループBは、グループAの歌詞群とは独立したナラベの世界を形成している。すべてテーマが「旅」や「別れ」に関わる歌詞である。グループCは、家探しにおける各家での演唱の歌い納めに用いられる歌詞群で、各曲の最終節は必ず036か074が歌われる。

この図で描き出されているナラベの歌詞連結をよく見ると、歌詞によって出入りの矢印の数が異なることに気づく。矢印の数が少ない歌詞は、規範性が強く固定化したナラベに属するといえる。また、出入りの矢印数の多い歌詞は、ナラベにおいて連結のテーマ転換を行う分岐点であったり、多様なイメージを持ち、様々な連結に使用しうる歌詞（テーマが「遊び」のものが多く）だといえる。ここで、グループAについて更に詳しく検討してみる。まず、ナラベ開始の211から012（連結を支えるテーマが「八月・夜」→「遊び」）あたりまでは出入りの矢印が多い。そして089や192、193を中心とする左上歌詞群や、186や026を中心とする右側の歌詞群にも進むことが多い。つまりこの領域では歌詞連結の可能性が多様であるといえる。二つの歌詞が双方向の矢印（太線←→）で結ばれている、つまりどちらからも連結が可能なものは、グループAには7組あるが、そのほとんどがナラベ始めの211から012付近に集中している。

しかし、次の014から258（連結を支えるテーマが「遊び」→「教訓」）までは連結は固定的で規範性が高く、自由度が低い。また下部の020から267（連結を支えるテーマが「教訓」→「恋」→「歌」）や、左上部の021から227（連結を支えるテーマが「美」）も、やはり歌詞連結が固定的で規範性が高い。

このようにグループAには、歌詞連結が多様で自由度が高い部分と、固定的で規範性が高く自由度が低い部分があることがわかる。実際のナラベでは後者の固定的な連結の部分もよく歌われている。このことから、宇宿の八月踊りにおけるナラベでは、「歌は勝負」といわれながらも、掛け合いの全てが機知によるとっさの歌詞選択を迫られる緊張した勝負というわけではなく、固定的な常套的連結をナラベの中に散りばめることにより、歌い手の心理の中に緊張と緩和のリズムをつけている。これが八月踊りの奏演において、長時間歌の掛け合いによるナラベの展開を可能にする一因となっているとも考えられる。

八月踊りにおいて展開されるナラベを、生きたイメージとして捉えるために、更に別角度から考察する。表2の「演唱歌詞頻度表」を見てみよう。これは、1987年度アラセツ行事での八月踊りの演唱のうち、儀礼的に特別な意味を持つ〈祝つけ〉を除く曲における、全演唱歌詞を頻度順に示したものである。これは宇宿の人々が八月踊りの奏演において、選択する歌詞の嗜好を反映しているといえる。そこで、上位30位までを図1と照らし合わせてみよう。表2の1位（211-135回）、2位（264-122回）、3位（074-109回）は他より圧倒的に演唱回数が多いが、これらはナラベ始めの常套句と歌い納めの常套句であり、各曲のナラベの始めと終りにおいて必ず演唱されるからである。7位（036）、8位（131）、11位（132）も歌い納めの歌詞（図1のグループC）である。15位（148）は〈まけまけ〉の元歌である。また、5位（058）はムラ褒めの歌詞であり、様々なナラベにおいてよく歌われる。

ナラベ始めの常套句（211→264）を歌い終えると、次にはどのようなナラベが展開されるのだろうか。図1では、選択肢として→134、→089、→163、→187、→186が挙げられているが、表2には163、186は上位30位までには現れず、134（4位62回）、187（12位34回）、089（27位22回）の割合で歌われている。そのなかで264→134のナラベは非常によく選択されていることがわかる。そ

表2 1987年度アラセツ行事の八月踊りにおける演唱歌詞頻度表

・1987年度宇宿集落のアラセツ行事三日間の八月踊りにおける、〈祝つけ〉を除く曲における全演唱歌詞を、頻度順に上位30首まで示したもの。左端の数字は頻度の順位番号、中央は演唱頻度、右端は歌詞番号（資料1）

頻度順位	演唱頻度	歌詞番号	頻度順位	演唱頻度	歌詞番号
1	135	211	15	31	148
2	122	264	17	29	090
3	109	074	18	27	273
4	62	134	19	26	193
5	50	058	19	26	004
6	42	012	19	26	202
7	41	036	22	25	195
7	41	131	22	25	271
9	39	119	24	24	160
10	37	026	25	23	255
11	36	132	25	23	091
12	34	187	27	22	089
13	32	149	28	21	268
13	32	197	29	20	258
15	31	018	30	19	116

の134からの連結の選択肢には、→197、→014、→089などがあるが、表2では197（14位32回）、089（27位、22回）で、014は上位30位には現れない。図1では089に出入りする矢印の数が8つもあることから分かる通り、この歌詞を使う連結は多様であるといえよう。そこでイメージされるテーマは「夜＝遊び」、「恋」である。また頻度順位で14位の197からの選択肢には、→134、→012、→187があるが、これらは134（4位62回）、012（6位42回）、187（12位34回）とすべて頻繁にナラベで使用されている。特に134とは、前述のように双方向の連結がなされており強い結び付きが見られる。またナラベにおいて、

197は134からしか連結が行われていないことがわかる。

それでは先ほどの8つの矢印の出入りを持つ089を例として、図1から連結を支えるテーマがどの様に展開されるのを見よう。089に連結する歌詞には、071→、134→、205→、264→が、089から連結される歌詞には、→004、→101、→160、→205がある。

このうち264→089では、前述の通り「夜」を連結媒介の語句として、「夜・遊び・恋」が連結を支えるテーマとなる。134→089ではやはり連結媒介の語句は「夜」であるが、「八月踊りの遊び」→「恋」と、連結を支えるテーマが展開される。また、071→089では「加那・夜」を連結媒介の語句とし、連結を支えるテーマは「恋」となるが、071へと連結してくる170→や258→からでは、「教訓」が連結を支えるテーマとなっており、それぞれの連結を支えるテーマの展開から089に行き着くことがわかる。次に089から出て行く矢印に注目してみると、089→004のナラベでは「夜」を連結媒介の語句としており、「恋→遊び」と連結を支えるテーマが展開している。089→160、089→101では、それぞれ「雲・加那」、「加那」を連結媒介の語句として、「恋」が連結を支えるテーマとなっている。205←→089では「加那・夜」が連結媒介の語句となり、「恋」が連結を支えるテーマとなる。その089→205から→160、→271を經由して、267→140と進むラインでは「歌」が連結を支えるテーマとなってゆく。

つまり、歌詞の内容が「恋」である089を中心とする歌詞連結では、「八月踊りの遊び」「教訓」「歌」「遊び」「恋」等が連結を支えるテーマ群となっている。このように089を中心として見てみても、多様なテーマでのナラベ、すなわち歌詞連結が可能となっているのである。

ここで表2に登場した歌詞の内容を順位順に20位程度まで羅列してみよう。ただし歌い納めの歌詞と元歌であるものは除いた。

(1)八月 (2)夜・遊び (4)遊び・夜 (5)宇宿 (6)遊び (9)祝い (10)節 (12)遊び (13)節・恋 (14)夜・遊び (15)遊び (17)遊び・恋 (18)恋 (19)遊び (20)遊び

やはりここでも「遊び」「恋」などが歌詞の内容における中心的テーマであることが伺える。

このように規範的ナラベと実際の演唱でのナラベを、いくつかの視点から考察してきたが、いずれからも「遊び」「恋」などが中心的なテーマとして浮か

び上がってくる。つまり八月踊りのナラベにおいて、これらの内容をもつ歌詞が中心となって「八月←→踊り←→遊び←→恋←→踊り←→歌←→教訓」というような連環的テーマ構造を形成していると思わせる。これが八月踊りの演奏において、宇宿の人々に体験される八月踊りのエイトス的な核であると考えられる。

この節の最後に、八月踊り各曲に固有の歌詞として曲の始めに歌われる元歌について言及しておきたい。まず元歌とナラベの関係では、元歌を何首か歌った後、前述の「ナラベ始めの常套句」からナラベを始めることが一般的である。しかし資料3の(074)〈浜千鳥〉、(077)〈港笹草〉等のように、すでに元歌からナラベが始まっている例も散見できることから、宇宿の人々は潜在的に、曲の最初から(元歌を歌い始めた時から)ナラベを展開するという気持ちを持っていると推測することもできる。

次に、元歌と共通歌詞の関係についてだが、資料2には、〈播け播け〉のアラジャゲで歌われる歌詞として「曲り高嶺なんて・・・」という元歌が載せられている(資料2 八月踊主題歌編 2. 〈播け播け〉参照)。しかし現在ではこの歌詞は歌われず、そのかわりに共通歌詞の119(資料1番号)を歌っている。また、〈ハイソーラ〉においても、現在ではまず共通歌詞の211を歌ってから、その後元歌を歌うことが多い。

一般に歌の伝承過程では、様々な局面で様式の盛衰・変化がおこりうる。ここでみたように、ある曲固有の元歌がよりなじみの深い共通歌詞に交代していく現象や、その際の歌詞選択の嗜好性をここに認めることができるのである。

## 7 資料解説

### 資料1. 宇宿八月踊り歌詞一覧

本資料は第4節で紹介した5冊の歌詞資料(「資料3号八月踊りの唄—宇宿方面で唄われたものを中心にして—」「民謡八月踊りの唄宇宿方面で唄われている唄を中心に・・・」「民謡八月踊りの唄\*宇宿方面で歌われている唄\*」「八月踊りの唄」と箕輪中栄氏所蔵松田宝蔵著の戦前の八月踊り歌集)を基とし、その他に実況演唱にしか現れなかった歌詞など追加歌詞を加え作成されて

いる。資料利用の便宜を図るため、歌い出しの文字で五十音順に並べた。歌意については、主に宇宿在住の箕輪中栄氏の御教示に基づいている。他に池田ウメ子氏、浜崎教氏、大瀬とね子氏、箕輪国重氏、箕輪忠一氏等から御教示いただいた（すべて宇宿集落在住の方々）。本資料が、宇宿に伝承されてきた歌詞を完全に網羅できたわけではないが、ほぼ主要なものは収められたと思っている。ただし実際の伝承状況では、集落の人々がすべて一様な歌詞伝承を持っているわけではなく、教習の経路や男女の差、世代により伝承されている歌詞やその解釈は異なっている。また、歌詞自体も伝承の過程で様々に変化しうるもので、あくまで現時点での聞き取りによる、暫定的なまとめであると考えていただきたい。

資料2. 「資料3号八月踊りの唄—宇宿方面で唄われたものを中心にして—」  
 歌詞翻刻資料 本資料は松田宝蔵氏（明治40年～昭和54年、第4節参照）作成による「資料3号八月踊りの唄—宇宿方面で唄われたものを中心にして—」という歌集の翻刻である。本歌集を翻刻資料とした理由としては、(1)現在宇宿で確認できるどの歌集も（第4節参照）、伝承歌詞の全てを包括していないが、本歌集が最も多くの歌詞を掲載している（重複歌詞を含む）、(2)踊りに付随する曲をアラシャゲとクズシに分けて記載している、(3)2種類のナガレを掲載している、(4)松田宝蔵氏独特の方言発音記号が記されている、等が挙げられる。逆に本歌集の資料的弱みとしては、他の歌集にはこれより多くの踊り曲が記されているものもある点である。これに関しては先に言及した通り、今後の課題としたい。ともかく宇宿独自の方言に基づく八月踊りの歌詞を、日本語表記の範囲内で如何に文字化し、後世に伝えるかという難題に正面から取り組んだ歌集といえる。

### 資料3. 実況演唱歌詞資料

これは、1987年宇宿集落におけるアラセツ行事（9月23日～25日）の八月踊りで演唱された全歌詞の記録である。歌詞数が2531節と大量のため、紙面上の都合もあり各歌詞の詳細は記さず、歌詞番号を記した。

## 8 おわりに

宇宿集落に滞在していると、宇宿集落ならではの特色を感じることもある。例えば、集落の人々が生活の中で醸し出す雰囲気である。筆者がこれまでに調査をおこなった笠利町笠利との比較をしてみると、両集落が数 km しか離れていないにも関わらず、受ける印象がかなり違っている。笠利では朝聴こえてくるのは、紬の機織の音であり、外の川は染色により彩られている。それに対して、宇宿集落で耳にするのは朝夕の畑作業へ出入るトラクターの音であり遠くに見える田園風景である。宇宿と笠利では紬工の数では大差がないのに、笠利は紬作成の各過程の職人がおり、宇宿ではむしろ農業に重きを置き、県のモデル指定地区にもなっている。これは集落の人々が何を集落の重点産業としているか、という選択の違いでもある。

また、他集落の人による「宇宿の人は心が強い」という言葉に表れているように、自分の信念をしっかりと持って行動する人が多い集落であるような印象を受ける。それは、集落での会話や八月踊りの場での様子などからも伺える。筆者は宇宿において次のような体験をした。ある時踊りの場の中で、近年あまり踊られなくなった踊りをそれぞれの記憶をもとに踊ろうと試みた時があった。そこで集落の人々は各人が記憶している踊りの違いなどをめぐって、何分間にも渡る真剣な討論を行ったことがあった。そこでは、お互いに八月踊りに対して信念を持つもの同士の熱い思いを垣間見ることができた。

本論で明らかにしてきたように、八月踊りの中ではナラベとって男女の間で歌詞のキャッチボールを会話のごとく行っている。たとえば、一方が歌を出し損ねた時には他方がそれをフォローしたり、一方が相手を椰楡した後には逆に相手を気遣い、椰楡したことに対するお詫びの歌を歌ったり、歌われている詞それぞれがあたかも真剣な会話のような意味を持ち、言葉のように交わされている。「八月踊りの輪は、集落の輪 (=和)」といわれる。また、老若男女分け隔てなく言いたいことが言える場だともいわれている。歌が思いを伝える方法ということを筆者が体験した具体例がある。1987年のヤサガンで、ある家の庭で踊っていたところ、急に大雨が降ってきた。その時、庭のガレージ内で行われた踊りでは「今降っている雨が私は恨めしい」という内容の歌詞が即座に



歌われた。こうしたことからやはりただテーマを展開させていくためのナラベではなく、その時々思いが歌を通してナラベという手法によって表現されていることが確認できる。

更に一つ挙げるなら、宇宿集落の人々のもつ調和性があると思われる。大きな変化を好まない農業ジマの持つ保守的な特質を保ちながらも、県のモデル指定集落となっているごとく農業開発にも努力している。この調和感が、八月踊りにおいてもナラベ等に表れているように感じられる。規範的なナラベのあり方が認識されているにもかかわらず、実際場で歌われるナラベでは、展開される歌詞が多数にわたり、それらが多様な変化を見せながらも、ある体系性が保持されている、その調和感と同質に思える。

本稿では紙面の都合もあり、宇宿の八月踊りの概観と、諸歌集や歌の掛け合いにおけるナラベという歌詞に関わる局面のみに限定して報告した。八月踊りにおいて同じく重要である音楽・舞踊の局面については、また稿を改めて報告することとしたい。

最後に、筆者が長年参加している「東京芸術大学民族音楽ゼミナール」（代表：小柴はるみ氏）より資料を提供戴きましたことをここにお礼申し上げます。遅筆な筆者を長期に渡って見守って下さり、優しく親切にいろいろと教えて下さった宇宿集落の皆様に心から感謝致します。

## 注記

- 注1 沖縄県立芸術大学附属研究所平成6年度共同研究員。
- 注2 沖縄県立芸術大学附属研究所講師（伝統芸能部門）。
- 注3 いくさ浜と呼び、当時の状況を思わせる場所がある。
- 注4 1987年アラセツ行事における八月踊りの詳細な次第等については内田敦1990参照。
- 注5 この「トーサイ」は後述する種下ろし行事からきたものである。
- 注6 この付随旋律へ移行する際、舞踊にも変化をみせるものがあるが、その場合はクズシと呼んでいたようである。第4節参照。しかし、現在は一般にはその別は認識されておらず、両方ともアラシャゲと呼んでいる。
- 注7 この共通歌詞とは、研究者の用語であるが、現在ではその用語を集落の人々も使用している。また、旋律固有の歌詞のことを研究者は元歌（もとうた）と呼ぶが、これも現在では集落の人々においても使用されている。
- 注8 表1は宇宿集落に伝承する、あるいは伝承していた踊り曲一覧である。ゆえに現在は伝承されていないものも含まれている。その区別は一覧に明記してある通り。
- 注9 集落の伝統的行事は統合・簡略化されたにもかかわらず、学校行事・町行事など地域行事が増したため、年中行事は以前より増加しているという。
- 注10 本来、種下ろし行事はアラセツ後の初庚申に行われていた。両行事を一度に行うようになった頃、別々に行っていた時の2倍以上の資金が集まったという。
- 注11 1994年の空港イベントでは舞台の入場曲に敬老会で歌われる「イソ」を歌い、入場後にはアラシャゲのような形で「イソ」から続けて「祝つけ」のアラシャゲを歌うなど若干の演出が行われた。
- 注12 お宮から始まり、集落の端から端まで踊るが、その家の踊る順番は踊った家に対して門口の向きの近い家の順。
- 注13 ヤサガンは各家がそれぞれ踊りに参加する人々に料理をふるまうため、一軒あたりの経費がかかる。当時はそのふるまいが盛んに行われたため各家の負担が増大した。
- 注14 名瀬市内に集落郷友会が存在するにも関わらず、名瀬宇宿校区郷友会を設立したことには全国宇宿連合会が校区単位の組織であり、その傘下に入る為に昭和42

年に組織されたようである。

- 注15 万屋集落・城間集落は小規模集落の為、2集落合併で郷友会を設立している。また崎原出身者は本来須野校区に入るが、当時名瀬在住者が少なく郷友会組織が作れずに思案していたところ、本郷友会設立の際、一員となったという。
- 注16 筆者は「資料1号」、「資料2号」なるものの存在は確認していない。
- 注17 松田宝蔵氏作成の歌集について、集落・名瀬宇宿郷友会等から、方言の意味と同義の漢字を当て後世に歌詞内容を伝えたことに一定の評価を得ている。
- 注18 本資料は統計的な分析を行っていないため、以後若干の修正もあると思われるが、大量の演唱データを基に作成されたものなので、宇宿のナラベの概要と言ってよいだろう。紙面上、図中では歌詞を資料1の歌詞番号で表してある。また本稿中においても、同資料の歌詞番号で以下述べることにする。
- 注19 1987年アラセツ祭り日2軒目3曲目の実況録音の中での奏演歌詞〈しゅんかねくわ〉(資料3参照)である。

## 参考文献

- 跡見学園女子大学民俗文化研究調査会『民俗文化－第7号－』1983
- 池野無風『奄美島唄集成－池野無風遺稿集－』道の島社 1983
- 宇宿校区顕彰会『宇宿校区顕彰之碑建立記念誌』1988
- 宇宿部落会『八月踊りの唄』1986 私家版
- 内田敦「奄美大島笠利町宇宿の八月踊り」『民俗芸能研究』11 1990
- 内田敦「奄美大島住用村西仲間の年中行事における八月踊り」『南日本文化』23 1991
- 内田るり子『奄美民謡とその周辺』雄山閣 1983
- 恵原義盛『奄美生活誌』1973 木耳社
- 恵原義盛『奄美の島唄 定型琉歌集』海風社 1987
- 恵原義盛『奄美の島唄 歌詞集』海風社 1988
- 大石泰夫「八月踊りの始源－奄美大和村の事例から－」『民俗芸能研究』11 1990
- 小川学夫『奄美民謡誌』1979 法政大学出版局
- 小川学夫『歌謡の民俗 奄美の歌掛け』1989 雄山閣
- 笠利町『かさり 1994町勢要覧鹿児島県大島郡笠利町』1994

笠利町『笠利町誌』1973

文潮光『奄美大島民謡大観』1933南島文化研究所（文秀人『奄美大島民謡大観 復刻版』1983）

金久正『奄美に生きる古代文化』刀江書院 1963

久保けんお『南日本民謡曲集』音楽之友社 1960

久万田晋「奄美大島城前田の八月踊り－民俗芸能の統合的（文学・音楽・舞踊）研究を目指して」1987年度東京芸術大学修士論文 1988

久万田晋「奄美大島城前田の八月踊り－歌詞の局面を中心として－」『東京芸術大学音楽学部紀要』15 1990

久万田晋「奄美大島笠利町城前田の八月踊り歌」『沖縄芸術の科学』4 1991

久万田晋「奄美民謡旋律のリズム構造」小島美子・藤井知昭編『日本の音の文化』第一書房 1994

久万田晋「八月踊り研究の現在－松原武実説を検討する－」『奄美沖縄民間文芸研究』18 1995に掲載予定

久万田晋・寺内直子「奄美大島龍郷町秋名の八月踊り」『沖縄芸術の科学』5 1992

小島美子「日本の音楽文化圏における奄美音楽の位置」九学会連合編『奄美 自然・社会・文化』弘文堂 1982

酒井正子『奄美・徳之島の民俗音楽に於ける伝統と変化の研究－音楽文化の創造性の原点を考える』トヨタ財団1987年度研究助成報告書 1989

山千鶴子「笠利町の八月踊り唄」『徳之島郷土研究会報』6 1973

田畑千秋『奄美名音集落の八月歌』天空舎 1991

田畑英勝・亀井勝信・外間守善『南島歌謡大成 V 奄美編』角川書店 1979

中原ゆかり「奄美大島佐仁の八月踊り－歌と踊りをめぐる発話の民俗誌－」『口承文芸研究』15 1992

名越左源太『南島雑話 幕末奄美民俗誌』1、2 平凡社（東洋文庫）1984

名瀬市『名瀬市誌』1968

日本放送協会『日本民謡大観（沖縄・奄美）奄美諸島篇』日本放送出版協会 1993

松田宝蔵『資料3号 八月踊りの唄－宇宿方面で歌われたものを中心にして－』私家版

松田宝蔵『民謡 八月踊りの唄 宇宿方面で歌われている唄を中心に・・・』私家版

松田宝蔵編集『民謡八月踊りの唄\*宇宿方面で歌われている唄\*』私家版

松田宝蔵『宇宿歌集』（箕輪中栄所蔵） 私家版

松原武実「住用村の八月踊りの現況と民俗音楽関係資料」『南日本文化』20 1988

松原武実「瀬戸内町・宇検村・大和村の八月踊資料」『南日本文化』21 1989

松原武実「笠利町・竜郷町・名瀬市の八月踊資料」『南日本文化』22 1990

松原武実「奄美八月踊の二つの様式」『南日本文化研究所叢書』18 1992

## 資料1 宇宿八月踊り歌詞一覧

### 凡例

本資料は、笠利町宇宿集落の八月踊りにおいて、現在伝承されている歌詞、あるいは過去に伝承されていた歌詞を記録するものである。資料はA1の歌集を中心にインタビューを行い以下の資料をもとに作成した。

A 宇宿出身の教育者であり戦前から八月踊りなどの記録に務めた故・松田宝蔵氏が作成した歌集のうち、現在確認されている四冊の歌集

A1 「資料3号八月踊りの唄—宇宿方面で唄われたものを中心にして—」

A2 「民謡八月踊りの唄 宇宿方面で唄われている唄を中心に・・・」

A3 「民謡八月踊りの唄\*宇宿方面で唄われている唄\*」

A4 戦中に箕輪中栄氏に贈呈された歌集（一部分現存）

B 宇宿部落会昭和61年作成の歌集

C 実況演唱資料（1987年度アラセツ行事八月踊りの実況録音の中から上記歌集に含まれない歌詞）

D 1988年から1994年における宇宿集落でのインタビューテープ

1. 五十音順に3桁のアラビア数字で一首ごとに通し番号を記した。
2. ヨミは、できるだけ発音に近いと思われる表記にした。
3. 歌詞は基本的にA1（KA1, Kは歌集の略）の表記に準じたが、集落でのインタビューを元に部分的に以下のものは改めた。その際に歌集との差異がわかるように、歌詞の最後に\*印を付けて「\*3句目手取り教すい教すいとら（ていとらりゆすいゆすいとら）」のように記した。ここでの（ ）内は、歌集での読みである。

- (1) 手元にある歌集全4冊（A4を除く）中、A1〔歌集1〕以外では違う表記になっているもの
- (2) 明らかに誤字脱字と分かるもの
- (3) インタビュー時に誤歌の可能性の指摘を受けたもののうち、改めないと意味が通らないもの。

4. 歌詞ヴァリエーションは以下のように分けて処理されている。

- ① インタビューと歌集との間に生ずるヴァリエーションは3. で記した通りである。
- ② インタビューにおいて同一歌詞に複数のヴァリエーションを含む場合、4句のうち2句以上異なるものは別番号を付したが、1句内の語句のヴァリエーションは歌詞中、あるいは歌詞の下段の「 」内に記した。ただし、その1句内のヴァリエーションの差異で意味が大きく異なってしまふものは別番号とした。
- ③ 上記に掲げられた5冊の歌集間に生ずるヴァリエーションは、本論の目的から逸脱するため、扱っていない。
5. 歌意は歌詞の下に（ ）内に記した。また、節全体的に歌意が聞き取れなかったものについて、部分的に歌意の分るものはその句の下に記した。
6. KA1～KA3 (A 1の歌集～A 3の歌集), KB (Bの歌集) 等に掲載されている歌詞は、歌意の（ ）直後に筆者が付けた通し番号をKA1-262やKA3-001のように記した。ここでは、前記に挙げた4冊全てにおける歌詞番号を記すのではなく、優先順位として資料2 (KA1) に掲載されている場合はその歌詞番号のみを、掲載されていない場合は掲載されている歌集の番号と歌詞番号を記した。また、KA1に同一歌詞が複数ある場合、KA1-253, 060とカンマで区切って示した。
7. 大和言葉で歌われる歌詞など歌意を略したものもある。
8. 歌詞の注は2段階にした。簡単な注は歌詞の後の・印後に、また、長い注は歌注として、最後に纏めた。

001 <sup>あかき</sup>赤木名<sup>な</sup>観音堂や <sup>いついぶ</sup>伊津<sup>な</sup>かち<sup>な</sup>移ろ <sup>な</sup>移ろ<sup>な</sup>移ろの <sup>なうと</sup>無<sup>な</sup>噂ばかり

(赤木名観音堂は伊津部から移転すると言う。移転する移転すると言うがそれは噂ばかり。) KA1-262

002 <sup>あがれあま</sup>東<sup>い</sup>明<sup>わか</sup>雲<sup>み</sup>ぬ <sup>い</sup>生き<sup>わか</sup>別れ<sup>う</sup>見り<sup>い</sup>いば <sup>か</sup>加<sup>な</sup>那<sup>い</sup>とう<sup>わ</sup>生き<sup>わ</sup>別れ <sup>う</sup>其<sup>い</sup>り<sup>い</sup>か<sup>い</sup>が<sup>い</sup>如<sup>い</sup>に

(東の明け方の雲の別れて行く様子を見れば、彼女と生き別れている自分の様だ。) KA1-253, 060

003 <sup>あがんと</sup>遠方<sup>く</sup>から<sup>ま</sup>此<sup>あそ</sup>処<sup>い</sup>に <sup>か</sup>遊<sup>な</sup>び<sup>あ</sup>し<sup>い</sup>が<sup>し</sup>御<sup>い</sup>来<sup>い</sup>し <sup>か</sup>加<sup>な</sup>那<sup>あ</sup>に<sup>い</sup>逢<sup>い</sup>わ<sup>い</sup>じ<sup>い</sup>い<sup>し</sup>し<sup>い</sup>ゅ<sup>い</sup>て<sup>い</sup> <sup>し</sup>悲<sup>い</sup>観<sup>い</sup>と<sup>う</sup>る<sup>な</sup>な

- (あんなに遠い所からここに遊びしにいらっしゃって彼女と逢えなかったからと言って悲観するな。) KA1-075 \* 1 句目あがんとらがくまに
- 004 遠方から此処に遊びしが来もし ゆさり夜や此処に遊でい給れ  
(あんなに遠い所からここに遊びをしにいらっしゃいました。今晚は夜通しここで遊んで行って下さい。) KA1-100, 074

\* 1 句目あがんとらがくまに

- 005 あがんむらくわや 雪むらぬ夜明け 気病になれいば 呼ばし給れ  
「歯ぐき」

(東の村にあるゆきむらで夜明けに病気になったので医者を呼んで下さい。) KA1-255

\* 2 句目雪むらぬ歯ぐき (ゆきむらぬはぐき) 4 句目呼ばし一道 (ゆばしちゅみち) ともいう

- 006 明け暮れや知らじい 遊びゆたる節や 昨日や今日や数みいば 昔なりゆり  
(明けたり暮れたりするのも知らないくらい遊んでいたあの節を、昨日、今日と思いだして数えて行けば随分昔の話だな。) KA1-042

- 007 芦花部一番や 上殿地ぬバア加那よ くばや一番や 実久くばや  
(芦花部で一番美しいのは上殿地のバア加那だ。くり舟で一番大きいのは実久だ。) KA1-247

- 008 脚踏み踏み習てい 手振り振り習てい 食み習ていからや 間違ねらぬ  
(八月踊りは足のステップを習ってから、手の振り方を習って、各家で出されるご馳走の食べ方を習ったら、間違いはない。) KA1-260

- 009 副按司ぬ舟ぬ 渡中乗りじゃしいば 波やおしそい はりゆる清らさ  
(歌意不詳) KA3-223

- 010 汗肌ぬ手拭 うれいば形見貰らてい うれいがあるなげや 吾んくうとう思え

(汗を拭った手拭、これを形見に貰ってこれがある間は私の事を思っていて下さい。) KA4-110

\* 4 句目思いしよれ

- 011 汗肌ぬ手拭 吾手に取ろすれいば 泪におそわれて 取りやならぬ  
(汗を拭った手拭を私の手に取ろうとすれば貴方に対する思いで泪が出て



- きて取ることが出来ない。)
- 012 遊ばそが為に<sup>あそ</sup> 引き寄<sup>ひ</sup>しいてい<sup>ゆ</sup>置<sup>う</sup>しゃが ひとりゆ<sup>ゆ</sup>しいゆ<sup>ゆ</sup>しいとう<sup>あそ</sup> 遊<sup>あそ</sup>でい  
たぼれ  
(遊びをするために引き留めて寄り合っているのですから一人々々みんな  
寄り合って遊んで下さい。) KA1-101
- \* 3 句目手取教すい教すいとう (ていとうりゆすいゆすいとう)
- 013 遊ばそが為に<sup>あそ</sup> 引き寄<sup>ひ</sup>しいてい<sup>ゆ</sup>うしゃが ゆ<sup>ゆ</sup>さり夜<sup>よ</sup>や此<sup>こ</sup>処<sup>こ</sup>に<sup>あそ</sup> 遊<sup>あそ</sup>でい<sup>たぼ</sup>給<sup>たぼ</sup>れ  
(遊びをするために引き留めて寄り合っているのですから夜通しここで遊  
んでいって下さい。) KA1-134
- 014 遊<sup>あそ</sup>び好<sup>じい</sup>き吾<sup>わぬ</sup>や 探<sup>と</sup>みい<sup>と</sup>てい<sup>と</sup>探<sup>と</sup>みい<sup>と</sup>ららぬ 島<sup>しま</sup>ぬ尻<sup>しりくち</sup>口<sup>くち</sup>に 探<sup>と</sup>みい<sup>と</sup>てい<sup>あそ</sup>遊<sup>あそ</sup>ぼ  
(遊び好きな私を探そうとしても探されない。集落の出入口まで行って探  
して遊ぼう。) KA1-115
- 015 遊<sup>あそ</sup>び好<sup>じい</sup>き妾<sup>わぬ</sup>や 探<sup>と</sup>みい<sup>と</sup>てい<sup>と</sup>探<sup>と</sup>みい<sup>と</sup>ららぬ でい<sup>わ</sup>吾<sup>わ</sup>々<sup>々</sup>供<sup>か</sup>々<sup>か</sup>た<sup>り</sup>た<sup>り</sup>てい<sup>あそ</sup>遊<sup>あそ</sup>でい  
<sup>たぼ</sup>給<sup>たぼ</sup>れ  
(遊び好きな私を止めても止めることが出来ない。さあ、立って盛り上が  
って踊って遊んで下さい。) KA1-103
- 016 遊<sup>あそ</sup>びする<sup>なか</sup>中<sup>なか</sup>に 唄<sup>うた</sup>絶<sup>た</sup>らしう<sup>うた</sup>くな 唄<sup>うた</sup>絶<sup>た</sup>らし置<sup>う</sup>けい<sup>う</sup>ば 他<sup>よ</sup>人<sup>そ</sup>が<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>う  
(遊びをしている時に掛け合いの歌を切らすことをするな。歌を切らすと  
他人に笑われる。) KA1-096
- 017 遊<sup>あそ</sup>びする<sup>なか</sup>間<sup>なか</sup>に 年<sup>とし</sup>距<sup>し</sup>離<sup>り</sup>めい<sup>ご</sup>ね<sup>ご</sup>ら<sup>ご</sup>ぬ 四<sup>し</sup>十<sup>じゅう</sup>が五<sup>ご</sup>十<sup>じゅう</sup>な<sup>ご</sup>てい<sup>はな</sup>む<sup>は</sup>花<sup>はな</sup>ぬ<sup>は</sup>二<sup>に</sup>十<sup>じゅう</sup>  
(遊びをしている時に年齢の差などはない。四十歳、五十歳になっても若  
々しい二十歳の頃と同じだ。) KA1-106
- 018 遊<sup>あそ</sup>べそ<sup>あそ</sup>べ遊<sup>あそ</sup>べ 二<sup>は</sup>十<sup>じゅう</sup>才<sup>さい</sup>内<sup>うち</sup>遊<sup>あそ</sup>べ 四<sup>し</sup>十<sup>じゅう</sup>が五<sup>ご</sup>十<sup>じゅう</sup>な<sup>ご</sup>れい<sup>おも</sup>ば<sup>おも</sup>思<sup>おも</sup>た<sup>おも</sup>ば<sup>おも</sup>か<sup>おも</sup>り  
(遊べ遊べ、二十歳のうちに遊ぶだけ遊びなさい。四十や五十になればも  
っと遊べば良かったなと思うばかりだ。) KA1-122, 102
- 019 惜<sup>あたら</sup>し<sup>は</sup>ち<sup>ち</sup>い<sup>が</sup>ち<sup>ち</sup> 八<sup>はち</sup>月<sup>げつ</sup>ば み<sup>さ</sup>な<sup>さ</sup>よ<sup>さ</sup>な<sup>さ</sup>そ<sup>さ</sup>の<sup>さ</sup>し<sup>さ</sup>の<sup>さ</sup>け<sup>さ</sup>い<sup>さ</sup> う<sup>さ</sup>酒<sup>さけ</sup>あ<sup>さ</sup>た<sup>さ</sup>ら<sup>さ</sup>ま<sup>さ</sup>し 三<sup>さん</sup>合<sup>ご</sup>賜<sup>た</sup>れ  
(もったいない八月、以下歌意不詳) KA1-086
- 020 近<sup>あ</sup>た<sup>た</sup>り<sup>た</sup>り<sup>た</sup> 妨<sup>さ</sup>ま<sup>ま</sup>だ<sup>だ</sup> け<sup>が</sup>や 榕<sup>が</sup>樹<sup>じゆ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>や<sup>ゆ</sup>枝<sup>え</sup> 他<sup>か</sup>人<sup>にん</sup>が<sup>が</sup>妨<sup>さ</sup>ま<sup>ま</sup>だ<sup>だ</sup> け<sup>が</sup>や なる<sup>な</sup>な<sup>な</sup>ヨ<sup>よ</sup>加<sup>か</sup>那<sup>な</sup>「<sup>さ</sup>と<sup>と</sup>里<sup>り</sup>」  
(あっちこっち、邪魔になるほど咲くがじゅまるの枝のように他人の邪魔  
はするんじゃないよ、彼女「彼氏」。) KA1-057

- 021 <sup>あぶら</sup>油しいきい <sup>がまち</sup>頭 <sup>あみい</sup>雨 <sup>しお</sup>降りいぬ心配じゃ <sup>きよら</sup>美 <sup>ま</sup>さ生れと <sup>ゆる</sup>うれいば <sup>しお</sup>夜ぬ心配じゃ  
(油をつけた頭は雨が降るのが心配だ。美人に生まれれば夜が心配だ。)

KA1-094

- 022 <sup>あぶら</sup>油だらだら <sup>かぐらんしゅ</sup>風浪主 <sup>うま</sup>馬が <sup>む</sup>でい <sup>もち</sup>ちちゆて <sup>さた</sup>砂糖 <sup>ひ</sup>曳 <sup>きゃ</sup>し <sup>およ</sup>及ばらぬヤゴシヨ  
<sup>めえ</sup>女ば <sup>ねいんごろ</sup>妾 <sup>しろ</sup>しいろ <sup>しろ</sup>や <sup>きゃ</sup>し <sup>ゆり</sup>ゆり

(脂汗をダラダラたらしている風浪主〈人名〉は、馬まで持ってきて砂糖を曳いている。およばらぬやごじょむえを妾にしておまえどうするのか。) KA1-254 \*終句ち

- 023 <sup>あまたい</sup>火棚魚 <sup>さが</sup>ぬ下 <sup>まや</sup>てい <sup>めい</sup>猫 <sup>めい</sup>眼 <sup>だる</sup>ぬだる <sup>きよら</sup>美人 <sup>とう</sup>刀士 <sup>か</sup>ば <sup>か</sup>戴 <sup>み</sup>いてい <sup>わめい</sup>吾 <sup>だ</sup>目 <sup>だ</sup>ぬ <sup>だ</sup>疲 <sup>る</sup>る <sup>さ</sup>さ  
(天棚から下がっている魚を食べたくてじっと見つめている猫の目がだるい。美人の女房を貰って他の男に誘われないかと心配でずっと見張っている私の目がだるい。) KA1-095

・魚は、棒に刺して火であぶって軒端に刺しておいて薫製にした。昔の貯蔵法の一つ。

- 024 <sup>あめ</sup>雨の <sup>ふ</sup>降 <sup>とき</sup>る <sup>さ</sup>時 <sup>さ</sup>き <sup>ま</sup>ま <sup>い</sup>る <sup>な</sup>な <sup>さ</sup>さ <sup>つゆ</sup>山 <sup>な</sup>入 <sup>な</sup>る <sup>な</sup>な <sup>な</sup>み <sup>だ</sup>露 <sup>や</sup>ら <sup>な</sup>み <sup>だ</sup>泪 <sup>や</sup>ら

(歌意略) KA1-225 \*1句目あめのふるひに

- 025 <sup>あ</sup>荒 <sup>き</sup>木 <sup>さ</sup>崎 <sup>しゅ</sup>潮 <sup>さ</sup>崎 <sup>しゅ</sup>潮 <sup>な</sup>鳴 <sup>い</sup>り <sup>く</sup>声 <sup>き</sup>聞 <sup>き</sup>き <sup>ば</sup>ば <sup>わ</sup>吾 <sup>か</sup>加 <sup>な</sup>那 <sup>ふ</sup>船 <sup>な</sup>旅 <sup>や</sup>や <sup>く</sup>や <sup>ら</sup>し <sup>く</sup>苦 <sup>し</sup>し <sup>や</sup>や

(喜界島の荒木崎は潮の流れが速いので、海が荒れて潮が鳴っている音を聞くと私の彼女は船旅をさせたくない。)

- 026 <sup>あ</sup>新 <sup>ら</sup>節 <sup>い</sup>む <sup>い</sup>去 <sup>い</sup>き <sup>い</sup>ゆ <sup>り</sup>り <sup>し</sup>芝 <sup>さ</sup>挿 <sup>い</sup>む <sup>い</sup>行 <sup>い</sup>き <sup>い</sup>ゆ <sup>り</sup>り <sup>し</sup>節 <sup>い</sup>と <sup>う</sup>う <sup>し</sup>芝 <sup>さ</sup>挿 <sup>や</sup>や <sup>な</sup>七 <sup>ぬ</sup>日 <sup>か</sup>離 <sup>ひ</sup>め <sup>め</sup>め

(新節も過ぎて行く。柴差しも過ぎて行く。新節と柴差しは七日離れている。) KA1-084

- 027 <sup>あ</sup>新 <sup>ら</sup>屋 <sup>し</sup>敷 <sup>の</sup>好 <sup>こ</sup>で <sup>い</sup>い <sup>い</sup>礎 <sup>い</sup>石 <sup>は</sup>植 <sup>え</sup>て <sup>い</sup>い <sup>く</sup>黄 <sup>が</sup>金 <sup>い</sup>柱 <sup>は</sup>立 <sup>て</sup>て <sup>い</sup>い <sup>け</sup>桁 <sup>や</sup>な <sup>な</sup>み <sup>き</sup>木

(新しい屋敷を好んで礎を植えて黄金のような立派な柱を建ててその桁にはまっすぐな並木を使おう。) KA1-037

・けたやなみしょという人もいる。

- 028 <sup>あ</sup>新 <sup>ら</sup>屋 <sup>し</sup>敷 <sup>の</sup>好 <sup>こ</sup>で <sup>い</sup>い <sup>く</sup>黄 <sup>が</sup>金 <sup>い</sup>柱 <sup>は</sup>植 <sup>え</sup>て <sup>い</sup>い <sup>も</sup>百 <sup>も</sup>茅 <sup>が</sup>ば <sup>う</sup>下 <sup>し</sup>し <sup>ふ</sup>茸 <sup>ち</sup>ち <sup>る</sup>る <sup>き</sup>清 <sup>さ</sup>さ

(新しい屋敷を好んで、特別上等な木で柱を植えて、100人枠の人数で担い棒を担いで萱を茸いてとてもきれいだ。) KA1-036

\*3句目元根茅下ろし(むとうねがやおろち) 歌注1

- 029 <sup>あわもり</sup>泡盛<sup>さけ</sup>ぬお酒 さみごたぼみしよし <sup>う</sup>其りい<sup>ほこ</sup>が祝<sup>いわ</sup>らしゃや慶<sup>い</sup>ていおしいろ  
(泡盛の焼酎) (それが喜ばしいのでお祝いをして差し上げましょう。) KA1-131
- 030 <sup>あ</sup>合<sup>てのげ</sup>わん手拭<sup>あわ</sup>ば 合<sup>ゆる</sup>そにすいりいば <sup>ゆ</sup>夜の夜<sup>ゆ</sup>鳥 <sup>がらす</sup>鳴<sup>な</sup>き明<sup>あ</sup>かす  
(歌意略) KA1-216
- 031 あんまあんま むちむれがきょうたがな あたらしありしよしゃんていくりに  
いていたぼれ  
(お母さんお母さん、ムチムレ〈餅貫い〉が来たけれど、惜しい) (くれて下さい。)
- 032 <sup>あんま おもかげい</sup>阿母面影<sup>た</sup>や まれまれどう立<sup>かな</sup>ちゆる <sup>おもかげい</sup>加那が面影<sup>まさ</sup>や 勝<sup>た</sup>てい立<sup>た</sup>ちゆり  
「時々」  
(お母さんの面影は時々にはか目に浮かばないが、彼女の面影はそれよりも勝って目に浮かぶ。) KA1-078
- 033 あんまこくんまこなんてい しるさぎぬいしゆるな <sup>いし</sup>石<sup>かね</sup>でっぼ金<sup>かね</sup>でっぼむ  
ちゆく わがいちくれろ  
(あそこの窪みにもここの窪みにも白鷺がすわっている。石鉄砲、金鉄砲  
持って来い、私が射ってあげよう。) KA4-013  
・白鷺は丁度田植時期頃に一番来る。
- 034 <sup>あんま ばか</sup>阿母馬<sup>ばんしや</sup>廉<sup>ほ</sup>ばか 芭蕉<sup>ちい</sup>に惚<sup>ちい</sup>れて <sup>ふなと</sup>あぎな舟<sup>こ</sup>人に <sup>くれ</sup>子<sup>た</sup>ば嫁<sup>た</sup>て  
(歌意略) KA1-222
- 035 <sup>い</sup>去<sup>はて</sup>き果<sup>どんがん</sup>ぬ嫩<sup>な</sup>芽 <sup>は</sup>鳴<sup>ちい</sup>り果<sup>ちい</sup>てぬ <sup>やねい</sup>鼓 <sup>あらし</sup>来年<sup>い</sup>ぬ新<sup>うが</sup>節 <sup>おしい</sup>に 挿<sup>うが</sup>でい差<sup>おしい</sup>上<sup>おしい</sup>ろ  
(八月も終わりで行き果ててしまうドンガ、今年も鳴り終わりの鼓、来  
年の新節にまた御逢い致しましょう。) KA1-087
- 036 <sup>い</sup>行き<sup>い</sup>ょ行き<sup>い</sup>ょにすれば <sup>あと</sup>後<sup>あ</sup>めささやしいが <sup>おろ</sup>おろ<sup>おろ</sup>にすれば <sup>ぎり</sup>義理<sup>り</sup>ぬ立<sup>り</sup>た  
ぬ  
(行こう行こうとすれば後も心残りだが、そうかといって居ようとすれば  
また義理が立たない。) KA4-112
- 037 <sup>いけう</sup>池<sup>きよら</sup>浮<sup>うしぬ</sup>きいてい美<sup>うしぬ</sup>さ <sup>うしぬ</sup>鴛<sup>うしぬ</sup>鴦<sup>うしぬ</sup>雌<sup>うしぬ</sup>鳥 <sup>うしぬ</sup>舞<sup>うしぬ</sup>立<sup>うしぬ</sup>ていてい清<sup>きよら</sup>さ <sup>なま</sup>今<sup>めらべ</sup>ぬ女<sup>めらべ</sup>童<sup>めらべ</sup>  
(池に浮いてきれいなのは鴛鴦の雌鳥だ。踊りをしてきれいなのは今の娘  
達。) KA1-093

- 038 <sup>い</sup> 去<sup>ちいき</sup>じゃる月<sup>かな</sup>が<sup>うでまくら</sup>で<sup>あわ</sup>いや <sup>こ</sup>加<sup>ちいき</sup>那<sup>わうでまくら</sup>が<sup>あわ</sup>腕<sup>こ</sup>枕<sup>ちいき</sup> 衰<sup>あわ</sup>れ<sup>こ</sup>い<sup>ちいき</sup>此<sup>わうでまくら</sup>の<sup>あわ</sup>月<sup>こ</sup>や <sup>あわ</sup>吾<sup>ちいき</sup>腕<sup>あわ</sup>枕<sup>わうでまくら</sup>
- (先月までは彼女の腕枕で寝ていたものを、ああ今月は私の腕枕で寝なければならぬ。) KA1-064
- 039 <sup>い</sup> 去<sup>ちいき</sup>じゃる月<sup>たしいき</sup>が<sup>あわれい</sup>で<sup>こ</sup>いや <sup>ちいき</sup>ただ<sup>あわれい</sup>二<sup>こ</sup>ヶ月<sup>ちいき</sup>なり<sup>あわれい</sup>ゆ<sup>ちいき</sup>り <sup>あわれい</sup>憶<sup>こ</sup>々<sup>ちいき</sup>此<sup>あわれい</sup>の<sup>ちいき</sup>月<sup>あわれい</sup>や <sup>あわれい</sup>三<sup>あわれい</sup>月<sup>あわれい</sup>なり<sup>あわれい</sup>ゆ<sup>あわれい</sup>り
- (去って行った月〈肌を抱いた月〉まではもう二ヶ月になる。ああ今月で三ヶ月になる。) KA1-175
- 040 <sup>い</sup> 去<sup>ちいき</sup>じゃる月<sup>ちゅうしいき</sup>が<sup>あわれい</sup>で<sup>こ</sup>いや <sup>あわれい</sup>ただ<sup>あわれい</sup>一<sup>あわれい</sup>ヶ月<sup>あわれい</sup>ど<sup>あわれい</sup>う<sup>あわれい</sup>なり<sup>あわれい</sup>ゆ<sup>あわれい</sup>る <sup>あわれい</sup>憶<sup>こ</sup>々<sup>あわれい</sup>此<sup>あわれい</sup>の<sup>あわれい</sup>月<sup>あわれい</sup>や <sup>あわれい</sup>二<sup>あわれい</sup>月<sup>あわれい</sup>なり<sup>あわれい</sup>ゆ<sup>あわれい</sup>り
- (去って行った月〈肌を抱いた月〉まではもう一ヶ月になる。ああ今月で二ヶ月になる。) KA1-174
- 041 <sup>い</sup> 去<sup>ちいき</sup>じゃる月<sup>みちいき</sup>が<sup>あわれい</sup>で<sup>こ</sup>いや <sup>あわれい</sup>ただ<sup>あわれい</sup>三<sup>あわれい</sup>ヶ月<sup>あわれい</sup>なり<sup>あわれい</sup>ゆ<sup>あわれい</sup>り <sup>あわれい</sup>憶<sup>こ</sup>々<sup>あわれい</sup>此<sup>あわれい</sup>の<sup>あわれい</sup>月<sup>あわれい</sup>や <sup>あわれい</sup>四<sup>あわれい</sup>月<sup>あわれい</sup>なり<sup>あわれい</sup>ゆ<sup>あわれい</sup>り
- (去って行った月〈肌を抱いた月〉まではもう三ヶ月になる。ああ今月で四ヶ月になる。) KA1-176
- 042 <sup>いそぎ</sup> 雑<sup>いそぎ</sup>魚<sup>ことしが</sup>ち<sup>いそぎ</sup>ば<sup>が</sup>雑<sup>いそぎ</sup>魚<sup>やねい</sup> 今<sup>はちいがちい</sup>年<sup>わきや</sup>迄<sup>わきや</sup>で<sup>わきや</sup>い<sup>わきや</sup>雑<sup>わきや</sup>魚<sup>わきや</sup> 来<sup>わきや</sup>年<sup>わきや</sup>ぬ<sup>わきや</sup>八<sup>わきや</sup>月<sup>わきや</sup>や <sup>わきや</sup>吾<sup>わきや</sup>々<sup>わきや</sup>が<sup>わきや</sup>め<sup>わきや</sup>ら<sup>わきや</sup>べ
- (雑魚ってば雑魚、今年まで雑魚、来年の八月は私達が女童) KA1-092
- \* 4 句目吾々が茶受け° (わきやがちゃおけ°)
- 小魚を子供の意味に例えて歌った歌。
- 043 <sup>いそぎ</sup> い<sup>いそぎ</sup>そ<sup>いそぎ</sup>げ<sup>ことしが</sup>み<sup>が</sup>い<sup>いそぎ</sup>わ<sup>やねい</sup>ら<sup>はちいがちい</sup>べ<sup>わきや</sup>ぬ <sup>いそぎ</sup>い<sup>いそぎ</sup>じ<sup>いそぎ</sup>て<sup>いそぎ</sup>い<sup>いそぎ</sup>く<sup>いそぎ</sup>ば<sup>いそぎ</sup>あ<sup>いそぎ</sup>そ<sup>いそぎ</sup>べ<sup>いそぎ</sup>い<sup>いそぎ</sup>じ<sup>いそぎ</sup>て<sup>いそぎ</sup>い<sup>いそぎ</sup>く<sup>いそぎ</sup>ん<sup>いそぎ</sup>な<sup>いそぎ</sup>れ<sup>いそぎ</sup>ば <sup>いそぎ</sup>で<sup>いそぎ</sup>い<sup>いそぎ</sup>わ<sup>いそぎ</sup>き<sup>いそぎ</sup>や<sup>いそぎ</sup>お<sup>いそぎ</sup>ど<sup>いそぎ</sup>ろ
- (これからなろうとする未成年、出てきて遊びなさい。出てこないんであればさあ自分なんかで踊ろう。)
- 044 <sup>いちい</sup> 何<sup>こ</sup>時<sup>ぐと</sup>む<sup>いそぎ</sup>斯<sup>たまがねい</sup>の<sup>ぬ</sup>如<sup>ぬ</sup>に <sup>いそぎ</sup>あ<sup>いそぎ</sup>れ<sup>いそぎ</sup>ば<sup>いそぎ</sup>玉<sup>いそぎ</sup>黄<sup>いそぎ</sup>金<sup>いそぎ</sup> 何<sup>いそぎ</sup>が<sup>いそぎ</sup>や<sup>いそぎ</sup>こ<sup>いそぎ</sup>の<sup>いそぎ</sup>し<sup>いそぎ</sup>の<sup>いそぎ</sup>け <sup>いそぎ</sup>わ<sup>いそぎ</sup>が<sup>いそぎ</sup>よ<sup>いそぎ</sup>と<sup>いそぎ</sup>り<sup>いそぎ</sup>ゆ<sup>いそぎ</sup>り
- (いつもこのようにあれば愛しい人。何でこの心配を私が取るか。)
- KA1-143
- 045 <sup>いちい</sup> 何<sup>いそぎ</sup>時<sup>いそぎ</sup>よ<sup>いそぎ</sup>り<sup>いそぎ</sup>か<sup>いそぎ</sup>よ<sup>いそぎ</sup>り<sup>いそぎ</sup>か <sup>いそぎ</sup>今<sup>いそぎ</sup>日<sup>いそぎ</sup>ぬ<sup>いそぎ</sup>日<sup>いそぎ</sup>や<sup>いそぎ</sup>勝<sup>いそぎ</sup>り <sup>いそぎ</sup>何<sup>いそぎ</sup>時<sup>いそぎ</sup>む<sup>いそぎ</sup>斯<sup>いそぎ</sup>の<sup>いそぎ</sup>如<sup>いそぎ</sup>に <sup>いそぎ</sup>有<sup>いそぎ</sup>ら<sup>いそぎ</sup>ち<sup>いそぎ</sup>給<sup>いそぎ</sup>れ
- (いつもよりか今日の日が勝っている。いつもこのようにあって下さい。)
- KA1-032
- 046 <sup>いちい</sup> 一<sup>いそぎ</sup>合<sup>いそぎ</sup>二<sup>いそぎ</sup>合<sup>いそぎ</sup>三<sup>いそぎ</sup>合<sup>いそぎ</sup>四<sup>いそぎ</sup>合<sup>いそぎ</sup>五<sup>いそぎ</sup>合<sup>いそぎ</sup>六<sup>いそぎ</sup>合<sup>いそぎ</sup>七<sup>いそぎ</sup>合<sup>いそぎ</sup>八<sup>いそぎ</sup>合<sup>いそぎ</sup>九<sup>いそぎ</sup>合<sup>いそぎ</sup>一<sup>いそぎ</sup>升<sup>いそぎ</sup>
- (歌意略) KA1-261
- 047 <sup>いちい</sup> 一<sup>いそぎ</sup>代<sup>いそぎ</sup>ち<sup>いそぎ</sup>ど<sup>いそぎ</sup>う<sup>いそぎ</sup>染<sup>いそぎ</sup>だ<sup>いそぎ</sup>る <sup>いそぎ</sup>末<sup>いそぎ</sup>代<sup>いそぎ</sup>ち<sup>いそぎ</sup>ど<sup>いそぎ</sup>う<sup>いそぎ</sup>染<sup>いそぎ</sup>だ<sup>いそぎ</sup>る <sup>いそぎ</sup>女<sup>いそぎ</sup>子<sup>いそぎ</sup>ア<sup>いそぎ</sup>ヤ<sup>いそぎ</sup>花<sup>いそぎ</sup>や <sup>いそぎ</sup>あ<sup>いそぎ</sup>れ<sup>いそぎ</sup>や<sup>いそぎ</sup>こ<sup>いそぎ</sup>れ<sup>いそぎ</sup>や

- (一代で一緒に、末代まで一緒に関係したその男性は関係する女性が沢山いて忙しい。) \*KA1-063, 132 4 句目彼ろ是ろ (あれろこれろ)
- 048 いびいらく<sup>わす</sup>れたが ねいんごろじょが<sup>やど</sup>宿に さいくわすいきゅん<sup>とき</sup>時、思<sup>おも</sup>出<sup>で</sup>しゃが
- (いびらくを忘れたんだが、妾の家に。川海老をすくう時に思い出したんだけれども。) KA4-033
- いびらくは川海老をいれる籠の事。
- 049 いま<sup>いま</sup>今ぬ風雲<sup>かざくも</sup>や 村<sup>むら</sup>ぬ上<sup>うへ</sup>に立ちゆり 妾<sup>わし</sup>が殿主<sup>とのじよ</sup>さんや 西原<sup>にしはら</sup>に立ちゆり
- (今の風雲は村の上に立つ。私の殿じよさんは西側の原に立つ。)
- KA1-265
- 050 いま<sup>いま</sup>今の踊<sup>おど</sup>りは 踊<sup>おど</sup>り子<sup>こ</sup>が揃<sup>そろ</sup>た 踊<sup>おど</sup>り習<sup>なら</sup>わば 今<sup>いま</sup>習<sup>なら</sup>お
- (歌意略) KA1-223 \* 4 句目今習え (いまならえ)
- 051 いみい<sup>いみい</sup>に 夢見<sup>ゆめみ</sup>しゃる時<sup>とき</sup>や 夢<sup>ゆめ</sup>語<sup>ご</sup>しいるな 夢<sup>ゆめ</sup>や畠<sup>はら</sup>々<sup>々</sup>ぬ 草<sup>くさ</sup>ぬ裏<sup>うら</sup>葉<sup>は</sup>
- (彼女の夢を見た時はその夢を語ったりするな。もし、夢を語ったりすると野原の草の裏葉に隠れている奴に取られてしまう。) KA1-167
- \* 4 句目草ぬ裏葉 (くさのうらべ)
- 052 いん<sup>いん</sup>がきよらばな 男子<sup>おとこ</sup>清<sup>きよ</sup>花<sup>はな</sup>や 七<sup>なな</sup>花<sup>はな</sup>に咲<sup>さ</sup>きゆり 女<sup>おんな</sup>子<sup>こ</sup>陋<sup>ろう</sup>しゃ花<sup>はな</sup>や 一<sup>いち</sup>花<sup>はな</sup>咲<sup>さ</sup>きゆり
- (男のきれいなのは七花に咲く。女の醜いのは一つの花に咲く。) KA1-133
- \* 4 句目あれろこれろ
- 053 いん<sup>いん</sup>ごもりぬ針<sup>あばし</sup>千<sup>ち</sup>本<sup>ぼん</sup> 何<sup>なに</sup>処<sup>どころ</sup>参<sup>まゐ</sup>る針<sup>あばし</sup>千<sup>ち</sup>本<sup>ぼん</sup> 宇<sup>う</sup>宿<sup>しゆく</sup>女<sup>にょ</sup>童<sup>どう</sup>達<sup>だつ</sup>ぬ 股<sup>もも</sup>ば刺<sup>さ</sup>しいが
- 「またばさしいが、」  
「ひんさきさしいに」
- (いんごもりにいる針千本さん、どっちに行くのか、針千本さん、宇宿の女童達の股を刺しに「陰部を刺しに」。) KA1-091
- いんごもりは海の潮が引いた時に出来るリーフの池の事。
- 054 うき<sup>うき</sup>よかりじま 浮世<sup>うきよ</sup>仮<sup>かり</sup>世<sup>せ</sup>に 永<sup>えい</sup>久<sup>きう</sup>居<sup>い</sup>られりょみい 言<sup>い</sup>しゃり語<sup>かた</sup>らたり するが浮<sup>うき</sup>世<sup>よ</sup>
- (浮世は仮の島だ。永久に生きておられようか。言ったり語り合ったりするのが浮世だ。) KA1-043
- 055 うき<sup>うき</sup>よやまかわ 浮世<sup>うきよ</sup>山<sup>やま</sup>川<sup>かわ</sup>や 丸<sup>まる</sup>木<sup>き</sup>橋<sup>はし</sup>心<sup>こころ</sup> 斯<sup>か</sup>にも危<sup>あぶ</sup>なさや 渡<sup>わた</sup>てい見<sup>み</sup>りいば
- (浮世は山や川に架かっている丸木橋と同じ様なものでいかにも危ない、

渡ってみると。) KA1-013

- 056 うさぎいあたらし さみごたごみしよし うりが誇らしやや 祝ていおし  
いろ

(それが喜ばしいのでお祝いをして差し上げましょう。) KA4-108

\* 2 句目さみごたごみしよれ

- 057 宇宿踊りくわや いきゃしが踊りよる 右脛探どうてい 左股立たし  
(宇宿踊りはどのように踊るのでしょうか。右脛を探って、左股を正すので  
すよ。) KA1-002, 241

- 058 宇宿果報島や 他の郷と異てい 出立ちゆるまぎり 新さ清さ  
(宇宿は他集落と変わって果報な集落である。八月の節になると踊りに参  
加している人達や草木万物、全てが非常に新鮮で清らかだ。) KA1-001

- 059 宇宿榕樹や 岩抱しゅてい育でり 掟黍見廻役や 村抱しゅてい育でり  
(宇宿のがじゅまるは石を抱いて育つ。掟黍見廻役は村を抱いて賄賂で育  
つ。) KA1-004

・掟は現在でいう区長にあたる役職の事、黍見廻は薩摩藩直轄時代の役  
職名。

- 060 宇宿実和嘉や ギマ木花心 下り花咲かし 上り実ばならし

「下り花咲しゅてい 上りなりゆり」

(宇宿の実和嘉という人は胡麻の花のような心の人だ。胡麻が垂れた花を  
咲かして、上がった実を成らず様に、世間に対し常に頭を垂れ、それで  
人の上に立つ偉い人物だ。) KA1-003歌注 2

- 061 宇宿な一みちに 落とし穴作くてい でいんきうする青年達 落とし遊ぼ

「女童達」

(宇宿のナーミチに落とし穴を作って燐気をする青年達「女童達」を落とし  
て遊ぼう。) KA4-111

・ナーミチは小字クブの所を東西に通る道の事。

- 062 宇宿禿島や ぎいま木ぶす三叢 吾々が美島や 真照ら照りゆり

(宇宿集落は木のない集落である。ギマ木が三本しか生えていないので直  
射日光が全域に照り渡る。私達の集落はそれと同様に心がきれいな集落  
である。) KA1-005, 006

## \*KA1-006 2 句目じいしいきいぶすみぶす

063 宇宿女童達や 恥しいかくや無らぬ 吾々に誘われいんち 思いきらじい

「宇宿青年達や」

(宇宿の女童達「青年達」、恥ずかしくはないのか、私達に馬鹿にされて笑われるとは思えない。) KA1-090

064 宇宿女童達ぬ 後姿見りいば 畠ぬ谷合々々ぬ 蛙ぬ如に

「後ろから見りいば」

「唄ぬ声聞きいば」

(宇宿の娘達の後姿を見れば「歌声を聞いてみると」畑の窪みにいるような蛙のような格好「声」だ。) KA1-088, 089

## \*KA1-089 2 句目唄ぬ声聞きいば (うたぬこゝえきぎいば)

065 置しゅしゅきいば鳴りゆみい 吊ぎいとうきいば鳴りゆみい 懐しやげい  
ぬ恋人が 弾ちとう鳴りゆる

(置いて置けば鳴るのか、さげて置けば鳴るのか、愛しい彼氏が弾いてこそ三味線は鳴るんだ。) KA1-200

066 嶺流る水や 谷間探みいてい止る 吾や加那探みいてい 加那とう宿る

(尾根筋を流れる水は谷を探して止まる。私は彼女を探して彼女のもとに止まる。) KA1-077

067 歌知らぬ童 節知らぬ童 酒とう 盃寡 持ち来教すいろ

(歌詞を知らない童、節回しを知らない童、酒と杯を持っていらっしゃい、教えてあげるから。) KA1-148

068 唄や高々とう 波ぬ花心 吾肌に柔々とう 着きゆる如に

(歌はたからかと波しぶぎになったような気分で歌いなさい。しかしその反面、自分の体に彼女がついているように柔らかくも歌いなさい。)

KA1-097, 144

069 唄や吾が胸ぬ 躑さだめやしいが なま足らぬ吾に 唄ぬありよみい

(歌は自分の胸に躑ているものですが、中途半端で足りない私に歌があるものですか。) KA1-147

## \* 2 句目躑あてむ

070 うち交際いふらい 去したもそ行きゆり 恋ぬ便りしゅま 繁く賜れ

## 「便りやしゅま」

(交際するだけ交際しても去って行くのだから、そうならないように恋の便りのやり取りは「やり取りをしている間は」沢山やりましょう。)

## KA1-154 \* 3 句目声ぬ便りしゅま

- 071 打ていば打ち欲しゃや 夜鳴りしゅる 鼓 詰みいてい寄り欲しゃや 加那  
がおそば

(出来るだけ打っていたい踊りの夜に鳴っている鼓。出来るだけ寄っていたい彼女の側。)

## KA1-196

- 072 女子生れとうてい 故郷ぬ有られりょみい 夫ぬ生れじまどう 吾島なりゆり

(女に生まれて自分の古里はない。愛しい彼氏の生まれた集落が自分の集落だ。)

## KA1-053

- 073 女子身ぬ哀れい 糸柳心 風に襲いまま 靡く哀

(女の身の哀れさよ、糸柳のようだ。風に吹かれたままなびいている。)

## KA1-052

- 074 有難どうやりようる 果報しゃれどうやりようる 来年ぬ稲加那志 畦枕  
(有難うございました。大変嬉しく思いました。来年の稲は豊作になりますように。)

・歌集3に主として家探しや個人の家庭にオケル遊び納めに用いられし由とあり。

- 075 生れ富やあていむう 育ち富ぬねらじい 親二人仲に 育ち欲しゃや  
(産まれた時の環境は良くても育った時の環境が良くなかった。親二人揃っている中で育ちたかった。)

## KA1-048

- 076 梅とう若松や 枝からどう覆お 夫婦しょしられや 竹枝被お  
「松の」

(梅と若松は枝先から覆う。夫婦が揃っているところへ夫婦のために竹の先を覆う。)

## KA1-040

- 077 親からとう思てい 受きゆる杯や 泪にうさわれて 受きいやならぬ  
(親からだと思って受ける杯は涙が出てきて受けることが出来ない。)

## KA1-019



- 078 <sup>うや</sup>親ぬいしよん事や <sup>むねい</sup>胸の上ぬ宝 <sup>うい</sup>耳に聞きと <sup>たから</sup>うめいてい <sup>みみ</sup>胸に染めろ  
 (親の言うことは自分の胸の宝になる事だ。よく耳に聞き留めておいて忘れないようにしなさい。) KA4-085
- 079 <sup>うらとらみ</sup>浦富ヤ浦富 <sup>うらとらみ</sup>戻らぬヤ浦富 <sup>うらとらみ</sup>浦富 <sup>うらとらみ</sup>戻そし <sup>うらとらみ</sup>いりいば <sup>しま</sup>島ぬ <sup>ふりいむん</sup>馬廉者ぬ  
 (浦富や浦富、墓から戻ってこんか、浦富、浦富を墓から戻そうと考えるのは気違いだ。) KA1-239
- \* 3句目うらとらみ戻そしゆんや (うらとらみもどそしゆんや) 歌注 3
- 080 <sup>うら</sup>裏の窓から <sup>まど</sup>蜜柑ば <sup>くねが</sup>投げて <sup>な</sup>三日来ぬとの <sup>みっか</sup>知らせ <sup>し</sup>さみい  
 (歌意略) KA3-181
- 081 <sup>うら</sup>裏の窓から <sup>まど</sup>蒟蒻 <sup>こんやく</sup>投げて <sup>な</sup>今夜来るとの <sup>こんや</sup>知ら <sup>し</sup>しさみい  
 (歌意略) KA1-221
- 082 <sup>うらとらぬち</sup>上殿地下 <sup>しゃんとらぬち</sup>殿地 <sup>あや</sup>あやとら <sup>しゅ</sup>しゅが <sup>ま</sup>まとら <sup>ね</sup>ねなし <sup>どろ</sup>どろ <sup>ひじり</sup>ひじりふてい <sup>み</sup>見りい  
<sup>なま</sup>ば今ぬ <sup>なま</sup>ちょう <sup>し</sup>しどら <sup>しゃん</sup>しゃんと <sup>ろくわ</sup>ろくわ  
 (上殿地、下殿地はあや〈人名〉としゅがま〈人名〉の遊び所になっている。残り火をフーフー吹いてみれば、今が丁度良い所だ。あ、そこで彼と彼女が遊んでいるぞ。) KA4-045
- 083 <sup>えんがわ</sup>縁側に <sup>た</sup>立ていば <sup>よ</sup>他人の <sup>め</sup>目ぬ <sup>こわ</sup>怖さ <sup>いちむよ</sup>一枚ある <sup>く</sup>小座に <sup>とも</sup>伴しおしいろ  
 (縁側に泊まるのは、よその人の目が怖いので一畳敷の小座にお供してあげましょう。) KA1-189
- 084 <sup>えんがわ</sup>縁側に <sup>た</sup>立ていば <sup>よ</sup>他人の <sup>め</sup>目ぬ <sup>こわ</sup>恐さ <sup>かねぶぐい</sup>葡萄木ぬ <sup>した</sup>下に <sup>とも</sup>供しおしいろ  
 (縁側に泊めるのは、よその人の目が怖いので山葡萄の木の下にお供してあげましょう。)
- 085 <sup>えんがわ</sup>縁側に <sup>た</sup>立ていば <sup>よ</sup>他人の <sup>め</sup>目ぬ <sup>こわ</sup>恐さ <sup>くねが</sup>蜜柑木ぬ <sup>した</sup>下に <sup>とも</sup>供しおしいろ  
 (縁側に泊めるのは、よその人の目が怖いので蜜柑の木の下にお供してあげましょう。) KA1-187
- 086 <sup>えん</sup>縁とら <sup>たまがねい</sup>玉黄金 <sup>ぬか</sup>離ば <sup>よ</sup>他人 <sup>ざ</sup>ざらめ <sup>うちふら</sup>交際い <sup>ふ</sup>ふらてい <sup>ぬ</sup>離か <sup>きよ</sup>ば清らく  
 (男女の縁は別れば他人。つき合うだけつき合って別れるなら清らかにさっぱり別れましょう。) KA1-153
- ・これは男女の交際だけでなく嫁を出す場合の意味でもあると言う。
- 087 <sup>おき</sup>沖の沖に <sup>となか</sup>オオ松 <sup>まつた</sup>立てて <sup>のぼ</sup>上り <sup>くだ</sup>下りの <sup>ふねい</sup>舟は <sup>ら</sup>らそ

(歌意略) KA1-220

- 088 <sup>おこ</sup>送れい <sup>おこ</sup>ちば送れい <sup>はまじょが</sup>浜所迄でい <sup>おこ</sup>送れい <sup>となかの</sup>沖 <sup>じゃ</sup>乗り出し <sup>じゅ</sup>いば <sup>じゅ</sup>自由やならぬ  
 (送れってば送れ、渚まで送れ、舟が潮の中に乗り出て行ったらもう自由にはならないから。) KA1-192

\* 4 句目潮風頼も (しゅかぜたのも)

- 089 <sup>じゅごや</sup>お十五夜のお <sup>づいきい</sup>月 <sup>かみぎよら</sup>神清 <sup>てい</sup>さ照り <sup>かな</sup>ゆり <sup>しよ</sup>加那が <sup>た</sup>門口に <sup>くも</sup>立てい <sup>たぼ</sup>ば曇てい <sup>たぼ</sup>給れ  
 (十五夜のお月様はこうごうしく照っているけれど、愛しい彼女が門口に立った時には曇って下さい。) KA1-054

- 090 <sup>おもかげい</sup>面影 <sup>た</sup>や <sup>しぎい</sup>立ち <sup>とうき</sup>ゆり <sup>わらべくいた</sup>絶難 <sup>な</sup>ららぬ <sup>な</sup>時 <sup>な</sup>や <sup>な</sup>童 <sup>な</sup>声 <sup>な</sup>立てい <sup>な</sup>てい <sup>な</sup>泣 <sup>な</sup>こ <sup>な</sup>ばかり  
 (面影が立ってたまらないときは童のような声をたてて泣きたいばかりだ。) KA1-111, 136

- 091 <sup>おも</sup>思てい <sup>う</sup>さえ <sup>あとさき</sup>居れい <sup>しちい</sup>ば <sup>むいじいぐるまめく</sup>後先 <sup>あゆ</sup>どう <sup>あゆ</sup>なり <sup>あゆ</sup>ゆる <sup>あゆ</sup>節 <sup>あゆ</sup>や <sup>あゆ</sup>水 <sup>あゆ</sup>車 <sup>あゆ</sup>廻り <sup>あゆ</sup>歩む  
 (思てさえいれば早くなるか遅くなるかの違いだけです。四季を繰り返す節のように、いつかは巡り会えることが出来る。) KA1-123

- 092 <sup>おも</sup>思てい <sup>じゅ</sup>自由 <sup>むいじいなか</sup>ならぬ <sup>づいきい</sup>水 <sup>てい</sup>中 <sup>と</sup>ぬ <sup>と</sup>お <sup>と</sup>月 <sup>と</sup>手 <sup>と</sup>に <sup>と</sup>取 <sup>と</sup>ら <sup>と</sup>ら <sup>と</sup>じ <sup>と</sup>し <sup>と</sup>ゆ <sup>と</sup>て <sup>おもいぢい</sup>思 <sup>おもいぢい</sup>潰 <sup>おもいぢい</sup>ぶ <sup>おもいぢい</sup>し

「私肝焼きゆり

(ワキモヤキュリ)」

(思っても自由にならない水の中のお月様。私の手に取れなくてじれったく思う「私の肝を焼く」。) KA1-049

- 093 <sup>おも</sup>思てい <sup>し</sup>ヨ <sup>し</sup>ン <sup>ほう</sup>ソ <sup>まさ</sup>ラ <sup>し</sup>死 <sup>し</sup>ん <sup>し</sup>だ <sup>し</sup>方 <sup>し</sup>が <sup>し</sup>勝 <sup>し</sup>り <sup>のほら</sup>死 <sup>つち</sup>ね <sup>つち</sup>い <sup>つち</sup>ば <sup>つち</sup>野 <sup>つち</sup>原 <sup>つち</sup>ぬ <sup>つち</sup>土 <sup>つち</sup>ど <sup>つち</sup>う <sup>つち</sup>か <sup>つち</sup>ぶ <sup>つち</sup>り <sup>つち</sup>ゆる

(死ねば野原の土が被る。) KA2-201

\*KA1-248には歌い出しのみ掲載あり。

- 094 <sup>おも</sup>思 <sup>おも</sup>わ <sup>おも</sup>だ <sup>おも</sup>な <sup>おも</sup>し <sup>おも</sup>ゆ <sup>おも</sup>て <sup>おも</sup>い <sup>おも</sup>ど <sup>おも</sup>う <sup>おも</sup>声 <sup>おも</sup>ぬ <sup>おも</sup>か <sup>おも</sup>け <sup>おも</sup>ら <sup>おも</sup>り <sup>おも</sup>よ <sup>おも</sup>め <sup>おも</sup>い <sup>おも</sup>想 <sup>おも</sup>出 <sup>おも</sup>し <sup>おも</sup>ャ <sup>おも</sup>る <sup>おも</sup>節 <sup>おも</sup>ど <sup>おも</sup>声 <sup>おも</sup>や <sup>おも</sup>差 <sup>おも</sup>上 <sup>おも</sup>ろ
- (思ってもいないのに口先だけでは声をかけられない。本当に思いだした時にこそ貴方に声をおかけ致しましょう。) KA1-157

- 095 <sup>おも</sup>思 <sup>おも</sup>わ <sup>おも</sup>ば <sup>おも</sup>む <sup>おも</sup>互 <sup>おも</sup>に <sup>おも</sup>外 <sup>おも</sup>さ <sup>おも</sup>ば <sup>おも</sup>む <sup>おも</sup>互 <sup>おも</sup>に <sup>おも</sup>ま <sup>おも</sup>し <sup>おも</sup>り <sup>おも</sup>く <sup>おも</sup>ち <sup>おも</sup>互 <sup>おも</sup>に <sup>おも</sup>思 <sup>おも</sup>て <sup>おも</sup>い <sup>おも</sup>給 <sup>おも</sup>れ

(思うのも思わないのもお互いにですが、お互いに真実の言葉を思て下さい。) KA1-158

- 096 <sup>め</sup>オ <sup>め</sup>ロ <sup>め</sup>シ <sup>め</sup>ョ <sup>め</sup>芽 <sup>め</sup>出 <sup>め</sup>た <sup>め</sup>よ <sup>め</sup>若 <sup>め</sup>松 <sup>め</sup>様 <sup>め</sup>よ <sup>め</sup>枝 <sup>め</sup>も <sup>め</sup>栄 <sup>め</sup>え <sup>め</sup>る <sup>め</sup>葉 <sup>め</sup>も <sup>め</sup>繁 <sup>め</sup>

(歌意略) KA3-187

097 かくしゃんちなりゆみ<sup>ていん</sup> 天とう地<sup>ち</sup>や鏡<sup>かがみ</sup> 恥<sup>は</sup>ずかしゃ<sup>は</sup>や影<sup>かげ</sup>ぬ<sup>う</sup> 映<sup>う</sup>ちる<sup>お</sup>思<sup>お</sup>むえ<sup>ば</sup>ば  
 (隠したってなるまい、天と地は鏡だ。恥ずかしい影が映ることを思え  
 ば。) KA1-016

098 風<sup>かぜ</sup>まわる<sup>くも</sup>までに<sup>くも</sup> 雲<sup>さんじゅうさん</sup>まわる<sup>なが</sup>までに<sup>くま</sup> 三<sup>くま</sup>十<sup>とう</sup>三<sup>みい</sup>流れ<sup>みい</sup> 此<sup>こ</sup>処<sup>こ</sup>じ<sup>と</sup>止<sup>と</sup>ろ  
 (風が回るまでに雲が回るまでに三十三流れはここで止めよう。) KA1-183

**\*KA1-267 3句目\*\*の踊り**

・歌集3に是は「ほう女童(かんでく並べ)」の連歌の踊り止めとあり

099 片<sup>か</sup>親<sup>た</sup>ぬ<sup>う</sup>祝<sup>ま</sup>や<sup>ん</sup> 片<sup>か</sup>手<sup>た</sup>し<sup>う</sup>舞<sup>ま</sup>こ<sup>ん</sup>ろ<sup>ん</sup> 双<sup>た</sup>親<sup>う</sup>ぬ<sup>う</sup>祝<sup>ま</sup>や<sup>ん</sup> 双<sup>た</sup>手<sup>う</sup>し<sup>う</sup>舞<sup>ま</sup>こ<sup>ん</sup>ろ<sup>ん</sup>  
 (片親の祝いは片手でマンカイをして両親のお祝いには両手でマンカイを  
 しましょう。) KA1-023

**\*2句目かたて°でまんこ**

100 加<sup>か</sup>那<sup>な</sup>が<sup>お</sup>面<sup>も</sup>影<sup>かげ</sup>や<sup>い</sup> 時<sup>と</sup>々<sup>と</sup>ど<sup>う</sup>立<sup>た</sup>ち<sup>ち</sup>ゆる<sup>る</sup> あ<sup>お</sup>ん<sup>も</sup>ま<sup>か</sup>面<sup>も</sup>影<sup>かげ</sup>や<sup>い</sup> 勝<sup>ま</sup>て<sup>ま</sup>いた<sup>ま</sup>ち<sup>ま</sup>ゆ<sup>り</sup>り  
 (愛しい彼女の面影は時々にはしか浮かばないがお母さんの面影はそれより  
 勝って浮かぶ。) KA4-040

・032 (KA1-078) に対して姑が歌った歌。

101 加<sup>か</sup>那<sup>な</sup>が<sup>し</sup>ま<sup>わ</sup>し<sup>ま</sup>い<sup>と</sup>う<sup>な</sup>わ<sup>わ</sup> 糸<sup>いと</sup>繩<sup>なわ</sup>ば<sup>か</sup>け<sup>い</sup>て<sup>い</sup>い<sup>い</sup> 面<sup>お</sup>影<sup>も</sup>ぬ<sup>た</sup>立<sup>た</sup>て<sup>い</sup>ば<sup>い</sup> 手<sup>た</sup>操<sup>く</sup>り<sup>ゆ</sup>寄<sup>よ</sup>し<sup>い</sup>ろ<sup>ろ</sup>  
 (愛しい彼女の住んでいる集落と自分の住んでいる集落と糸繩をかけて  
 思いだした時は手繰り寄せろ。) KA1-110

102 加<sup>か</sup>那<sup>な</sup>が<sup>な</sup>か<sup>わ</sup>な<sup>か</sup> い<sup>い</sup>り<sup>ゆ</sup>ん<sup>ん</sup>人<sup>ち</sup>ぬ<sup>う</sup>居<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup> 花<sup>は</sup>ぬ<sup>つ</sup>露<sup>ゆ</sup>こ<sup>ぼ</sup>し<sup>し</sup> 風<sup>か</sup>ど<sup>う</sup>あ<sup>あ</sup>た<sup>た</sup>る<sup>る</sup>  
 (愛しい彼女と私の中に入り込む人はいない。花は露をこぼして風が当た  
 る。) KA1-164

・男女の性交を花の露と風に例えている。

103 加<sup>か</sup>那<sup>な</sup>と<sup>は</sup>な<sup>な</sup>さ<sup>ま</sup>く<sup>ら</sup>ば<sup>ば</sup> 枕<sup>まくら</sup>も<sup>た</sup>い<sup>ち</sup>ら<sup>が</sup>ぬ<sup>う</sup> 互<sup>た</sup>い<sup>ち</sup>違<sup>が</sup>い<sup>ら</sup>ぬ<sup>う</sup> 腕<sup>うで</sup>枕<sup>まくら</sup>  
 (歌意略) KA1-211

104 葡<sup>か</sup>萄<sup>ね</sup>木<sup>ぎ</sup>ぬ<sup>い</sup>下<sup>した</sup>や<sup>か</sup> 狩<sup>わ</sup>り<sup>えん</sup>ま<sup>が</sup>わ<sup>わ</sup>す<sup>と</sup>と<sup>も</sup>ろ<sup>ろ</sup> 妾<sup>わ</sup>が<sup>えん</sup>縁<sup>が</sup>側<sup>わ</sup>に<sup>と</sup> 伴<sup>とも</sup>し<sup>し</sup>お<sup>し</sup>い<sup>ろ</sup>ろ  
 (葡萄の木の下は何処からでもよく見えるところ。家の縁側にお供してあ  
 げましょう。)

105 か<sup>う</sup>ふ<sup>な</sup>ど<sup>く</sup>う<sup>り</sup>きの<sup>り</sup>シ<sup>な</sup>マ<sup>り</sup>に<sup>り</sup> 女<sup>う</sup>一<sup>な</sup>人<sup>な</sup>う<sup>ら</sup>ら<sup>ぬ</sup>ぬ<sup>り</sup> で<sup>お</sup>い<sup>き</sup>吾<sup>ぎ</sup>き<sup>や</sup>ふ<sup>り</sup>た<sup>て</sup>て<sup>い</sup>て<sup>い</sup>い<sup>り</sup> 寄<sup>ゆ</sup>ら<sup>て</sup>て<sup>い</sup>い<sup>り</sup>  
 遊<sup>あそ</sup>ば  
 (こんなに大きな集落に女が一人もいない。さあ私達はふりたてて集まっ

て遊ぼう。)

- 106 枯木踏台めえとうてい 実り木引き寄しいてい 落ちていれいばむはかちい  
加那とう一道

(枯木をふんづけ土台にし生木を引っ張っているけれど、落ちたなら野となれ山となれた、愛しい彼女と一緒にだから。) KA1-079, 191

- 107 喜界や湾泊 水焦がれいとぅりゆり 宇宿 港 金久 水焦がれい

(喜界島の湾は潮が焦がれて蒸発するほどに浅い。宇宿の港金久の川尻も浅くて水が焦がれる。) KA1-244

\* 3 句目潮焦れ取りゆる (うしゅくがれとぅりゆる) 4 句目山田平田  
(やまだひらた)

- 108 妬る目ばなしゆてい 貴方達声聞きやし 時やあらし声 聞きやし給れ

(貴方方の声を聴かせるその時はよい声を聴かせて下さい。) KA2-252

- 109 昨日今日不思議しゃ 夢 繁さやしいが 懐 気ぬ加那ぬ 近さあていどう

(昨日今日と不思議な事に彼女の夢ばかり見ている。これは愛する彼女が近くにきているからだ。) KA1-166

\* 1 句目昨日ぬ不思議しゃ (きぬぬうとまらしゃ) 4 句目近さなてど°  
(ちきやさなてど°)

- 110 きばて摺れい、摺れい、姉妹達 摺れいばナ衣装 戴らしゅんど

(頑張って摺れ摺れ女の人達、摺ればもう一升追加してあげるんだよ。) KA1-240, 263

・ないしゅを衣装と解釈して「きれいな衣装をあげる」との訳もあり、米つきと稲摺りは女の仕事だった。「いねぬしいられりよむえ、しいりいばないしゅ、かみいらしゅんど」と演唱する人もいる。

- 111 厳しい親あていどう 吾身ぬ立ちやる 黄金 水 差上てい 拝がでいおしいろ

(厳しい親だったから私はこんなに一人前になったんだ。黄金の水をさして拝んであげましょう。) KA2-026

- 112 きびし親加那志 間 近きやさやしいが 妾が縁側に 案内しおしいろ

(厳しい親加那志が後生に旅をするまでの間は近いのですが、家の外縁側

にお供して下さい。) KA1-186

- 113 <sup>きもしやげい</sup> 哀 <sup>かな</sup> 気ぬ加那 <sup>がしやるおむえ</sup> が 其様思 <sup>なれい</sup> ば <sup>いしゅ</sup> 絹物ぬ目ぬ穴 <sup>めい</sup> や <sup>あな</sup> 針ぬ目ぬ穴 <sup>はり</sup> や <sup>めい</sup> 針ぬ目ぬ穴 <sup>あな</sup> や  
 (愛しい彼女がそのような思いであれば着物や針の目の穴から見たように

お互いの気持ちは通じている。) KA1-169

- 114 <sup>きもしやげい</sup> 懐しゃげいぬ加那ぬ <sup>おもいな</sup> 想懐ちいかしゃや <sup>わどう</sup> 吾体 <sup>やはやは</sup> に柔々 <sup>ちい</sup> と <sup>ぐと</sup> う 着きゆる如に  
 (愛しい彼女の事を非常に心に思っている。私の肌に柔らかくつくように。)

- 115 <sup>きもしやげい</sup> 懐 <sup>かな</sup> 気ぬ加那 <sup>はなだ</sup> や 肌抱 <sup>とき</sup> きゆる時 <sup>いき</sup> や 息ぬ <sup>あ</sup> 上げい <sup>さ</sup> 下げいぬ <sup>しい</sup> 知られいぐるしゃ  
 (愛しい彼女の肌を抱いている時は息が荒くなっていくのが知られにくい。)

\* 2 句目腕抱きゆる時や (うでだきゆるときや)

- 116 <sup>きもしやげい</sup> 懐 <sup>かな</sup> しゃげいぬ加那 <sup>ちいぢいみいあみいも</sup> や いしゃるひぬ <sup>も</sup> 鼓 雨漏らし漏らし <sup>も</sup> なんだんどうなり <sup>も</sup> ゆり  
 (愛しい彼女) (泣きたくなる。)

KA4-082

- 117 <sup>きもしやげい</sup> 懐 <sup>さと</sup> ぬ里 <sup>ゆなはかざちよ</sup> が とものおむえ <sup>し</sup> ば <sup>い</sup> 夜半風 <sup>い</sup> 連れいてい <sup>い</sup> 忍 <sup>い</sup> でい <sup>い</sup> 来 <sup>い</sup> もれ  
 (愛しい彼氏と同じ思いになれば夜中に風と供に忍んでいらっしゃい。)

KA1-170

\* 2 句目其ん思いなれ°ば (うんおもいなれ°ば)

- 118 <sup>きやんむ</sup> 気病 <sup>ころ</sup> になと <sup>う</sup> うてい <sup>あ</sup> り <sup>ん</sup> 転 <sup>ま</sup> でい <sup>ふりいむん</sup> 居れい <sup>とも</sup> ば <sup>い</sup> 吾阿母馬廉者 <sup>い</sup> や <sup>い</sup> ユタ <sup>い</sup> ば <sup>い</sup> 供 <sup>い</sup> し  
 「がいぎやてい」

(恋の病になって転んでいるところ、お母さんの馬鹿は自分が恋をしていることも知らないでユタ神様をお供してきた。) KA1-256

- 119 <sup>きゅう</sup> 今日ぬ <sup>ほこ</sup> 祝 <sup>いちい</sup> しゃや <sup>まさ</sup> 何時 <sup>いちい</sup> よりも <sup>こ</sup> 勝 <sup>ぐと</sup> り <sup>い</sup> 何時 <sup>たば</sup> も <sup>い</sup> 斯 <sup>い</sup> の <sup>い</sup> 如 <sup>い</sup> に <sup>い</sup> あ <sup>い</sup> ら <sup>い</sup> し <sup>い</sup> 給 <sup>い</sup> れ  
 (今日の喜ばしさは何時の日よりも勝っている。いつもこのようにあって

下さい。) KA1-030, 142

- 120 <sup>きゅう</sup> 今日ぬ <sup>ほこらしゃ</sup> 祝 <sup>もの</sup> や <sup>ていん</sup> 物 <sup>しらくも</sup> に <sup>と</sup> た <sup>ぐと</sup> と <sup>い</sup> え <sup>い</sup> れ <sup>い</sup> ば <sup>い</sup> 天 <sup>い</sup> ぬ <sup>い</sup> 白雲 <sup>い</sup> ば <sup>い</sup> 取 <sup>い</sup> た <sup>い</sup> る <sup>い</sup> 如 <sup>い</sup> に  
 (今日の喜ばしさを物に例えたとしたら天にある白雲を取った位に嬉し

い。) KA1-031

- 121 <sup>きゅう</sup> 今日ぬ <sup>ゆ</sup> 良 <sup>ひ</sup> かる <sup>まさだね</sup> 日に <sup>お</sup> 蒔種 <sup>まさだね</sup> ば <sup>い</sup> 下 <sup>い</sup> ろ <sup>い</sup> し <sup>い</sup> 蒔種 <sup>い</sup> の <sup>い</sup> よ <sup>い</sup> う <sup>い</sup> に <sup>い</sup> 祝 <sup>い</sup> て <sup>い</sup> い <sup>い</sup> お <sup>い</sup> し <sup>い</sup> ろ

(今日のとても良い日に蒔種を下ろして、その蒔種を重宝にお祝い致しますしょう。)

・1句目の“今日ぬ”はたいてい歌われない。

- 122 今日<sup>きんんと</sup> 風<sup>あしんと</sup>れいなりゆり 明日<sup>あしんと</sup> 風<sup>あしんと</sup>れいなりゆり 蛸<sup>たふとり\*</sup>取<sup>と</sup>人<sup>と</sup>ぬ妻<sup>と</sup>や あれろこれろ  
(今日も海は風ている。明日も海は風ている。蛸取りをする妻は忙しい。)

KA1-202

- 123 清<sup>きよらと</sup>妻<sup>と</sup>ば戴<sup>かむい</sup>てい 肝<sup>きも</sup>許<sup>ゆる</sup>しうくな 名<sup>ゆかり</sup>馬<sup>ま</sup>ぬ手<sup>た</sup>縄<sup>な</sup> ゆるしうくな  
(きれいなお嫁さんを貰って心を許しておくな。上等の馬のたずなを許しておくな。) KA1-193

- 124 蜜<sup>くね</sup>柑<sup>ぎ</sup>木<sup>ぎ</sup>ぬ根<sup>ね</sup>や 狩<sup>か</sup>りまわすところ 妾<sup>わね</sup>が縁<sup>えん</sup>側<sup>がわ</sup>に 伴<sup>とも</sup>しおしいろ  
(蜜柑の木の下は何処からでもよく見えるところ。家の縁側にお供してあげましょう。) KA1-188

\*1句目蜜柑木ぬ根や (くねいぶんぎいぬむとや)

- 125 暮<sup>く</sup>らさらぬ暮<sup>くら</sup>し し居<sup>ち</sup>れい玉<sup>たま</sup>黄<sup>が</sup>金<sup>ねい</sup> 節<sup>し</sup>や 水<sup>むい</sup>車<sup>じ</sup>廻<sup>ぐる</sup>り合<sup>あ</sup>ゆり  
(暮らせないくらい苦しい生活をしているのをよく知っていなさい、愛しいわが子よ。しかし、何時までも苦しい時ばかりではない。必ず良くなる時がくるんだよ、時節は水車のようにくるくると回っているから。)

KA1-046

- 126 倉<sup>くら</sup>ぬ雨<sup>あま</sup>しゆだり 害<sup>ゆむい</sup>鳥<sup>どり</sup>ぬ下<sup>さ</sup>がてい いやきやがゆむん頭<sup>がまち</sup> しらんぬ下<sup>さ</sup>がてい  
(高倉の萱茸きの一番下の雨落ちに害鳥が下がっている。お前達の汚い頭にはしらみがぶら下がっている。) KA4-115歌注4

- 127 子<sup>こ</sup>ぬ可<sup>か</sup>愛<sup>な</sup>しゃあれいば 何<sup>ぬ</sup>ぬ心<sup>し</sup>配<sup>お</sup>ぬありよめい 心<sup>し</sup>配<sup>お</sup>ぬある時<sup>とき</sup>や 吾<sup>わ</sup>ぬに知<sup>し</sup>らし  
(子供が可愛ければ何の心配があるか。心配のある時は私に知らせなさい。) KA1-179

- 128 恋<sup>こい</sup>ぬ便<sup>い</sup>りしゆま 繁<sup>しげ</sup>くしいろしいれいば 吾<sup>わ</sup>家<sup>か</sup>に照<sup>てい</sup>り照<sup>てい</sup>りと あるく人<sup>ち</sup>ぬうらぬ  
(恋のやり取りを頻繁にすれば貴方の家に明るく尋ねてくる人がいなくなる。) KA1-155

- 129 此<sup>こ</sup>処<sup>こ</sup>は重<sup>しげ</sup>富<sup>とみ</sup> 越<sup>こ</sup>ゆれば吉<sup>よしの</sup>野<sup>よしの</sup> 吉<sup>よしの</sup>野<sup>よしの</sup>こゆれば 鹿<sup>か</sup>児<sup>こ</sup>の島<sup>しま</sup>

## (歌意略) KA1-227

- ・重富、吉野ともに鹿児島県内の地名。

130 コセントウセンなれいば 三日<sup>みき</sup>水<sup>むいじい</sup>ぬはりゆり 夫<sup>うとらふい</sup>送りゆる女子<sup>うなく</sup> 其処<sup>うまじ</sup>  
浴<sup>あめ</sup>そ

(三日水が流れている。夫を送る女はそこで水を

浴びらせよう。) KA2-202

- ・第1句を「おせんこーせん」と、また第2句を「三日戻り戻り(みきやもどりもどり)」と歌う人もいる。

131 今年<sup>ことし</sup>年<sup>とし</sup>加<sup>か</sup>奈<sup>な</sup>志<sup>し</sup> 果<sup>か</sup>報<sup>ふ</sup>な年<sup>とし</sup>加<sup>か</sup>奈<sup>な</sup>志<sup>し</sup> 道<sup>みち</sup>ぬ枯<sup>かれ</sup>草<sup>くさ</sup>に 真<sup>ま</sup>米<sup>ぐめい</sup>稔<sup>いな</sup>りゆり

(今年の年加那志はとても豊年な年加那志。道端の枯草にまで真米がなつた。) KA1-033

- ・加那志は敬称。

132 今年<sup>ことし</sup>代<sup>ゆ</sup>や一<sup>ち</sup>倉<sup>くら</sup> 来<sup>や</sup>年<sup>ね</sup>代<sup>い</sup>や二<sup>た</sup>倉<sup>くら</sup> 更<sup>み</sup>来<sup>し</sup>年<sup>ゆ</sup>が代<sup>み</sup>や三<sup>み</sup>倉<sup>くら</sup> 三<sup>み</sup>倉<sup>くら</sup>建<sup>た</sup>ていろ

「が」

(今年は一倉を一つ建て、来年は一生懸命働いて二倉建て、再来年は更に一生懸命に働いて三倉建てよう。) KA1-034

- ・高倉などにはいじゅの木を使う。

133 穴<sup>こもりあささ</sup>浅<sup>あ</sup>あていどう 濁<sup>ねい</sup>れ水<sup>むいじい</sup>や溜<sup>たま</sup>る 心<sup>こころ</sup>浅<sup>あ</sup>あていどう 百<sup>もも</sup>名<sup>な</sup>立<sup>た</sup>ちゆり

(浅い窪みがあると濁った水が溜る。人間は善悪をわきまえて行動しないとあっちこっちから噂される。) KA1-015

134 是<sup>これ</sup>程<sup>ほど</sup>ぬ遊<sup>あそ</sup>び 組<sup>く</sup>立<sup>み</sup>ていていからや 夜<sup>ゆ</sup>ぬあけてい 太<sup>てい</sup>陽<sup>だん</sup>ぬ 上<sup>あ</sup>る迄<sup>まで</sup>も

(これほどの遊びを組み立てたからには夜が明けて太陽が上がるまで踊りましょう。) KA1-107, 117

135 五<sup>ご</sup>尺<sup>しゃく</sup>石<sup>いしがき</sup>垣<sup>かき</sup>に 葡<sup>は</sup>ゆるもも 蔓<sup>かじゅら</sup> 根<sup>むらう</sup> や無<sup>ね</sup>だなしゆて 栄<sup>さか</sup>え清<sup>きよ</sup>らさ

(五尺の石垣に這っている百葛、根はないのに栄えていてきれいだ。)

KA1-205

- ・蔓に例えた歌で一見栄えたようで実の根はない人を歌った。

136 五<sup>ご</sup>尺<sup>しゃく</sup>手<sup>て</sup>拭<sup>のげ</sup>に 名<sup>な</sup>前<sup>まえ</sup>ば染<sup>そ</sup>めて 里<sup>さと</sup>が来<sup>い</sup>もれば 好<sup>よ</sup>い長<sup>なが</sup>さ

(歌意略) KA1-215

137 五<sup>ご</sup>尺<sup>しゃく</sup>手<sup>て</sup>拭<sup>のげ</sup>に 名<sup>な</sup>前<sup>まえ</sup>ば染<sup>そ</sup>めて 汝<sup>や</sup>が友<sup>どしこ</sup>達が<sup>み</sup> 見<sup>み</sup>がなりゆみ

## 「生藍（なまあい）」

(歌意略) KA1-214

- 138 西郷隆盛 陸軍大将 三十五万の兵を率く

(歌意略) KA3-191

- 139 先降らば降らでい 後降らば降らでい 今降りゆる雨ぬ 吾うらむしゃや  
(先に降るなら降りなさい、後に降るなら降りなさい、今降っている雨を私は恨めしく思う。) KA4-091

- 140 先生れてい居ていむ 後生れてい居ていむ 歌や吾が胸ぬ 教養掟  
(先に生まれていても、後に生まれていても歌は自分の胸に躑んでいるものだ。) KA1-146

- 141 蓆入 忘れたが ねいんごろ女が宿に 蓆飲む時 思出しゃが  
(下げ道具を忘れたんだが、妾の家に。煙草を飲む時に思い出したんだが。) KA1-243

・下げ道具は煙草入れの事。

- 142 鱧釣ぬ如に 曲ぎいきらば曲ぎいれい 汝等に曲ぎいられる 吾やあらぬ  
(鮫を釣る釣り針のように私達を曲げられるなら曲げて見なさい。おまえ達に曲げられる私じゃないよ。) KA1-099, 150

- 143 貴方はいくつか 二十二か三か 何時も変わらぬ 二十二三

(歌意略) KA1-209

- 144 三味線取てい 聞きゃし欲しゃやしいが なきやば妬じゆる人ぬ うらばき  
やしゆり

(三味線を取って聞かしたいのだけれども貴方に約束した人がいたらどうしよう。) KA2-251

・第1句目不完全、さむしとりわけてと思われる。

- 145 三味線持ちいもれ 歌付けていおしいろ 歌付かぬ時や 情付けいろ  
(三味線を持っていらっしゃい。歌をつけて差しあげましょう。もし歌がつかないときは情けをつけて下さい。) KA4-037

- 146 皿ぬ水だもそ 吹きいば波立ちゆり 吾が悪さあていどう 他人が立ちゆり  
(皿の水さえも吹けば波が立っている。自分が悪いんだと控えてこそ、よそは立つんだ。) KA1-011



- 147 佐和伊久や実久 マチ女くわや大島 黒潮離めいとうてい 想い想い悩い  
 (佐和伊久は加計呂間島の実久村の人、まち女くわは大島本島の人。黒潮  
 で二人の間を離されているので、逢いたくても逢えずに思い悩む。)

## KA1-229

- 148 息子蒔けまけ 大根種蒔せ おろし育てて 野菜肴  
 (息子よ蒔け蒔け、大根の種を蒔いて育てなさい。) KA1-208, 236
- 149 節とう芝挿や 七日離めりより 愛げいぬ加那や 何ひざめりより  
 (新節と柴差しは七日間離れているが、愛しい彼女と私はどれだけ離れて  
 いるのだろうか。) KA1-085
- 150 節や水車 廻り歩むとも 貴方達とう逢う節ぬ ありかしょりか  
 (一年の節は水車のように巡っているけれど、貴方と巡り会える節はある  
 だろうか。) KA1-124
- 151 四角四つ柱 上や綾天井 下や錦畳 敷ちやる清さ  
 (四角四柱、上は綾の天井、下は錦の畳を敷いてとてもきれいだ。)  
 KA1-039 歌注5
- 152 島ぬ尻口に 探みいきいれいば探みいれい 汝等に探みいられる 吾やあら  
 ぬ  
 (集落の出入口まで行って探しきれぬならば探して見なさい。おまえ達に  
 探される私じゃないよ。) KA1-116
- 153 しまやだぬしまも かわるぎやねらぬ みずにわかされて ことばかわろ  
 (集落はどの集落でも集落自体は変わらない。ただ集落毎の水が違うから  
 言葉も変わるんだ。)
- 154 潮風 砂妬る 白浜に葡ゆる 先や定まらぬ 根なしかぢら  
 (潮風で砂が飛び散っている白浜に這っている、どこまで伸びるのか行き  
 先が定まらない根無し葛。) KA1-206
- ・根無し葛はぐんばい昼顔の事
- 155 塩道長浜なんてい 童ぬ泣きんしょしゃが 其れや誰が所以いちば ケサ松  
 やすいはだ  
 (塩道長浜で育ち盛りの青年の泣声とする。それは誰のせいかと言えだけ  
 さまつやすはだという女のせいだ。) KA1-252

## \* 4 句目ケサ松汗肌 (けさまつあしはだ) 歌注 6

- 156 しゅみちながはまなんてい うまていなじうかば いきやだるさあていむお  
うりやとらていのるな  
(塩道長浜に馬がつかないであっても、自分の体がどんなにきついからとい  
ってそれを取って乗るな。)
- 157 しゅんかねくわが<sup>ふし</sup>節や <sup>わ</sup>吾が<sup>く</sup>熟しうしゃが <sup>さむし</sup>三味線<sup>む</sup>持ちいもれ <sup>ち</sup>着きいてい。  
おいしいろ  
(しゅんかねくわの節は私がよく知っているので三味線を持っていらっし  
ゃい。伴奏をして差し上げますから。) KA1-242
- 158 しゅんにやしゅんにや<sup>い</sup>汝等<sup>ま</sup>や <sup>わ</sup>吾等<sup>さげ</sup>と <sup>さ</sup>唄比しゅんにや <sup>さ</sup>鱧釣<sup>り</sup>ぬ如<sup>ぐと</sup>に <sup>ま</sup>曲ぎい  
てい<sup>おし</sup>差上ろ  
(するかするかおまえ達、私達と冗談<歌比べ>をするかおまえ達、鮫を  
釣る釣り針のようにぺしゃんこに曲げてやろう。) KA1-098, 149
- 159 <sup>しらかねい</sup>白金<sup>はな</sup>ぬ花<sup>むいじい</sup>や <sup>い</sup>水<sup>な</sup>かけいてい <sup>い</sup>活<sup>な</sup>けろ <sup>い</sup>情<sup>な</sup>かけみしよし <sup>い</sup>生<sup>な</sup>きゃし給<sup>た</sup>れ  
(白金の花は水をかけて活けなさい。情けをかけて活けて下さい。)  
KA1-125
- 160 <sup>しらくも</sup>白雲<sup>まさ</sup>や <sup>か</sup>勝<sup>か</sup>り <sup>か</sup>風<sup>か</sup>連れいてい <sup>い</sup>行<sup>い</sup>き<sup>わね</sup>ゆり <sup>わね</sup>吾<sup>い</sup>や<sup>い</sup>汝<sup>い</sup>方<sup>い</sup>連れいてい <sup>い</sup>行<sup>い</sup>き<sup>い</sup>が<sup>い</sup>なりよむ  
え  
「行き欲やしが」  
(白雲は私より勝っている。風を連れて行くから。私はおまえを連れて行  
けるだろうか「行きたいのだが」。) KA1-058, 127
- 161 <sup>しら</sup>白<sup>はま</sup>浜<sup>く</sup>ぬ<sup>むいじい</sup>小<sup>い</sup>花<sup>い</sup> <sup>わね</sup>水<sup>か</sup>焦<sup>な</sup>がれいと<sup>な</sup>う<sup>な</sup>り<sup>な</sup>ゆり <sup>わね</sup>吾<sup>か</sup>や<sup>な</sup>加<sup>な</sup>那<sup>お</sup>思<sup>も</sup>てい、 <sup>い</sup>し<sup>い</sup>の<sup>い</sup>け<sup>い</sup>と<sup>い</sup>う<sup>い</sup>り<sup>い</sup>ゆり  
(歌意不詳) KA1-073
- 162 <sup>しら</sup>白<sup>はま</sup>浜<sup>まさ</sup>ぬ<sup>か</sup>真<sup>か</sup>砂<sup>か</sup>子<sup>か</sup> <sup>う</sup>数<sup>い</sup>ぜ<sup>い</sup>ば<sup>い</sup>数<sup>い</sup>ぜ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>り<sup>い</sup>ゆり <sup>う</sup>親<sup>い</sup>ぬ<sup>い</sup>戒<sup>い</sup>め<sup>い</sup>や <sup>か</sup>数<sup>か</sup>や<sup>か</sup>ならぬ  
「天ぬ星々や」  
(白浜の真砂は「天の星々は」根気よく数えていけば数え切れるが、親か  
らの教えは数え切れない。) KA1-020, 021
- 163 <sup>じゅう</sup>十七<sup>ちち</sup>、<sup>はち</sup>八<sup>ご</sup>頃<sup>ろ</sup>や <sup>ゆ</sup>夜<sup>く</sup>ぬ<sup>く</sup>暮<sup>く</sup>れい<sup>く</sup>どう<sup>く</sup>待<sup>く</sup>ち<sup>く</sup>ゆる <sup>い</sup>何<sup>い</sup>時<sup>い</sup>が<sup>い</sup>夜<sup>い</sup>ぬ<sup>い</sup>暮<sup>い</sup>れいてい <sup>わ</sup>吾<sup>じ</sup>自由<sup>ゆ</sup>な  
り<sup>ゆ</sup>り  
(十七、八の頃は夜が暮れるのが待ち遠しい。何時になったら、夜になっ  
て私は自由になるのだろうか。) KA4-061

- 164 千里ある道や馬のれいば吾自由舟乗ていぬ沖自由やならぬ  
 (千里ある道でも馬に乗れば私の自由に彼女の所へ行けるが、舟は乗って  
 沖合いに出してしまえば自由にはならない。) KA1-050
- 165 高い山から谷そこ見れば瓜や茄子の花ざかり  
 「老いた茄子の」  
 (歌意略) KA1-224
- 166 高さ坂登がてい脚停みい停みい待ちゆれいば来吾が玉黄金  
 「待ちゆれ玉黄金 待ちゆれ黄金」  
 (年を取ると高さの坂は登っても、足を休みながらゆっくりとしか進めな  
 い。だから急がずに待っていなさい、私の大切な子供よ。) KA1-249
- 167 立てば芍薬坐れば牡丹歩む姿は百合の花  
 (歌意略) KA2-205
- 168 種子播しょんちえ餅貫れが来ぼてな餅くれてい給れ祝ていおしいろ  
 (種下ろし行事で餅貫いが来たのですが、餅をどうぞ下さい、貴方の家を  
 祝って差し上げましょう。) KA4-010 \* KA1-235には歌い出しのみ  
 掲載あり。
- 169 玉乳房掴めいれいば染だるより勝り後軽るがると行もれ旦那様  
 (乳房を掴んだのなら関係するより勝っている。だからそのままさっさと  
 後ろへ軽々と帰って行きなさい、旦那さん。) KA1-062
- 170 鼓ぐわや打ていば馬ぬ皮どう打ちゆる継子や打ていば百名立ちゆり  
 「他人が誇る(よそがわらう)」  
 (太鼓を打てば馬の皮を打つ。継子を打てば百人に噂が立つ。「他人に笑  
 われる」。) KA1-114, 139, 194, 195, 207
- 171 一夜ぬ宿やしゅま借欲しゃやしいが厳し親加那志問ぬ近きやさ  
 (一晩だけの宿でさえも貸してあげたいが、厳しい親加那志が後生の旅を  
 するまでの時期がもう間近いからそれまで待って下さい。) KA1-185
- 172 一升も不要二升もいらぬ泡盛ぬお酒さみご賜れ  
 (一升もいらぬ、二升もいらぬ、泡盛のお酒を三合下さい。) KA1-130
- 173 灯燈ぐわ買て呉れいれい油買て呉れいれい灯燈ぐわぼとぼし妾や待ち  
 ゆろ

- (ちょうちんを買って頂戴。油を買って頂戴。ちょうちんを灯して私は貴方がくるのを待っているから。) KA1-172
- 174 月つきとう眺ながめてむ 花はなとう眺ながめてむ 肌はだす染かなだる加かな那わすや 忘れくる苦しやしゃ  
(美しい月を眺めても美しい花を眺めてもより美しい肌を染めた彼女の事が忘れられない。) KA1-061
- 175 手拭てぬぐい忘わすれたが ねいんごろじょが宿やどに 汗あせぬいじゅん時とき 思おぼしんしゃが  
(手拭を忘れたんだが、妾の家に。汗が出た時に思い出したんだが。) KA4-032
- 176 天てんに弛たゆまれろ 雪ゆきぬ茅かやむら貫らてい 今日きょうぬ吉よか日ろひに 茸ふちる美きよさ  
(歌意不詳) KA1-038
- 177 天てんぬ白しら雲くもに 繩なわ「橋はし」かかけて何ぬしゆり 及およばらぬ加かな那に 手て指さし何いしゆり  
(天の白雲に繩「橋」をかけてどうするか。望みのない彼女に手を出してどうするか。) KA1-059
- 178 年とし齡とや寄いてい行ききゆり 先さきや定さだまらぬ 荒あ海らうに浮うちゆる 舟ふねぬ如ごとに  
(年は取って行くが、自分の指針は決まらない。丁度荒海に浮かんだ船のようだ。) KA1-044
- 179 泊とまり口ぐち迄がでいや 加かな那に送あいらてい 沖と合なか乗のり出しすいば 汐しほ風かぜ頼たのも  
(港まで彼女に送られて沖に乗り出せば潮風に頼もう。) KA1-068
- 178 殿と地ぬち阿あ爾みしゃれに 祝よろこしいきいてい 差おしい上しろ 月しぬ立たちはな 頃ころに お祝よろこ見み候まれ  
(上殿地の奥様にお祝いを付けて差し上げましょう。新しい節の始めにお祝いを付けて差し上げましょう。) KA1-025, 232
- 181 殿と地ぬち阿あ弥みしゃれや 果か報ふな生まれやしいが 今こと年しゆ代じや一ち倉くら 来やね年ねや二た倉くら  
(上殿地の奥様はとても幸せな生まれなので、今年度は高倉を一つ、来年度は高倉を二つ建てましょう。) KA1-028
- 182 鶏とりは鳴うたたが まだ夜よは夜よ中なか 心こ静ころかに 寝ねてござれ  
(歌意略) KA1-213
- 183 長ながい刀かたなは さし方よう法ほうがござる 前まぬ上あれば 尻しり下さがる  
(歌意略) KA1-210
- 184 ながかんきしりに たばこばつめて やほがどうしんこが みがなりゆめ  
(歌意略)

185 なぎゃがするうたや わぎゃがみにいらぬ さむしふりわけてい きぎゃしたぼれ  
「なぎゃがうたぐいや」

(貴方がする歌は「貴方の歌声は」私は気に入らない。三味線を鳴らして聴かせて下さい。) \* KA2-099

186 なぎゃとうわぎゃゆらてい あそびゆたるしいちいや きぬやきゅやゆみ  
いば むかしなりゆり

(貴方方と私達と共によりあって遊んだ八月の節は、昨日今日とその日数を数えれば、もう昔になった。)

187 貴方達<sup>なぎゃ</sup>とうわぎゃ<sup>ゆら</sup>集てい 何時遊<sup>いちい あそ</sup>でい見りゆり 遊ぶ時<sup>あそ</sup>やしゅま<sup>とく</sup> 解けいて  
い遊<sup>あそ</sup>ぼ

(貴方方と私達とよりあって何時遊べるのだろうか、遊ぶその間だけでもお互いに存分解け合って遊びましょう。) KA1-105

\* 1 句目貴方達とう此処集てい (なぎゃとうくまゆらてい)

188 貴方達<sup>なぎゃ</sup>始め<sup>はじ</sup>えあらぬ 私達<sup>わぎゃ</sup>始め<sup>はじ</sup>えあらぬ 昔祖先<sup>むかしうやふじ</sup>ぬ 慣例<sup>しいしいき</sup> 掟<sup>さだめ</sup>

(貴方達が始めたのではない。私達が始めたのではない。昔の御先祖様が躰定めたものだ。) KA1-108

• KA1-051 1 句目 2 句目のわぎゃとなぎゃは交換可。

189 なぎゃむあそびじいき わぎゃむあそびじいき たげにあそびじいき あそ  
でいたぼれ

(貴方達も遊び好き、私達も遊び好き、お互いに遊び好きだから遊んで下さい。) KA1-104

\* 1 句目 2 句目のわぎゃとなぎゃは交換可。

190 貴方達<sup>なぎゃ</sup>む賑<sup>あ</sup>しゃぎいてい 私達<sup>わぎゃ</sup>む賑<sup>あ</sup>しゃぎいてい 互<sup>たげ</sup>に賑<sup>あ</sup>しゃぎいてい 遊<sup>あそ</sup>  
でい給<sup>た</sup>ぼれ

(貴方達も荒々しく一生懸命に、私達も荒々しく一生懸命に、お互いに荒々しく一生懸命に遊んで下さい。) KA1-119

191 貴方方<sup>なぎゃ</sup>む肝<sup>きも</sup>いじいてい 吾々<sup>わぎゃ</sup>む肝<sup>きも</sup>いじいてい 互<sup>たげ</sup>に肝<sup>きも</sup>いじいてい 遊<sup>あそ</sup>でい給<sup>た</sup>  
ぼれ

(貴方達も心の底から、私達も心の底から、お互いに心の底から遊んで下さい。) KA1-121

- 192 貴方方むはめいしいきいてい 吾々むはめいしいきいてい 互にはめいし  
いきいてい 遊でい給ぼれ  
(貴方達も急いで、私達も急いで、お互いに急いで遊んで下さい。)  
KA1-120
- 193 貴方々む稀々とう 吾等む稀々とう 互に稀々とう 遊でたぼれ  
(貴方達も久しぶりに私達も久しぶりにお互いに久しぶりに遊んで下さい。)  
KA2-138
- 194 情かけ見しよし 生きやし欲しゃやしいが 他人ぬ玉黄金 生きやし何しゆり  
(情けをかけて活かしたいが、よその子供を育てて何になるのか。)  
KA1-126
- 195 懐か声聞けいば 息やぬかれらぬ 時やあらし声 ききやし給ぼれ  
(貴方の懐かしい声を聴いていると私達も息を抜いて歌うような事は出来  
ない。その時はもっとよい声を聴かせて下さい。) KA1-204
- 196 貴方と妾とうや 羽織のひもよ 一代末代の 結び合い  
(歌意略) KA1-226
- 197 ナ夜む明け加那志 鶏む啼ていかなし 是程ぬあそび 止みいかなりゆむい  
(もう夜も明けて鳥も鳴きだしているけれど、これほどの遊びだからまだ  
まだ止めることは出来ない。) KA1-118
- 198 貴方とう 吾縁や きゃしゃる縁かいな 離きゆりやとう 思ば 近さなりゆり  
(貴方と私の縁はどんな縁でしょう。別れたと思ったらまた近くなった。)  
KA1-165
- 199 貴方とう 妾縁や 焼山ぬ蔓 枝や枯れたんてむ 根や一つ  
(貴方と私の縁は焼けた山の葛だ。葉の先の方は焼けて枯れたとしても、  
根、心は一つだ。) KA1-161
- 200 何程惚れても お庭の蘇鉄 垣の外から 見たばかり  
(歌意略) KA1-212
- 201 二三度ぬ飯や 食みや食だりとも 加那ぬ事思てい 肉やならぬ  
(二三度の食事は済ませているが、彼女の事ばかり思って肉にならない。)  
KA1-168
- 202 西からむ寄りより 東からむ寄りより 西東ぬ稻魂 今どう寄りより

- (西からも集まっていっしやる。東からも集まっていっしやる。西、東の稲魂加那志が今ここに集まっていっしやる。) KA1-035, 203
- 203 <sup>にし さねく</sup>西ぬ実久なんていよ <sup>やまとぶねい わ</sup>大和船ぬ破れたさ <sup>うしゅと</sup>潮凧れいれい <sup>と</sup>凧れいれい <sup>じん</sup>錢ぐ  
わ <sup>じん</sup>錢ぐわひらお  
(西の実久村で大和の舟が沈没した。潮よ凧ぎなさい、船に積んである錢を拾おう。) KA1-230
- 204 <sup>にし なかばるしゅうた</sup>西ぬ仲原主旦よ <sup>は</sup>恥ぢいきれいいていなかばる <sup>う</sup>其れいが <sup>しゅ</sup>為うたる <sup>やく</sup>役や <sup>まわ</sup>佐和  
<sup>いく</sup>伊久に <sup>と</sup>奪られてい  
(西の仲原主<人名>、恥をかいて仲原主、それがしていた役は佐和伊久<人名>に取られて。) KA1-228, 237
- 205 <sup>にしやど</sup>裏戸ば開けてい <sup>あ</sup> <sup>かな</sup>加那待ち <sup>ゆる</sup>ゆる夜や <sup>ゆあらし</sup>夜嵐や <sup>しげ</sup>激く <sup>かな</sup>加那や <sup>もら</sup>来ぬ  
(北口の戸を開けて愛しい彼女を待つ夜に、冷たい北風は吹くし彼女は来ない。) KA1-080
- 206 <sup>にじま</sup>御座敷ち <sup>ひ</sup>ちゆて <sup>ま</sup>待ちゆれ <sup>まくらと</sup>枕取てい <sup>ま</sup>待ちゆれ <sup>ゆなはかせ</sup>夜半風連れいてい <sup>しの</sup>忍でい <sup>い</sup>行き  
よろ 「取てい」  
(ござを敷いていて「取って」待っておれ。枕を取って待っておれ。夜中風を連れて忍んで行くから。) KA1-171
- 207 <sup>にゃと</sup>川口川水や <sup>かわいじい</sup>潮出合てい <sup>うしゅいき</sup>戻る <sup>もど</sup>吾や <sup>わね</sup>加那出逢てい <sup>かないき</sup>泣し <sup>な</sup>ど <sup>もど</sup>う戻る  
(河口の川の水は潮に押されて戻って行く、私は彼女と逢って振られて泣いて戻る。) KA1-070
- 現在の保育所の側にその河口がある。
- 208 <sup>にわ</sup>庭ぬ <sup>いしがき</sup>石垣 <sup>かね</sup>金なり <sup>はま</sup>浜ぬ <sup>しるずなくむよ</sup>白砂 <sup>いし</sup>米なり <sup>くろうしゅ</sup>磯ぬ <sup>さけ</sup>黒潮 <sup>酒</sup>酒なり <sup>ゆり</sup>ゆり  
(庭の石垣は金になる。浜の白砂は米になる。磯の黒潮は酒になる。)
- 209 <sup>は</sup>剥いだ <sup>なまし</sup>生爪や <sup>や</sup>痛でい <sup>わか</sup>ど <sup>わか</sup>別れり <sup>や</sup>よ <sup>わか</sup>り <sup>なえん</sup>痛ま <sup>わえん</sup>じい <sup>えん</sup>別れり <sup>えん</sup>よ <sup>えん</sup>みい <sup>えん</sup>貴縁 <sup>えん</sup>妾縁  
「貴方とう吾んとう」  
(剥いでしまった生爪は痛くて肉と別れる。痛まずに別れられるのか貴方の縁と私の縁「貴方と私と」。 KA1-076
- 210 <sup>は</sup>恥す <sup>お</sup>かくや <sup>ね</sup>無らぬ <sup>なま</sup>今ぬ <sup>めらべんき</sup>女童達 <sup>わ</sup>吾 <sup>き</sup>きゃに <sup>わ</sup>ら <sup>わ</sup>れ <sup>ん</sup>ち <sup>ち</sup>おも <sup>い</sup>き <sup>ら</sup>ず  
「青年達」  
(恥ずかしくはないのか今の女童達「青年達」私達に馬鹿にされて笑われ

るとは思いもしない。)

- 211 <sup>はちいがちい</sup> 八月 <sup>しちい</sup> 節 <sup>よ</sup> や <sup>もど</sup> 縷 <sup>もど</sup> 戻り <sup>わきや</sup> 吾等 <sup>たちごろ</sup> が年頃 <sup>いちい</sup> や <sup>もど</sup> な何時戻ろ

(八月の節は毎年、寄り戻って来る。私達の若い時期はもう何時戻るのだろうか。) KA1-082, 140, 264

- 212 <sup>はちいがちい</sup> 八月 <sup>きよう</sup> や来り <sup>ふ</sup> 振り袖 <sup>そでい</sup> や <sup>ね</sup> 無らじ <sup>あみ</sup> しまし <sup>れぬ</sup> 肌衣装 <sup>か</sup> 貸らし <sup>たほ</sup> 賜れ

(八月の節は来たけれど、踊りに行く振袖もありません。高貴な家の奥様、衣装を貸して下さい。) KA1-083

- 213 <sup>はつか</sup> 二十日 <sup>ゆ</sup> 夜 <sup>くら</sup> ぬ暗さ <sup>はぎ</sup> 脛 <sup>や</sup> ひき <sup>や</sup> ね <sup>らぬ</sup> 加那 <sup>かな</sup> が事 <sup>こと</sup> 思 <sup>お</sup> め <sup>え</sup> ば <sup>あか</sup> 明 <sup>ひるま</sup> ぬ昼間

「加那に思めえなせば」「真昼」

(二十日の晩は暗くて足も曳かれないが、彼女の事を思えば明るい昼間と同じだ。) KA1-066

- 214 <sup>はつか</sup> 二十日 <sup>ゆ</sup> 夜 <sup>くら</sup> ぬ暗さ <sup>はぎ</sup> 脛 <sup>や</sup> ひき <sup>や</sup> れ <sup>らぬ</sup> 一夜 <sup>ちや</sup> ぬ宿 <sup>やど</sup> やし <sup>ま</sup> 借 <sup>か</sup> らした <sup>たほ</sup> ぼれ

「二日夜ぬ暗さ」

(二十日「二日」)の夜は暗くて足が曳かれないので一晩の宿さえも貸して下さい。) KA1-184

- 215 <sup>はなぞめい</sup> 花染 <sup>ふれい</sup> に惚 <sup>わらべ</sup> てい <sup>とじ</sup> 童妻 <sup>かめい</sup> 戴 <sup>はな</sup> てい <sup>さお</sup> 花ぬ萎 <sup>わく</sup> れ <sup>と</sup> らば <sup>おも</sup> 妾事 <sup>思</sup> へ

(きれいな女の人に惚れて、子供のような若い嫁を貰うが、その嫁が年を取ってしおれたなら私の事を思いなさい。) KA1-071

・先妻が歌った歌

- 216 <sup>はな</sup> 花 <sup>な</sup> なら <sup>い</sup> ば <sup>い</sup> 句 <sup>えだ</sup> 枝 <sup>ぶ</sup> 振り <sup>なり</sup> や <sup>ふ</sup> いらぬ <sup>なり</sup> 容姿 <sup>ふ</sup> 振り <sup>ひと</sup> や <sup>こころ</sup> いらぬ <sup>心</sup> 人や心

(花なら句いがあれば枝振りはいらない。人も成り振りではなく心だ。)

KA1-008

- 217 <sup>はな</sup> 花 <sup>あわ</sup> ぬ哀 <sup>さ</sup> れ <sup>や</sup> ニギ <sup>うい</sup> ぬ上 <sup>こぼ</sup> ぬ小 <sup>えん</sup> 花 <sup>あわ</sup> 縁 <sup>な</sup> ぬ哀 <sup>わん</sup> れ <sup>と</sup> しゃ <sup>や</sup> 貴 <sup>なん</sup> 方 <sup>と</sup> う <sup>わん</sup> 妾 <sup>と</sup> う

(花で哀れなのはニギの上にある小花だ、縁で哀れなのは貴方の縁と私の縁だ。) KA1-072

・ニギは刺の沢山ある植物名

- 218 <sup>はな</sup> 花 <sup>むらう</sup> や根 <sup>に</sup> あれば <sup>にど</sup> 二 <sup>か</sup> 度 <sup>さ</sup> 還 <sup>え</sup> てい <sup>さ</sup> 咲 <sup>き</sup> ゅ <sup>り</sup> <sup>にど</sup> 二 <sup>か</sup> 度 <sup>さ</sup> 還 <sup>え</sup> てい <sup>さ</sup> 咲 <sup>か</sup> ぬ <sup>な</sup> 貴 <sup>は</sup> 花 <sup>わ</sup> 吾 <sup>は</sup> 花

「貴縁と吾縁」

(花は根があれば二度、三度と咲くけれど、二度かえて咲かない貴方の花と私の花「貴方の縁と私の縁」。)



- 219 <sup>はまう</sup> 浜打ちゆる <sup>なみ</sup> 波や <sup>う</sup> 打ち <sup>かさ</sup> 重 <sup>かさ</sup> べ重 <sup>やまとうとのさま</sup> 大和殿様や <sup>どうみしょ</sup> 肌衣装 <sup>かさ</sup> 重 <sup>べ</sup> べ  
 (浜に打ち寄せる波は幾重にもなっている。大和の殿様も幾重にも着物を着ている。) KA1-197
- 220 <sup>はまちじりやちじりや</sup> 浜千鳥千鳥 <sup>な</sup> 啼 <sup>はまちじりや</sup> くな <sup>な</sup> 浜千鳥 <sup>な</sup> 泣 <sup>おもかげ</sup> き <sup>まさ</sup> い <sup>た</sup> ば <sup>た</sup> 面影ぬ <sup>まさ</sup> 勝 <sup>た</sup> て <sup>た</sup> い <sup>た</sup> 立 <sup>ち</sup> ち <sup>ゆ</sup> り  
 「千鳥ちば千鳥 (ちじりやちばちじりや)」  
 (浜千鳥千鳥よ、泣くな浜千鳥、おまえが鳴けば面影が一層立ってくるではないか。) KA1-245
- 221 <sup>ひと</sup> 一つ <sup>うた</sup> 唄 <sup>はばか</sup> いま <sup>うた</sup> しょう <sup>あやま</sup> 弾 <sup>ごめん</sup> り <sup>ごめん</sup> ながら <sup>ごめん</sup> 唄 <sup>ごめん</sup> ぬ <sup>ごめん</sup> 誤 <sup>ごめん</sup> り <sup>ごめん</sup> 後 <sup>ごめん</sup> 免 <sup>ごめん</sup> な <sup>ごめん</sup> さ <sup>ごめん</sup> され  
 (歌意略) KA2-206
- 222 ひるまむいじいぶしゃや こねていこねらりゆり わぬがかなみぶしゃ  
 こねがならぬ  
 (昼間の水欲しさは我慢すれば出来るが、私の彼女の見たさには我慢が出来ない。)
- 223 <sup>ふたおや</sup> 両親 <sup>が</sup> 加 <sup>な</sup> 那 <sup>し</sup> 志 <sup>とし</sup> 年 <sup>とし</sup> や <sup>とし</sup> 老 <sup>とし</sup> て <sup>とし</sup> い <sup>とし</sup> 行 <sup>とし</sup> き <sup>とし</sup> ゆ <sup>とし</sup> り <sup>とし</sup> 黄 <sup>とし</sup> 金 <sup>とし</sup> 橋 <sup>とし</sup> 架 <sup>とし</sup> け <sup>とし</sup> い <sup>とし</sup> て <sup>とし</sup> い <sup>とし</sup> 戻 <sup>とし</sup> し <sup>とし</sup> 拜 <sup>とし</sup> も  
 (両親は年を取って行く。黄金橋という特殊な橋を架けて若く戻してあげましょう。) KA1-017
- 224 <sup>ふねい</sup> 船 <sup>い</sup> 出 <sup>し</sup> 三 <sup>日</sup> や <sup>み</sup> 雨 <sup>かぜ</sup> 風 <sup>か</sup> どう <sup>か</sup> し <sup>か</sup> ゅ <sup>か</sup> た <sup>か</sup> る <sup>か</sup> 風 <sup>か</sup> や <sup>か</sup> 加 <sup>か</sup> 那 <sup>か</sup> 想 <sup>か</sup> て <sup>か</sup> い <sup>か</sup> 雨 <sup>か</sup> や <sup>か</sup> 目 <sup>か</sup> 泪 <sup>か</sup>  
 (舟を出して三日目に風雨に出会った。愛しい彼女の事を思うとこの雨は私の涙だ。) KA1-069
- 225 <sup>ふねい</sup> 舟 <sup>しんぞ</sup> ぬ <sup>きょらむん</sup> 新 <sup>きょらむん</sup> 造 <sup>きょらむん</sup> と <sup>きょらむん</sup> 美 <sup>きょらむん</sup> 人 <sup>きょらむん</sup> の <sup>きょらむん</sup> よ <sup>きょらむん</sup> い <sup>きょらむん</sup> の <sup>きょらむん</sup> は <sup>きょらむん</sup> 人 <sup>きょらむん</sup> が <sup>きょらむん</sup> 見 <sup>きょらむん</sup> た <sup>きょらむん</sup> が <sup>きょらむん</sup> る <sup>きょらむん</sup> の <sup>きょらむん</sup> り <sup>きょらむん</sup> た <sup>きょらむん</sup> が <sup>きょらむん</sup> る  
 (歌意略) KA1-219
- 226 <sup>ふねい</sup> 舟 <sup>きょらむん</sup> ぬ <sup>きょらむん</sup> お <sup>きょらむん</sup> も <sup>きょらむん</sup> て <sup>きょらむん</sup> に <sup>きょらむん</sup> 美 <sup>きょらむん</sup> 女 <sup>きょらむん</sup> ば <sup>きょらむん</sup> 乗 <sup>きょらむん</sup> せ <sup>きょらむん</sup> て <sup>きょらむん</sup> 上 <sup>きょらむん</sup> り <sup>きょらむん</sup> 下 <sup>きょらむん</sup> り <sup>きょらむん</sup> の <sup>きょらむん</sup> 舟 <sup>きょらむん</sup> は <sup>きょらむん</sup> ら <sup>きょらむん</sup> そ  
 「舟ぬ鱸なんじ (ふねいぬろなんじ)」  
 (歌意略) KA1-217
- 227 <sup>ふねい</sup> 舟 <sup>は</sup> 走 <sup>は</sup> ら <sup>は</sup> し <sup>は</sup> 美 <sup>は</sup> ら <sup>は</sup> さ <sup>は</sup> 宇 <sup>は</sup> 宿 <sup>は</sup> 湊 <sup>は</sup> 金 <sup>は</sup> 久 <sup>は</sup> 舟 <sup>は</sup> 浮 <sup>は</sup> き <sup>は</sup> い <sup>は</sup> て <sup>は</sup> 美 <sup>は</sup> ら <sup>は</sup> さ <sup>は</sup> 津 <sup>は</sup> 代 <sup>は</sup> 干 <sup>は</sup> 潟 <sup>は</sup> 泊 <sup>は</sup>  
 「喜界湾泊」  
 (舟を走らせてきれいなのは宇宿の河口だ、舟を浮かべてきれいなのは手花部の津代泊「喜界湾泊」。) KA1-007
- 228 <sup>ふねい</sup> 舟 <sup>は</sup> 浮 <sup>は</sup> き <sup>は</sup> い <sup>は</sup> と <sup>は</sup> う <sup>は</sup> て <sup>は</sup> い <sup>は</sup> 清 <sup>は</sup> 女 <sup>は</sup> ば <sup>は</sup> の <sup>は</sup> せ <sup>は</sup> て <sup>は</sup> 慕 <sup>は</sup> い <sup>は</sup> 青 <sup>は</sup> 年 <sup>は</sup> 達 <sup>は</sup> に <sup>は</sup> 柁 <sup>は</sup> と <sup>は</sup> ら <sup>は</sup> そ  
 (歌意略) KA1-218

- 229 下手<sup>へた</sup>からどう<sup>なら</sup>習<sup>し</sup>てい 秀<sup>し</sup>れいてい や行<sup>い</sup>きゆり 優<sup>し</sup>れいららぬちし 悲<sup>し</sup>観<sup>の</sup>と  
うるな

(下手な時から一生懸命習って優れていくんだ。自分が優れないからとい  
って悲観するな。) KA1-012

- 230 ほう女<sup>めらべ</sup>童<sup>ことづ</sup>や 伝<sup>た</sup>言<sup>ばん</sup>けぬ 荳<sup>た</sup> 荳<sup>ばん</sup>とづけや 縛<sup>もつ</sup>れ 荳<sup>た</sup>

(歌意不詳) KA1-151, 251

- 231 曲<sup>まが</sup>りよ 高<sup>たか</sup>嶺<sup>ちち</sup>なんてい 灯<sup>ち</sup>燈<sup>う</sup>ぐわばとぼし 其<sup>う</sup>れいが 明<sup>あか</sup>がれいば 忍<sup>しの</sup>でいいもれ

(まがりよ高嶺でちょうちんを灯すので、それが明るくなったのを合図に  
人目を避けて忍んでいらっしゃい。) KA2-218

\* KA1-238には歌い出しのみ掲載あり。

- 232 誠<sup>まこと</sup>ある人<sup>ひと</sup>の 跡<sup>あと</sup>や 永<sup>い</sup>久<sup>ち</sup>迄<sup>まで</sup>も 匂<sup>にお</sup>い<sup>ふ</sup>く<sup>ふ</sup>く 手<sup>て</sup>拭<sup>ぬ</sup>香<sup>か</sup>しや

「頭巾(さじ)」

(非常に誠ある人の持っていた手拭「頭巾」はいつまでも良い香りがする。

KA1-081

- 233 真<sup>ま</sup>白<sup>しろ</sup>髪<sup>げ</sup>御<sup>ご</sup>年<sup>ねん</sup>寄<sup>ぎ</sup>に 祝<sup>よろこ</sup>しいきいてい 差<sup>さ</sup>上<sup>し</sup>ろ 節<sup>ふし</sup>ぬ立<sup>た</sup>ち初<sup>はつ</sup>に お祝<sup>よろこ</sup>召<sup>めい</sup>候<sup>こう</sup>れ

(白髪の御老人にお祝いを付けて差し上げましょう。新しい節の初めにお  
祝いを付けて差し上げましょう。) KA1-026, 233

- 234 真<sup>ま</sup>白<sup>しろ</sup>髪<sup>げ</sup>御<sup>ご</sup>年<sup>ねん</sup>寄<sup>ぎ</sup>や 果<sup>か</sup>報<sup>ふ</sup>な生<sup>ま</sup>れやしいが 今<sup>こと</sup>年<sup>し</sup>代<sup>じ</sup>や一<sup>ち</sup>倉<sup>くら</sup> 来<sup>やねい</sup>年<sup>ねん</sup>や二<sup>た</sup>倉<sup>くら</sup>

(白髪の長老はとても幸せな生まれなので、今年度は高倉を一つ、来年度  
は高倉を二つ建てよう。) KA1-029

- 235 ましりくち互<sup>た</sup>に 想<sup>おも</sup>い欲<sup>ぶ</sup>しゃやしいが 貴<sup>な</sup>方<sup>かた</sup>達<sup>たつ</sup>妬<sup>ね</sup>る人<sup>ひと</sup>ぬ 居<sup>ち</sup>れいばきやしゆり

(お互いに真実の言葉としたいが、貴方に約束した人がいたらどうしよ  
うか。) KA1-159

- 236 岬<sup>みさき</sup>潮<sup>しほ</sup>ぬ荒<sup>あ</sup>ら さ 汗<sup>あせ</sup>流<sup>は</sup>し 漕<sup>く</sup>ぎゆり 加<sup>か</sup>那<sup>な</sup>が事<sup>こと</sup>思<sup>おも</sup>てい 一<sup>ち</sup>權<sup>ごん</sup>二<sup>に</sup>權<sup>ごん</sup>

(岬の潮流は速いから汗をかいて漕ぐ。彼女の事を思って權を一漕ぎ、二  
漕ぎ。) KA1-067

• ここでは笠利町用の岬を指している

- 237 岬<sup>みさき</sup>頓<sup>とん</sup>原<sup>げん</sup>に 一<sup>ち</sup>叢<sup>そう</sup>ある 芒<sup>じ</sup>よ 其<sup>う</sup>れいが 花<sup>はな</sup>結<sup>むす</sup>でい 乱<sup>みだ</sup>れなりゆり

「持ていば(むていば)」

(岬のトンバラ石に一房だけあるすすき。それが花をつければあっちこっ

- ち咲き乱れる。) KA1-257
- 238 道にある石や 下駄ぬ歯ぬ仇 加那待ちゆる夜や 朋友どう仇  
 (道にある石は下駄の歯の敵、彼女を待っている夜は友達が敵。) KA1-056
- 239 道端ぬ堀立小屋や 七枝にかかる 吾々や貴方達袖に かかり欲しゃや  
 (道端にある堀立て小屋は雑木・雑草などの七つの枝に掛かる。私達は貴方達の袖に掛かりたい。) KA1-199
- 240 港笹草や シュクぬ孵化どころ 吾阿母懐や 吾生どころ  
 (港に生えている水草は、シュックくあいごの稚魚の孵化する所だ。お母さんの懐は私達の育つ所だ。) KA1-250
- 241 深山奥山に 蕾でいだる花や 今日ぬ佳日に 咲しゆる清さ  
 (深い奥の山に蕾んでいた花が今日のおめでたい日に咲いてきれいだ)  
 KA1-041
- ・深山奥山を家の奥の方、花を娘に例えている
- 242 昔祖先ぬ 島建ていぬ悪さ 加那が島吾島 間切変し  
 (昔の先祖の集落の作りは悪い。彼女が住む集落と、私が住む集落との間に境界を作っているから。) KA1-109
- 243 餅やかしゃ抱きゆり かしゃや餅抱きゆり 餅かしゃぬごとに 祝ていおし  
 いろ 「抱しゆていくらせ」  
 (餅は月桃花の葉を抱いている。月桃花の花は餅を抱いている。餅と月桃花のように祝って差し上げましょう。「抱いて暮らそう」) KA4-012
- 244 夫婦御主人に 慶着きいてい差上る 節ぬ立ち初に お祝召候れ  
 (夫婦が揃っているところに夫婦のためにお祝いをつけてあげましょう。八月の月の立ち初めにお祝いをして差し上げましょう。) KA1-024, 231
- ・1句目をめおとがしよしられにと歌う場合もある。
- 245 夫婦御主人や 果報な生れやしいが 今年代や一倉 来年や二倉  
 (ここの夫婦はとても幸せな生まれなので、今年度は高倉を一つ、来年度は高倉を二つ建てよう。) KA1-027
- 246 連れ草取人に 連れろにしいれば 縁ぬねだなしゆて もつれならぬ  
 (連れ草を取るのが上手な人に連れ草取りをしても縁がないのでは纏れる事が出来ない。) KA1-152

- 247 山<sup>やま</sup>行<sup>い</sup>きばクニンギ 磯<sup>いしよ</sup>行<sup>い</sup>きばウシュンギ 嗚呼<sup>あわれい</sup>この浮世<sup>うきよ</sup> 歩<sup>あゆ</sup>み苦<sup>くる</sup>しや  
 (山に行けばくにぎがある。海へ行けばうしゅんぎがある。同様に哀れにもこの浮世は歩きにくい。) KA1-014

・くにんぎは刺の沢山ある木、うしゅんぎは海辺に丸くなって立ち踏むと鋭く切れる貝の一種。

- 248 山<sup>やま</sup>登<sup>あ</sup>てい見<sup>み</sup>しんに 瀬<sup>しん</sup>先<sup>はな</sup>いじい見<sup>み</sup>しに チバク<sup>に</sup>だる胸<sup>むね</sup>や 晴<sup>う</sup>れて清<sup>きよ</sup>さ。  
 (山に登って見てみなさい、瀬の端まで行って見てみなさい、以下歌意不詳) KA2-018

- 249 山<sup>やま</sup>嶽<sup>たけ</sup>雲<sup>ぐも</sup>下<sup>さ</sup>がてい 夏<sup>なつ</sup>雨<sup>あめ</sup>ぬ近<sup>ち</sup>きやさ 加<sup>か</sup>那<sup>な</sup>ぬ思<sup>おも</sup>下<sup>さ</sup>がてい 吾<sup>わ</sup>に近<sup>ち</sup>きやさ  
 (向こう山の方から雲が下がったら夏雨が近くなる。彼女の思いが下がったら私の気持ちに近くなる。) KA1-246

- 250 大<sup>やまと</sup>和<sup>わた</sup>旅<sup>たび</sup>しいれいば 月<sup>ち</sup>日<sup>ひ</sup>数<sup>かず</sup>でい待<sup>まち</sup>ちゆり 後<sup>ご</sup>生<sup>せい</sup>が旅<sup>たび</sup>しいれいば 何<sup>なん</sup>数<sup>かず</sup>でい待<sup>まち</sup>ちゆり  
 (本土に旅にする人は月日を数えて帰ってくるのを待っていれば良いが、

あの世に旅する人は何を数えて待てば良いのでしょうか。) KA1-045

- 251 山<sup>やま</sup>ぬ木<sup>き</sup>ぬ枯<sup>か</sup>れいてい 蝉<sup>あし</sup>ぬ里<sup>しや</sup>下<sup>さ</sup>れいてい 蝉<sup>あし</sup>ぬ里<sup>しや</sup>下<sup>さ</sup>れいてい 啼<sup>な</sup>かぜえ  
 うられいりよむえ

(山の木が枯れて蝉が集落に下りてきて、蝉が集落に下りてきて鳴かずにいられるか。) KA1-190

\* 4 句目啼かだなヤ戻りよる

- 252 山<sup>やま</sup>ぬ木<sup>き</sup>ぬ高<sup>たか</sup>さ 風<sup>かぜ</sup>に憎<sup>にく</sup>まれる 気<sup>き</sup>分<sup>ぶん</sup>高<sup>たか</sup>さ持<sup>む</sup>ていば 他<sup>よ</sup>人<sup>そ</sup>が誘<sup>わら</sup>う  
 (山の高い木が風に憎まれるように人間も気持ちを高く持って高慢になると他人から笑われる。) KA1-010

- 253 屋<sup>やん</sup>仁<sup>ごら</sup>川<sup>が</sup>の沙<sup>い</sup>魚<sup>ぶ</sup>や 餌<sup>いど</sup>かけいてい 釣<sup>ち</sup>りゆり 屋<sup>やん</sup>仁<sup>ごら</sup>ぬ女<sup>む</sup>童<sup>わらべ</sup>や さじいし釣<sup>ち</sup>りゆり  
 (屋仁川の沙魚は餌をかけて釣る。屋仁の女童は頭巾をプレゼントして釣る。) KA1-258

・さじいは昔は結婚式などによく被ったという

- 254 屋<sup>やん</sup>仁<sup>ごら</sup>ぬ「ヤンシロ」安<sup>やす</sup>実<sup>ざね</sup>主<sup>しゅ</sup>や 那<sup>な</sup>覇<sup>はん</sup>かち衣<sup>い</sup>装<sup>しゅ</sup>買<sup>か</sup>いが 衣<sup>い</sup>装<sup>しゅ</sup>や口<sup>くち</sup>実<sup>じ</sup>事<sup>じ</sup> 女<sup>な</sup>郎<sup>らう</sup>買<sup>か</sup>いが  
 「御装」 「御装」

(屋仁「ヤンシロ」の安実主は那覇まで上等な着物を買に行くが、それ

は口実で女郎買いに行ったんだ。) KA1-259 歌注 7

\* 4 句目女郎連びが (なぞれゆうびが)

255 ゆさり夜や此処に 色々ぬあそび 明日じ面影ぬ 立ていばぎゃしゅり  
(今晚夜通しここでする色々な遊び、明日になってもっと遊んでおけば良  
かったと、面影が立ったらどうしよう。) KA1-135

256 四ヶ月なりがでいや 袖ぬ下にかくし 哀れい此の月や 他人に知れろ  
(四ヶ月までは袖の下にかくしていたがああ今月にはお腹が大きいので他  
人に知れてしまう。) KA1-177

257 夜はらす舟や 隠れい瀬どうかたき 加那待ちゆる夜や 友どう仇  
(夜の暗闇に出す舟は珊瑚礁のリーフが敵。彼女を待っている夜は友達が  
敵。) KA1-055 歌注 8

258 他人からや誇う 親からや折檻る 折檻てい折檻殺るし 親ぬ迷惑  
(他人からは笑われる、親からは折檻される。厳しく折檻されるが、親の  
迷惑にしかならない。) KA1-113, 138

・親の立場から歌った歌

259 他人ぬ目ぬ繁さ 口ぬ恐るしゃや 片親にやしゅま 知らしたぼれ  
(他人からじろじろ見られて噂をされるのが恐ろしい。片親<母親>に知  
らせて下さい。) KA1-178

260 夜中三星や 見しゃる人や居らぬ 吾が加那忍でい 行きんどう見しゃる  
「見しどう言よる」  
(南十字星を<今>見ている人はいない。私が彼女の所へ行く時に見た  
「見たから言うんだ」。) KA1-065

・南十字星は奄美大島では一年中干潮時の午前二時頃に見える

261 六十重なれば 百二十ぬ御年 牡蛎富さい見実れ 吾親がなし  
(六十歳が重なれば百二十の御年になる。牡蛎が流れ物に付くくらいに長  
生きして、いつまでも幸せになって下さい、私の親父様やおふくろ様)  
KA1-022

262 別れてや行きゅり ぬが形見おしいろ 汗肌ぬ手拭 うれが形見  
(別れて行くので何を形見に差し上げましょう。汗を拭った手拭、これを  
形見に差し上げましょう。) KA4-109

- 263 <sup>わがみちい</sup> 吾身摘でいにしどう <sup>よそみ</sup> 他人が身上や <sup>し</sup> 知りゆり <sup>むりしい</sup> 無理為るな <sup>うきよ</sup> 浮世 <sup>なさけ</sup> 情ばかり  
 (自分の身を摘んで痛みを知ってこそ他人の身を知ることが出来る。無理をしてはいけないよ、世の中は情けばかりだから。) KA1-009
- 264 <sup>わが</sup> 吾等が <sup>たちごろ</sup> 年頃や <sup>ゆくれい</sup> 夜ぬ暮れい <sup>ま</sup> ちゆる <sup>いちい</sup> 何時が <sup>ゆくれい</sup> 夜ぬ暮れいてい <sup>わじ</sup> 吾自由な  
 りゆり  
 (私達が十七、八歳の頃は夜が暮れるのが待ち遠しい。何時、夜が暮れて私の自由に遊べるようになるのだろうか。) KA1-141, 201
- 265 <sup>わきゃ</sup> わきゃやさおればな <sup>なき</sup> なきゃやさ <sup>さき</sup> さきじばな <sup>さき</sup> さきじばな <sup>わきゃ</sup> わきゃと <sup>あそ</sup> あそで  
 いたぼれ  
 (私達はしおれていく年寄りだ。あなた達はこれから咲きでる若い年代だ。若い人達や、私達と遊んで下さい。)
- 266 <sup>わが</sup> 私達や <sup>さき</sup> 咲出花 <sup>うや</sup> 親や <sup>としゆ</sup> 年寄りゆり <sup>としゆ</sup> 年寄りゆる <sup>うや</sup> 親ぬ <sup>しわ</sup> 心配 <sup>どう</sup> どうしょーる  
 (私達はこれから伸びていく花だ。親は年を取っていく。年を取っていく親の心配をしている。) KA1-018
- \* 4 句目世話しおじろ (しわしおじろ)
- 267 <sup>わが</sup> 妾達や <sup>なま</sup> 今迄でいや <sup>うた</sup> 歌ぬ <sup>ふしし</sup> 節知らぬ <sup>さき</sup> 先生れぬ <sup>うじた</sup> うじた「あせた」 <sup>ゆ</sup> 教しいてい  
 給ぼれ  
 (私達は今までは歌の節を知らない。先に生まれた叔父さん「お姉さん」、教えて下さい。) KA1-145
- 268 <sup>わが</sup> 吾等や <sup>なま</sup> 今がでいや <sup>まじゅ</sup> 妬る人 <sup>ちゅ</sup> や居らぬ <sup>にぎらし</sup> 逃牛ぬ <sup>ぐと</sup> 如に <sup>うし</sup> 仰ぎ <sup>ほり</sup> い晴げい  
 (私は今までは約束した好きな相手はいない。丁度逃げている牛のように自由自在だ。) KA1-129, 160
- 269 <sup>わど</sup> 吾体に <sup>やは</sup> 柔々と <sup>ちちき</sup> 随来たる <sup>えん</sup> 縁ば <sup>たる</sup> 誰が <sup>ちゅ</sup> 他人ぬ <sup>う</sup> 居てい <sup>わなか</sup> どう 吾仲破て  
 (私の体に軟らかくついていた彼女との縁を誰かよその奴に私の仲を破られて。) KA1-163
- 270 <sup>わぬ</sup> 吾が <sup>こ</sup> 此の <sup>しま</sup> 郷に <sup>うや</sup> 親主人 <sup>ちゅ</sup> 居らぬ <sup>わぬ</sup> 吾かな <sup>しゅん</sup> しゃしゅん人 <sup>ど</sup> ど <sup>わ</sup> 吾親 <sup>うや</sup> 主人  
 (私のこの集落に親や自分の主人となる人はいない。私を可愛がってくれる人こそ私の親や主人だ。) KA1-047

## \* 4 句目吾親親類 (わうやはるじ)

- 271 <sup>わぬ</sup> 吾や <sup>い</sup> 汝等連れいてい <sup>いき</sup> 行き欲 <sup>が</sup> しゃや <sup>しゅん</sup> やしいが <sup>さき</sup> 先に <sup>まじゅ</sup> 妬る人 <sup>ちゅ</sup> ぬ <sup>う</sup> 居れい <sup>ま</sup> ば何し

ゆり

(私はおまえ達を連れて行きたいけれど先に約束して来ているいる人がいたらどうしよう。) KA1-128

- 272 吾家わがに照ていり照ていりとう 歩あきん人ちやうていむ 思おもわだなしゆて 言葉ことば情なまけ
- (私の家に頻繁に尋ねてくる人がいても言葉だけの情けをかける人だよ。)

KA1-156

- 273 童声わらべこゑ立たててい、泣なきがでいやしいるな 泣なきがでいやしいれば 他人た人が笑わらう

(子供の様な声を立てて泣きまではするな。泣きまではすれば他人が笑う)

KA1-112, 137

- 274 坐ましゆてい唄うたしいれば ももだるさやしいが ディ吾等わが振ふり立たててい、遊あそでい給たまはれ

(座っていて歌をすれば股がだるくなるので、さあ私達も立ち上がり盛り上がって踊って遊ぼう。) KA1-198

- 275 \*\*ぬ遊あそび 七廻ななまいり遊あそでい 八廻やまいり廻まいぐてい こまじとうめいろ

(\*\*のあそびを七巡り遊んで八巡り巡ってここで止めよう。) KA1-268

・歌集3に道ぐり踊りの最後に踊ると記載あり KA3, P25。道ぐり踊りは道の角で踊る踊り

- ad1 きょらむんとうじかむえてい しんやくのまんよりか いきやしやうまれとうてい おやぬかいほ

(きれいなお嫁さんを貰って苦労するよりか、どんな生まれでも親の介抱くをするお嫁さんを貰いなさい>)

## 歌 注

歌注1：集落と山の間にある原野に鎌を持って行って萱を刈り、束を前後に担い棒を差し込んで担いで集落に運んだ。昔は礎の上に建てる家はなく穴を掘って股のついた木<主に椎の木>を差し込みその上に桁を、その上にやのいを組んで萱を葺いた。特別上等な木というのは、けやき・いぬ

まき・ももなどで、いぬまきは7代、ももは6代持つと言われている。  
いぬまきは、一葉のためひとつばともいう。

歌注2：実在人物（本名、池田実和嘉）。文化元年三月没。島津家に献納する砂糖作りが上手で昇家に連れられて琉球で砂糖作りの技術を教えたと言われている。笠利町誌では宇宿の昇善庸志が文政十二年と天保二年の2度琉球で指導したとされているが、池田実和嘉は二度目の天保二年に一人砂糖たぎに選ばれて渡ったとされる。また、即興詩人でもあり、笠利の笠利鶴松と歌遊びをして掛け合ったと言う伝承がある。本歌は笠利鶴松が宇宿実和嘉に対して掛けた歌である。宇宿実政として伝承されている集落もあるようである（恵原1987 - 83, 笠利1978 - 61）。

歌注3：昔の逸話で物知りの利口者と金満家の次のような伝承がある。喜界島の非常に裕福な金満家が浦富という唯一の子供を亡くした。そこで、物知りの利口者（以下、利口者と記す）「親父、おまえ、浦富を戻したいか」金満家「ああ、それは戻したくて、私は夜も昼も寝ようと思っても諦め切れん、寝れん。」利口者「うん、そうか。それじゃ私が教えてやる。浦富を戻す方法が一つだけはあるんだ」とく言うと金満家は「それは喜んで、金満家「本当にありますか、先生」利口者「ある、私が言うようにそれじゃ聞きなさいよ。日本国中回ってね。私はお母さんを死なせていない、兄弟を死なせていない、子供を死なせていない、じいさんやばあさんを死なせていない、全然死なせていないという人から、たったの米、杯一杯でいいからそれを貰って来い。そのお米で、ご飯を炊いて御初にあげればちゃんと必ず戻って来るから探して来い」と言ったら、金満家は「かなり金もある人だから、そいつを間に受けて、大島全郡を回った。するとどこを回っても、私はついこの前、親を死なせた、兄弟を死なせた、妻を死なせた、夫を死なせた、じいさん、ばあさんを死なせたって言う人ばかりだって。だから、もうくたくたになってね、目までくぼんでへとへとになって帰ってきた。利口者「どうだ、探せたか。だから、そうだろうが。おまえ一人じゃないよ。浦富を死なせたのはおまえ一人じゃないんだ。よその人も子供も死なせておる。親父もおふくろも妻も子供も死なせておるんだろうが。悔やんでおった



か。」金満家「いや、悔やんでいる様子はなかった。」利口者「おまえ一人じゃないか、悔やんでおるのは。世間の人もそうだよ、みんな。悔やんだってしょうがないから、これ、諦めてみんな、おまえがみてきた通りなんだよ。となれば、おまえも諦めなければしょうがないだろうが。」金満家「分かりました。」その時、初めて分かりましたと、〈金満家は〉いった。

本集落ではこのような教訓的逸話として伝承されているが、一般にシマウタなどでは、薩摩代官の島妻となることを拒んだために村から追放され海へと流された女性の物語として歌われている。

歌注4：ここで言う害鳥は雀の事、雀は猫や鼠から身を守るために高倉の雨落ちの奥に丸い巣を作る事が多い。アメリカが占拠した時代にしらみ駆除が行われた。このような歌を歌うと相手側からKA1-185の「貴方達がる歌や……………」を返される。

歌注5：歌集3に宇宿では四角四つ橋やホウエラエのどみしよ節田やいしよばた節田ぬきよらさと誤謠されていると言う解説あり

歌注6：以下の物語が伝承されている。昔喜界島の塩道にけさまつという美人がいた。17,8歳になる一人の青年が彼女に求婚をしたが、その男は彼女にとって憎い人物だった。そこで、けさまつは「よし、聞き入れましよう」と言って塩道の長浜に彼女の乗る馬と青年と一緒にいき、青年に「馬の手綱を貴方の足にくぐって逃がさないように」と言った。そして、くぐらしてから口実を作り立ち上がって馬をピシャッと叩いた。驚いた馬は走りだし、青年は散々引き回されてとうとう死んだ。

歌注7：やんしろ安実主は万屋集落にも伝承があるという。万屋集落の小字長田にヤンシロという地名やヤンシロの墓がある。また、本歌の女郎買いも口実で安実主が那覇で闇取引をするために故意にこの噂を流したと言う伝承もある。逆に女郎買いで家までつぶしたと言う伝承もある。最近ではヤンシロとも屋仁ぬとも言わずにやーぬと言っている人もいる。

歌注8：宇宿の隣集落の土盛にイギリス泊りという浅瀬があり、昔イギリス船が難破したそうである。停泊期間中は、土盛女性が難破船と集落民の仲介をしていたが、その後、女性は出産したと言う話が伝えられている。

## 資料2 翻刻資料『資料3号 八月踊りの唄一字宿方面で唄われたものを中心にして一』

### 凡例

本資料は松田宝蔵氏が作成した八月踊り及び手踊り歌集の翻刻である。本文でのべたように氏は多々の歌集を残しており、最低四冊の歌集を筆者は確認している。本資料名中に「資料3号」とあるが、「資料1号」「資料2号」と記された歌集は、現在のところ確認していない。

- 原文は縦書きで、歌詞は漢字と平仮名、読み仮名は基本的に片仮名で記してある。また、五十音で書き表せない特殊な発音は仮名の左に△記号が付けられている。ここでは、△記号は<sup>レ</sup>記号に変換して「ト<sup>レ</sup>」「ジ<sup>レ</sup>」「で<sup>レ</sup>」「れ<sup>レ</sup>」のように記載した。
- 漢字の旧字体、異字体などは新字に改めた。
- 各節の冒頭に付けられている・や○は全て○に統一した。
- 句間を開ける事によって見やすくした為、各句間に不規則に付けられたカンマは除去した。
- 語意などが歌集の上の余白に記してある場合があるが、そのような情報は該当する歌詞の最後に\*印を付けて記述した。
- 歌詞の後ろに KA1-###の形で本歌集での通し番号を、その後ろに[###]の形で資料1における該当歌詞の通し番号を記した。
- 本資料の八月踊り主題歌編では、各踊りに通し番号が付けられてあり、踊り歌詞の節頭に本、主、ク、アなどと注釈が記されてある。本は本歌、主は主題歌、クはクズシ、アはアラシャゲの略と思える。本歌、主題歌の別にどのような意味があるのか確認できていない。また、クズシは旋律・舞踊ともに変化するもの、アラシャゲは舞踊は変化せずに旋律のみが変化するものと本歌集では分けているようである。
- また、本校作成時に筆者が付けた注は該当歌詞の後に { } 内に記した。

## 資料3号

八月踊りの唄—宇宿方面で歌われたものを中心にして—

## 古歌

○玉取りゆる石ぬ 大瀬なるまでに 牡蛎富歳見候れ 島ぬ永さ（又は  
ながれ）

(用にて有川清蔵先生採集)

## 宇宿を主題とした唄の部

○宇宿果報郷や 他の郷と異て 出立ちゆる凡り 新さ清らさ  
KA1-001[058]

○宇宿踊りくわや イキャしがヤ踊りよる 右脛探どて 左股立たし  
KA1-002[057]

○宇宿実和嘉や ギマ木花心 上り花咲かし 下り実ばならし  
KA1-003[060]

○宇宿榕樹や 岩抱しゆて 育でり 掟黍見廻役や 村抱しゆて ほ  
KA1-004[059]

○宇宿禿島や ギマ木ブス三叢 吾々が美島や 真照ら照りゆり  
KA1-005, 006[062]

(ジッキ)  
○舟走らし美さ 宇宿湊金久 舟浮きて美らさ 津代干潟泊  
KA1-007[227]

## 教訓歌の部

○花なれ ば 句 枝振りやいらぬ 容姿振りやいらぬ 人や心  
KA1-008[216]

○吾身摘で にしど 他人が身上や知りゆり 無理為るな浮世 情ば  
KA1-009[263]

○山ぬ木ぬ高さ 風に憎まれる 気分高さ持て ば 他人が誘ふ  
KA1-010[252]

○皿ぬ水だもそ 吹き ば波立ちゆり 吾が悪さて ど 他人や誘う

KA1-011[146]

○下手<sup>へた</sup>からど<sup>ど</sup> 習<sup>なら</sup>て 秀<sup>しぐ</sup>れ<sup>で</sup> て や行き<sup>い</sup>ゆり 優<sup>しぐ</sup>れ<sup>ら</sup>ぬちし 悲<sup>しのけ</sup>観<sup>ん</sup>  
と<sup>と</sup> るな

KA1-012[229]

○浮世<sup>うきよ</sup>山川<sup>やまかわ</sup>や 丸木<sup>まるき</sup>橋<sup>はし</sup>心<sup>こころ</sup> 斯<sup>か</sup>にも危<sup>あぶ</sup>なさや 渡<sup>わた</sup>て 見<sup>み</sup>れ<sup>ば</sup>

KA1-013[055]

○山<sup>やま</sup>行き<sup>い</sup>ばクニ<sup>く</sup>ンギ 海<sup>うみ</sup>行き<sup>い</sup>ばウ<sup>う</sup>ンギ 嗚呼<sup>あわれ</sup>この浮世<sup>うきよ</sup> 歩<sup>あゆ</sup>み<sup>ぐ</sup>苦し<sup>や</sup>

KA1-014[247]

○穴<sup>こもり</sup>浅<sup>あさ</sup>あて<sup>と</sup> ど 濁<sup>ねぐ</sup>れ<sup>み</sup>水<sup>み</sup>や溜<sup>たま</sup>る 心<sup>こころ</sup>浅<sup>あさ</sup>あて<sup>と</sup> ど 百<sup>もも</sup>名<sup>な</sup>立<sup>た</sup>ち<sup>ち</sup>ゆり

KA1-015[133]

○かくしゃんち<sup>むい</sup>なりゆ<sup>み</sup>み 天<sup>てん</sup>と地<sup>ち</sup>や鏡<sup>かがみ</sup> 恥<sup>はずか</sup>しかし<sup>や</sup>や影<sup>かげ</sup>ぬ 映<sup>う</sup>ち<sup>る</sup>  
思<sup>お</sup>ム<sup>え</sup>ば

KA1-016[097]

敬老歌の部

○両親<sup>ふたうや</sup>加<sup>が</sup>那<sup>な</sup>志<sup>し</sup> 年<sup>とし</sup>や老<sup>と</sup>て 行<sup>い</sup>き<sup>ゆり</sup> 黄<sup>く</sup>金<sup>が</sup>橋<sup>お</sup>架<sup>は</sup>け<sup>て</sup> 戻<sup>もど</sup>し<sup>うが</sup> 拝<sup>が</sup>も

KA1-017[223]

○私<sup>わき</sup>達<sup>だ</sup>や咲<sup>さ</sup>出<sup>し</sup>花<sup>はな</sup> 親<sup>うや</sup>や年<sup>とし</sup>寄<sup>ゆ</sup>り<sup>ゆり</sup> 年<sup>とし</sup>寄<sup>ゆ</sup>り<sup>ゆ</sup>る<sup>うや</sup>親<sup>うや</sup>ぬ 世<sup>し</sup>話<sup>わ</sup>し<sup>お</sup>し<sup>ろ</sup>

KA1-018[266]

○親<sup>うや</sup>からと<sup>おも</sup> 思<sup>おも</sup>て 受<sup>う</sup>き<sup>ゆる</sup>る<sup>さか</sup>杯<sup>さき</sup>や 泪<sup>なだ</sup>に<sup>うき</sup>披<sup>ひ</sup>わ<sup>れて</sup> 受<sup>う</sup>き<sup>や</sup>ならぬ

KA1-019[077]

○白<sup>しら</sup>浜<sup>はま</sup>ぬ真<sup>ま</sup>砂<sup>さ</sup>子<sup>ご</sup> 数<sup>か</sup>ぜ<sup>ば</sup>数<sup>か</sup>せ<sup>ら</sup>り<sup>ゆり</sup> 親<sup>うや</sup>ぬ戒<sup>い</sup>や 数<sup>か</sup>やならぬ

又ハ (天<sup>あま</sup>星<sup>ほし</sup>々<sup>々</sup>や)

KA1-020, 021[162]

○六<sup>か</sup>十<sup>じゅう</sup>重<sup>かさ</sup>ね<sup>れば</sup> 百<sup>ひゃく</sup>二<sup>に</sup>十<sup>じゅう</sup>ぬ御<sup>お</sup>年<sup>とし</sup> 牡<sup>か</sup>蛎<sup>ま</sup>富<sup>ふ</sup>歳<sup>さい</sup>見<sup>み</sup>実<sup>み</sup>れ 吾<sup>わ</sup>親<sup>うや</sup>が<sup>なし</sup>

KA1-022[261]

○片<sup>かた</sup>親<sup>うや</sup>ぬ祝<sup>よろこ</sup>や 片<sup>かた</sup>手<sup>て</sup>で舞<sup>ま</sup>こ 双<sup>た</sup>親<sup>うや</sup>ぬ祝<sup>よろこ</sup>や 双<sup>む</sup>手<sup>て</sup>し舞<sup>ま</sup>こ

KA1-023[099]

・◇・祝歌編

- 夫婦御主人 } に慶着<sup>ようち</sup>ぎ° で° 差上<sup>おし</sup>ろ } 節ぬ立<sup>しづ</sup>ち初<sup>はな</sup>に } お祝召<sup>ようみしよ</sup>候れ  
 KA1-024[244]      KA1-025[130]      KA1-026[233]
- 殿地阿弥<sup>どのちあみ</sup>しやれ }  
 ○真白髮御年寄<sup>ましろがとしぎや</sup> } や果報<sup>かふ</sup>な生<sup>ま</sup>れやせが } 今年代<sup>ことしゆ</sup>や一倉<sup>ちゆく</sup> } 来年<sup>やね</sup>や二倉<sup>たくら</sup>  
 KA1-027[245]      KA1-028[181]      KA1-029[234]
- 今日ぬ慶<sup>きふほころしや</sup>や } 何時<sup>いぢ</sup>よりも勝<sup>まさ</sup>り } 何時<sup>いぢ</sup>む斯<sup>この</sup>の如<sup>ごと</sup>に } 有<sup>あら</sup>し給<sup>たぼ</sup>れ  
 KA1-030[119]
- 今日ぬ祝<sup>きふほころしや</sup>や } 物<sup>もの</sup>に譬<sup>たと</sup>えれば } 天ぬ白雲<sup>てんしろくも</sup>ば } 取<sup>と</sup>たる如<sup>ごと</sup>に  
 KA1-031[120]
- 何時<sup>いぢ</sup>よりかよりか } 今日ぬ日<sup>きふぬひ</sup>や勝<sup>まさ</sup>り } 何時<sup>いぢ</sup>む斯<sup>この</sup>の如<sup>ごと</sup>に } 有<sup>あ</sup>らし給<sup>たぼ</sup>れ  
 KA1-032[045]
- 今年年加奈志<sup>ことしとしがなし</sup> } 果報<sup>かふ</sup>な年加奈志<sup>としがなし</sup> } 道ぬ枯草<sup>みちかれくさ</sup>に } 真米<sup>まぐめ</sup>稔<sup>な</sup>りゆり  
 KA1-033[131]
- 今年代<sup>ことしゆ</sup>や一倉<sup>ちゆく</sup> } 来年<sup>やね</sup>ぬ代<sup>ゆ</sup>や二倉<sup>たくら</sup> } 更来年<sup>みしゆ</sup>が代<sup>ゆ</sup>や三倉<sup>みくら</sup> } 三倉<sup>みくら</sup>建<sup>た</sup>て° ろ  
 KA1-034[132]
- 西<sup>にし</sup>からむ寄<sup>ひぎや</sup>りょうり } 東<sup>ひぎや</sup>からむ寄<sup>よ</sup>りょうり } 西<sup>にしひぎや</sup>東<sup>ひぎや</sup>ぬ稻魂<sup>にやだま</sup> } 今<sup>なま</sup>ど° 寄<sup>よ</sup>  
 りより  
 KA1-035[202]
- 新屋敷<sup>あらやしきこの</sup>好<sup>この</sup>で } 黄金柱<sup>ごがねばりやう</sup>植<sup>う</sup>えて } 根<sup>むとね</sup>茅<sup>が</sup>下<sup>やう</sup>し } 茸<sup>ふ</sup>ちやる清<sup>きよ</sup>さ  
 KA1-036[028]
- 新屋敷<sup>あらやしきこの</sup>好<sup>この</sup>で } 礎石<sup>いしじり</sup>ば植<sup>う</sup>えて° } 黄金柱<sup>ごがねばりやた</sup>立<sup>た</sup>てて } 桁<sup>けた</sup>やなみ木  
 直木  
 KA1-037[027]
- 天<sup>てん</sup>に弛<sup>た</sup>ゆまれろ } 雪<sup>ゆき</sup>ぬ茅<sup>か</sup>貫<sup>むら</sup>て } 今日ぬ吉<sup>けふ</sup>日<sup>よかろひ</sup>に } 茸<sup>ふ</sup>ちやる美<sup>きよ</sup>さ  
 KA1-038[176]
- 四角<sup>しかくよ</sup>四<sup>よ</sup>つ柱<sup>ばしら</sup> } 上<sup>うよ</sup>や綾<sup>あや</sup>天<sup>てん</sup>井<sup>ちやう</sup> } 下<sup>した</sup>や錦<sup>いしゆだたみ</sup> 畳<sup>し</sup> } 敷<sup>敷</sup>ちやる清<sup>きよ</sup>さ  
 KA1-039[151]
- 梅<sup>うめ</sup>と° 若<sup>わか</sup>松<sup>まつ</sup>や } 空<sup>そら</sup>からと覆<sup>おさ</sup>お } 夫<sup>めおと</sup>婦<sup>めおと</sup>しよしられや } 竹<sup>でんそら</sup>枝<sup>おさ</sup>被<sup>お</sup>お  
 KA1-040[076]

○深山奥山に 蕾むだる花や 今日ぬ佳日に 咲しゆる清さ

KA1-041[241]

・◇・人生観・生活反省歌編

○明け暮れや知らじ 遊びゆたる節や 昨日や今日や数みば  
昔なりゆり

KA1-042[006]

○浮世仮世に 永久居られりよみ 言しやり語らたり する浮世

KA1-043[054]

○年齢や寄て行きゆり 先や定まらぬ 荒海に浮しゆる 舟ぬ如に

KA1-044[178]

○大和旅しれれば 月日数で待ちゆり 御所が旅しれれば 何数  
で待ちゆり

KA1-045[250]

○暮さらぬ暮 し居れ 玉黄金 節や水車 廻り合ゆり

KA1-046[125]

○吾が此の郷に 親親類居らぬ 吾かなしゃしゅん人ど 吾親親類

KA1-047[270]

○生れ富やあてむ 育ち富ぬねらじ 親二人仲に 育ち欲しゃや

KA1-048[075]

○思て 自由ならぬ 水中ぬお月 手に取ららじしゆて 思潰ぶし

KA1-049[092]

○千里ある道や 馬のれば吾自由 舟乗てぬ沖 自由やならぬ

KA1-050[164]

○私達創あらぬ 貴方達創あらぬ 昔親先祖ぬ 習掟

KA1-051[188]

○女子身ぬ哀れ 絲柳心 風に襲いまま 靡く哀

KA1-052[073]

○女子生れとて 故郷ぬ有られりよみ 夫ぬ生れじまど 吾島  
なりゆり

KA1-053[072]

## 恋情歌編

○お十五夜ぬお月 神清さ照りゆり 加那が門口に停て ば 曇て  
給れ KA1-054[089]

○夜はらす舟や 隠れ 瀬ど なたき 加那待ちる夜や 友ど 仇  
KA1-055[257]

○道にある石や 下駄ぬ歯ぬ仇 加那待ちゆる夜や 朋友ど なたき  
KA1-056[238]

○近辺妨げや 榕樹ぬヤ枝 他人が妨げや なるなヨ里

(加那)

KA1-057[020]

## \*アタリ (家近くの屋敷内の畠)

○白雲やまさり 風連れて行きゆり 吾や加那 (貴方方、汝方) 連れ て  
行き欲やしが KA1-058[160]

○天ぬ白雲に 橋かけて何しゆり 及ばらぬ加那に 手指し何しゆり  
KA1-059[177]

○東明雲ぬ 生き別れ見れば 加那と 生き別れ 其れ が如に  
KA1-060[002]

○月と 眺めてむ 花と 眺めてむ 肌染だる加那や 忘れ苦るしゃ  
KA1-061[174]

○玉乳房掴め れ ば 染だるより勝り 後軽るがると 行もれ旦那様  
(笠利ツルマツ作)

KA1-062[169]

○一代ちど 染だる 末代ちど 染だる 女子アヤ花や 彼ろ是ろ  
KA1-063[047]

○去じゃる月がでや 加那が腕枕 哀れ此の月や 吾腕枕  
KA1-064[038]

○夜中三星や 見しゃる人や居らぬ 吾が加那忍で 行きんど 見しゃ  
る KA1-065[260]

\* (南十字星の上の三星が見える由)

○二十日夜ぬ暗れて 脛やひきならぬ 加那が事思め°ば 明ぬ真昼  
暮れて

KA1-066[213]

○岬潮ぬ荒さ 汗流し漕ぎゆり 加那が事思て° 一權二權

KA1-067[236]

○泊口迄で°や 加那に送りしらで° 途中乗り出し°ば 汐風頼も

KA1-068[179]

○船出し三日や 雨風ど°しゅたる 風や加那想て° 雨や目泪

KA1-069[224]

○川口川水や 潮出合て戻る 吾や加那出逢て 泣しど戻る

KA1-070[207]

○花染に惚で° 童妻戴て° 花ぬ萎れらば 妾事思へ

KA1-071[215]

○花ぬ哀れさや 葱ぬ上ぬ小花 縁ぬ哀れしゃや 貴方と°妾と°

KA1-072[217]

○白浜ぬ小花 水焦れと°りゆり 吾や加那思て しのけとりゆり

KA1-073[161]

○遠方らが此処に 遊びしが御来し ゆさり夜や此間に 遊で°給れ

KA1-074[004]

○遠方らが此処に 遊びしが御来し 加那に逢じ°しゅで° 悲観と°

るな

KA1-075[003]

○剥いだ生爪や 痛で°ど°別れより 痛まじ°別れりよみ° 貴縁妾縁

KA1-076[209]

○嶺流る水や 谷間探み°で°止る 吾や加那探み°で° 加那と°宿

ろ

KA1-077[066]

○阿母面影や° マレマレど°立ちゆる 加那が面影や° 勝で°立ちゆ

り

KA1-078[032]

○枯木くだめ°と°で° 実り木引き寄し°で° 落で°らばむはかち°

踏台

加那と°一道

KA1-079[106]



○<sup>にしやど あ</sup>裏戸ば開けて <sup>かなま ゆる</sup>加那待ちゆる夜や <sup>よあらし しげ</sup>夜嵐や激く <sup>かな もら</sup>加那や来ぬ

KA1-080[205]

○<sup>まこと ひと</sup>誠ある人の <sup>あと いちまで</sup>跡や永久迄も <sup>においふくみく</sup>匂馥々と° <sup>さじ° しば</sup>さじ° ぬ香しや

頭巾

KA1-081[232]

・◇・旧八月を主題とした歌編

○<sup>はちがち° せつゝ</sup>八月ぬ節や <sup>よりもど もど</sup>縫戻り戻り <sup>わきゃ たちごろ</sup>私達が年頃や <sup>な° ないちもど</sup>な° 何時戻ろ

KA1-082[211]

○<sup>はちがち° い</sup>八月や去きゆり <sup>ふ そで ね</sup>振り袖や無らじ <sup>あみしやれぬ どもしゆ</sup>あみしやれぬ肌衣裳 <sup>か たらし</sup>貸らし賜れ

KA1-083[212]

○<sup>あらせち° い</sup>新節む去きゆり <sup>しばさせ い</sup>芝挿も行きゆり <sup>しち° しばさせ</sup>節と芝挿や <sup>なぬか ひざ</sup>七日離め

KA1-084[026]

○<sup>しち° しばさし</sup>節と° 芝挿や <sup>なぬか ひざ</sup>七日離め° より <sup>きもしゃ° かな</sup>愛げ° ぬ加那や <sup>ぬ 何ひざめ° より</sup>何ひざめ° より

KA1-085[149]

○<sup>あたらはちがち</sup>惜八月ば <sup>みなよなそしのけ°</sup>みなよなそしのけ° <sup>さけ</sup>お酒あたらまし <sup>さみごた</sup>三合給ぼれ

KA1-086[019]

○<sup>い はて どんがん</sup>去き果ぬ嫩芽 <sup>な は ちちみ</sup>鳴り果てぬ鼓 <sup>やね あらしち</sup>来年ぬ新節に <sup>う 差上ろ</sup>挿で° 差上ろ

KA1-087[035]

・◇・椰楡歌編

○<sup>うしくめ°らべんきゃ</sup>宇宿女童達ぬ <sup>うしろすがた み</sup>後姿見れ° ば <sup>はる また また</sup>畠ぬ谷合々々ぬ <sup>びっきゃ° くと°</sup>蛙ぬ如に

KA1-088[064]

○<sup>うしくめ°らべんきゃ</sup>宇宿女童達ぬ <sup>うた こえ き</sup>唄ぬ声聞き° ば <sup>はる またまた びっきゃ° ごと</sup>畠ぬ股々ぬ 蛙ぬ如に

KA1-089[064]

○<sup>うしくめ°らべんきゃ</sup>宇宿女童達や <sup>はし°</sup>恥しかくや無らぬ <sup>わきゃ わら</sup>吾々に謗われ° んち <sup>おも</sup>思いきらじ°

KA1-090[063]

○<sup>あばし°</sup>インゴモリぬ針千本 <sup>だちも</sup>何処参るあばし° <sup>うしくめらべんきゃ</sup>宇宿女童達ぬ <sup>もも さ</sup>股ば刺し°

が

KA1-091[053]

○<sup>いそぎ いそぎ</sup>雑魚ちば雑魚 <sup>ことしが</sup>今年迄で° ぬいそぎ <sup>やね はじがち°</sup>来年ぬ八月や <sup>わきゃ ちゃお</sup>吾々が茶受け°

KA1-092[042]  
 ○池<sup>いけ</sup>浮<sup>う</sup>き<sup>う</sup>で<sup>で</sup>美<sup>き</sup>さ<sup>ら</sup> 鴛<sup>うしぬ</sup>鴦<sup>とりめ</sup>雌<sup>とり</sup>鳥<sup>鳥</sup> 眉<sup>まゆ</sup>立<sup>た</sup>て<sup>て</sup>清<sup>き</sup>さ<sup>ら</sup> 今<sup>な</sup>ぬ<sup>め</sup>女<sup>らべ</sup>童<sup>童</sup>

KA1-093[037]  
 ○油<sup>あぶら</sup>し<sup>し</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>頭<sup>がま</sup> 雨<sup>あめ</sup>降<sup>ふ</sup>れ<sup>れ</sup> ば<sup>ば</sup>心<sup>しわ</sup>配<sup>配</sup>じ<sup>じ</sup>や<sup>や</sup> 美<sup>き</sup>さ<sup>ら</sup>生<sup>ま</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup> ね<sup>ね</sup>ば<sup>ば</sup> 夜<sup>よ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>  
 心<sup>しわ</sup>配<sup>配</sup>じ<sup>じ</sup>や<sup>や</sup>

KA1-094[021]  
 ○火<sup>あ</sup>棚<sup>ま</sup>魚<sup>め</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>下<sup>さ</sup>で<sup>で</sup> 猫<sup>ま</sup>ぬ<sup>め</sup>眼<sup>め</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>だ<sup>だ</sup>る<sup>る</sup>さ<sup>さ</sup> 美<sup>き</sup>人<sup>ら</sup>刀<sup>と</sup>士<sup>じ</sup>ば<sup>ば</sup>戴<sup>か</sup>み<sup>み</sup>て<sup>て</sup> 吾<sup>わ</sup>目<sup>め</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>疲<sup>た</sup>る<sup>る</sup>さ<sup>さ</sup>

KA1-095[023]  
 ○遊<sup>あそ</sup>び<sup>び</sup>す<sup>す</sup>る<sup>る</sup>中<sup>な</sup>に<sup>に</sup> 唄<sup>うた</sup>絶<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>う<sup>う</sup>く<sup>く</sup>な<sup>な</sup> 唄<sup>うた</sup>絶<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>置<sup>う</sup>け<sup>け</sup>ば<sup>ば</sup> 他<sup>よ</sup>人<sup>そ</sup>が<sup>が</sup>誇<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>

KA1-096[016]  
 ○唄<sup>うた</sup>や<sup>や</sup>高<sup>た</sup>々<sup>た</sup>と<sup>と</sup> 波<sup>な</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>花<sup>は</sup>心<sup>こ</sup> 吾<sup>わ</sup>肌<sup>は</sup>に<sup>に</sup>柔<sup>や</sup>々<sup>や</sup>と<sup>と</sup> 着<sup>ち</sup>き<sup>き</sup>ゆる<sup>る</sup>如<sup>ごと</sup>に<sup>に</sup>

KA1-097[068]  
 ○し<sup>さ</sup>ゆ<sup>じり</sup>ん<sup>ご</sup>に<sup>に</sup>や<sup>や</sup>し<sup>さ</sup>ゆ<sup>じり</sup>ん<sup>ご</sup>に<sup>に</sup>や<sup>や</sup>貴<sup>な</sup>方<sup>ま</sup>達<sup>だ</sup>や<sup>や</sup> 吾<sup>わ</sup>々<sup>々</sup>と<sup>と</sup>唄<sup>うた</sup>比<sup>ひ</sup>し<sup>し</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>ん<sup>ん</sup>に<sup>に</sup>や<sup>や</sup> 鱧<sup>さ</sup>釣<sup>ば</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>如<sup>ごと</sup>に<sup>に</sup>  
 曲<sup>ま</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>で<sup>で</sup>差<sup>お</sup>し<sup>し</sup>ろ<sup>ろ</sup>

KA1-098[158]  
 ○鱧<sup>さ</sup>釣<sup>ば</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>如<sup>ごと</sup>に<sup>に</sup> 曲<sup>ま</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>ら<sup>ら</sup>ば<sup>ば</sup>曲<sup>ま</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>れ<sup>れ</sup> 汝<sup>い</sup>等<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>曲<sup>ま</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>ら<sup>ら</sup>れる<sup>る</sup> 吾<sup>わ</sup>や<sup>や</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>  
 ぬ

KA1-099[142]

類似歌編（至上の楽へ透う）

○遠<sup>あ</sup>方<sup>が</sup>ら<sup>ん</sup>が<sup>ん</sup>此<sup>こ</sup>処<sup>ま</sup>に<sup>に</sup> 遊<sup>あ</sup>し<sup>び</sup>が<sup>が</sup>来<sup>い</sup>も<sup>も</sup>し<sup>し</sup> ゆ<sup>ゆ</sup>さ<sup>さ</sup>り<sup>り</sup>夜<sup>よ</sup>や<sup>や</sup>此<sup>こ</sup>処<sup>ま</sup>に<sup>に</sup> 遊<sup>あ</sup>で<sup>で</sup> 給<sup>た</sup>ぼ<sup>ぼ</sup>れ<sup>れ</sup>

KA1-100[004]  
 ○遊<sup>あ</sup>そ<sup>そ</sup>ば<sup>ば</sup>が<sup>が</sup>為<sup>た</sup>め<sup>め</sup>に<sup>に</sup> 引<sup>ひ</sup>寄<sup>き</sup>し<sup>し</sup>で<sup>で</sup> 置<sup>う</sup>し<sup>し</sup>ゃ<sup>ゃ</sup>が<sup>が</sup> 手<sup>て</sup>取<sup>と</sup>り<sup>り</sup>教<sup>ゆ</sup>し<sup>し</sup> 教<sup>ゆ</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup> 遊<sup>あ</sup>で<sup>で</sup> 給<sup>た</sup>ぼ<sup>ぼ</sup>れ<sup>れ</sup>

KA1-101[012]  
 ○遊<sup>あ</sup>び<sup>び</sup>そ<sup>そ</sup>び<sup>び</sup>遊<sup>あ</sup>び<sup>び</sup> 二<sup>は</sup>十<sup>じ</sup>才<sup>さい</sup>内<sup>うち</sup>遊<sup>あ</sup>び<sup>び</sup> 四<sup>し</sup>十<sup>じゅう</sup>が<sup>が</sup>五<sup>ご</sup>十<sup>じゅう</sup>な<sup>な</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup> 思<sup>おも</sup>た<sup>た</sup>  
 ば<sup>ば</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>

KA1-102[018]  
 ○遊<sup>あ</sup>び<sup>び</sup>好<sup>じ</sup>き<sup>き</sup>妾<sup>わ</sup>や<sup>や</sup> 探<sup>と</sup>み<sup>み</sup>で<sup>で</sup> 探<sup>と</sup>み<sup>み</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup> デ<sup>で</sup> 吾<sup>わ</sup>々<sup>々</sup>ふ<sup>ふ</sup>り<sup>り</sup>た<sup>た</sup>て<sup>て</sup>で<sup>で</sup>  
 共<sup>とも</sup>々<sup>々</sup>

KA1-103[015]  
 遊<sup>あ</sup>で<sup>で</sup> 給<sup>た</sup>ぼ<sup>ぼ</sup>れ<sup>れ</sup>  
 ○吾<sup>わ</sup>達<sup>た</sup>む<sup>む</sup>遊<sup>あ</sup>び<sup>び</sup>好<sup>じ</sup>き<sup>き</sup> 貴<sup>な</sup>方<sup>ま</sup>達<sup>だ</sup>む<sup>む</sup>遊<sup>あ</sup>び<sup>び</sup>好<sup>じ</sup>き<sup>き</sup> 互<sup>た</sup>に<sup>あ</sup>に<sup>に</sup>遊<sup>あ</sup>び<sup>び</sup>好<sup>じ</sup>き<sup>き</sup> 遊<sup>あ</sup>で<sup>で</sup> 給<sup>た</sup>ぼ<sup>ぼ</sup>れ<sup>れ</sup>

KA1-104[189]  
 ○貴<sup>な</sup>方<sup>ま</sup>達<sup>だ</sup>と<sup>と</sup> 此<sup>こ</sup>処<sup>ま</sup>集<sup>く</sup>て<sup>て</sup> 何<sup>い</sup>時<sup>ち</sup>遊<sup>あ</sup>で<sup>で</sup> 見<sup>み</sup>り<sup>り</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>り<sup>り</sup> 遊<sup>あ</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>時<sup>ど</sup>や<sup>や</sup>し<sup>し</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>ま<sup>ま</sup> 解<sup>と</sup>け<sup>け</sup>で<sup>で</sup> 遊<sup>あ</sup>ぼ<sup>ぼ</sup>

KA1-105[187]

○遊ぶ<sup>あそ</sup>ず<sup>る</sup>間<sup>なか</sup>に 年<sup>とし</sup>距離<sup>ひざ</sup>め<sup>ね</sup>らぬ 四十<sup>しじゅう</sup>が五十<sup>ごじゅう</sup>なてむ 花<sup>はな</sup>ぬ二十<sup>はたち</sup>  
KA1-106[017]

○是<sup>これ</sup>程<sup>ほど</sup>ぬ遊<sup>あそ</sup>び 組<sup>く</sup>み立<sup>た</sup>てて<sup>て</sup> からや 夜<sup>よ</sup>ぬ明<sup>あ</sup>けて<sup>て</sup> 太陽<sup>てだ</sup>ぬ 昇<sup>あ</sup>るまでも  
KA1-107[134]

## 歌い返し編

○貴<sup>な</sup>方<sup>き</sup>達<sup>た</sup>創<sup>はじめ</sup>あらぬ 私<sup>わ</sup>達<sup>た</sup>始<sup>はじめ</sup>め<sup>め</sup> あらぬ 昔<sup>むかし</sup>祖<sup>う</sup>先<sup>せん</sup>ぬ 慣<sup>し</sup>例<sup>き</sup>掟<sup>だめ</sup>  
KA1-108[188]

○昔<sup>むかし</sup>祖<sup>う</sup>先<sup>せん</sup>ぬ 島<sup>しま</sup>建<sup>た</sup>て<sup>て</sup> ぬ悪<sup>わる</sup>さ 加<sup>か</sup>那<sup>な</sup>が島<sup>しま</sup>吾<sup>わ</sup>島<sup>しま</sup> 間<sup>ま</sup>切<sup>ぎり</sup>変<sup>か</sup>し  
KA1-109[242]

○加<sup>か</sup>那<sup>な</sup>が島<sup>しま</sup>吾<sup>わ</sup>島<sup>しま</sup> 絲<sup>いと</sup>繩<sup>なわ</sup>ばか<sup>か</sup>けて<sup>て</sup> 面<sup>おも</sup>影<sup>かげ</sup>ぬ立<sup>た</sup>て<sup>て</sup> ば 手<sup>た</sup>操<sup>く</sup>り寄<sup>よ</sup>し<sup>ろ</sup>  
KA1-110[101]

○面<sup>おも</sup>影<sup>かげ</sup>や立<sup>た</sup>ちゆ<sup>り</sup>り し<sup>し</sup>ぎ<sup>ぎ</sup> ららぬ時<sup>とき</sup>や 童<sup>わら</sup>声<sup>べ</sup>立<sup>た</sup>て<sup>て</sup> ナ<sup>な</sup> 泣<sup>な</sup>こ<sup>ぼ</sup>ば  
絶<sup>ぜつ</sup>難<sup>なん</sup>

かり  
○童<sup>わら</sup>声<sup>べ</sup>立<sup>た</sup>て<sup>て</sup> で 泣<sup>な</sup>枯<sup>が</sup>やし<sup>し</sup>る<sup>な</sup> 泣<sup>な</sup>枯<sup>が</sup>やし<sup>し</sup>れ<sup>ば</sup> 他<sup>よ</sup>人<sup>そ</sup>が笑<sup>わら</sup>う  
KA1-111[090]

○他<sup>よ</sup>人<sup>そ</sup>からや謗<sup>わら</sup>う 親<sup>う</sup>からや折<sup>ち</sup>檻<sup>め</sup>る 折<sup>ち</sup>檻<sup>め</sup>て<sup>て</sup> 折<sup>ち</sup>檻<sup>め</sup>殺<sup>く</sup>る<sup>し</sup> 親<sup>う</sup>ぬ迷<sup>め</sup>惑<sup>わく</sup>  
KA1-112[273]

○鼓<sup>ち</sup>ぐわ<sup>う</sup>や打<sup>う</sup>て<sup>て</sup> ば 馬<sup>う</sup>ぬ皮<sup>こ</sup>ど<sup>ど</sup> 打<sup>う</sup>ちゆ<sup>る</sup> 継<sup>ま</sup>子<sup>ま</sup>や打<sup>う</sup>て<sup>て</sup> ば 百<sup>も</sup>名<sup>も</sup>立<sup>た</sup>  
ちゆ<sup>り</sup> KA1-113[258]

○遊<sup>あ</sup>び好<sup>じ</sup>き吾<sup>わ</sup>や 探<sup>と</sup>み<sup>み</sup>て<sup>て</sup> 探<sup>と</sup>み<sup>み</sup> ららぬ 島<sup>しま</sup>ぬ尻<sup>しり</sup>口<sup>くち</sup>に 探<sup>と</sup>み<sup>み</sup>て遊<sup>あ</sup>ぼ  
KA1-114[170]

○島<sup>しま</sup>ぬ尻<sup>しり</sup>口<sup>くち</sup>に 探<sup>と</sup>み<sup>み</sup> きれ<sup>ば</sup> 探<sup>と</sup>み<sup>み</sup> れ<sup>ば</sup> 汝<sup>い</sup>等<sup>ま</sup>に探<sup>と</sup>み<sup>み</sup> られる 吾<sup>わ</sup>や  
あらぬ KA1-115[014]

○是<sup>これ</sup>程<sup>ほど</sup>ぬ遊<sup>あ</sup>び 組<sup>く</sup>み立<sup>た</sup>て<sup>て</sup> からや 夜<sup>よ</sup>ぬ明<sup>あ</sup>けて<sup>て</sup> 太陽<sup>てだ</sup>ぬ 上<sup>あ</sup>る迄<sup>まで</sup>も  
KA1-116[152]

○ナ夜<sup>よ</sup>む明<sup>あ</sup>け加<sup>か</sup>那<sup>な</sup>志<sup>し</sup> 鶏<sup>と</sup>む啼<sup>う</sup>て<sup>て</sup> がなし 是<sup>これ</sup>程<sup>ほど</sup>ぬあそび 止<sup>と</sup>み<sup>み</sup> がなり  
ゆむ KA1-117[134]

○ナ夜<sup>よ</sup>む明<sup>あ</sup>け加<sup>か</sup>那<sup>な</sup>志<sup>し</sup> 鶏<sup>と</sup>む啼<sup>う</sup>て<sup>て</sup> がなし 是<sup>これ</sup>程<sup>ほど</sup>ぬあそび 止<sup>と</sup>み<sup>み</sup> がなり  
ゆむ KA1-118[197]

- 貴方<sup>なまき</sup>達<sup>たら</sup>む賑<sup>あ</sup>しやぎ<sup>ぎ</sup>で<sup>で</sup> 私<sup>わき</sup>共<sup>ま</sup>む賑<sup>あ</sup>しやぎ<sup>ぎ</sup>で<sup>で</sup> 互<sup>たげ</sup>に賑<sup>あ</sup>しやぎ<sup>ぎ</sup>で<sup>で</sup>  
遊<sup>あそ</sup>で<sup>で</sup> 給<sup>た</sup>ぼれ<sup>れ</sup> KA1-119[190]
- 貴方<sup>なまき</sup>方<sup>かた</sup>むはめ<sup>め</sup>し<sup>し</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>で<sup>で</sup> 吾<sup>わ</sup>々<sup>々</sup>むはめ<sup>め</sup>し<sup>し</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>で<sup>で</sup> 互<sup>たげ</sup>には<sup>は</sup>め<sup>め</sup>  
(きもいじ) (きもいじ) (きも)  
し<sup>し</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>で<sup>で</sup> 遊<sup>あそ</sup>で<sup>で</sup> 給<sup>た</sup>ぼれ<sup>れ</sup> KA1-120[192]
- いじ) KA1-121[191]
- 遊<sup>あそ</sup>び<sup>び</sup> そ<sup>そ</sup>び<sup>び</sup> 遊<sup>あそ</sup>び<sup>び</sup> 二十<sup>は</sup>才<sup>ち</sup>内<sup>うち</sup>遊<sup>あそ</sup>び<sup>び</sup> 四十<sup>し</sup>が<sup>が</sup>五十<sup>ご</sup>な<sup>な</sup>れ<sup>れ</sup> ば<sup>ば</sup> 思<sup>おも</sup>た<sup>た</sup>ば<sup>ば</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>  
KA1-122[018]
- 思<sup>おも</sup>で<sup>で</sup> さ<sup>さ</sup>え<sup>え</sup>居<sup>う</sup>れ<sup>れ</sup> ば<sup>ば</sup> 後<sup>あと</sup>先<sup>さき</sup>ど<sup>ど</sup> な<sup>な</sup>り<sup>り</sup>ゆる<sup>ゆる</sup> 節<sup>しち</sup>や<sup>や</sup>水<sup>むじぐるま</sup>車<sup>ま</sup> 廻<sup>めぐ</sup>り<sup>り</sup>歩<sup>あゆ</sup>む<sup>む</sup>  
KA1-123[091]
- 節<sup>しち</sup>や<sup>や</sup>水<sup>むじぐるま</sup>車<sup>ま</sup> 廻<sup>めぐ</sup>り<sup>り</sup>歩<sup>あゆ</sup>む<sup>む</sup>とも<sup>とも</sup> 貴<sup>なまき</sup>方<sup>かた</sup>達<sup>たら</sup>と<sup>と</sup> 逢<sup>あ</sup>う<sup>う</sup>節<sup>しち</sup>ぬ<sup>ぬ</sup> あり<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>か<sup>か</sup>し<sup>し</sup>ょ<sup>ょ</sup>り<sup>り</sup>か<sup>か</sup>  
KA1-124[150]
- 白<sup>しら</sup>金<sup>かね</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>花<sup>はな</sup>や<sup>や</sup> 水<sup>みづ</sup>か<sup>か</sup>け<sup>け</sup>て<sup>て</sup>活<sup>い</sup>け<sup>け</sup>ろ<sup>ろ</sup> 情<sup>なさけ</sup>か<sup>か</sup>け<sup>け</sup>み<sup>み</sup>し<sup>し</sup>ょ<sup>ょ</sup>し<sup>し</sup> 生<sup>い</sup>か<sup>か</sup>し<sup>し</sup>給<sup>た</sup>ぼ<sup>ぼ</sup>れ<sup>れ</sup>  
KA1-125[159]
- 情<sup>なさけ</sup>か<sup>か</sup>け<sup>け</sup>見<sup>み</sup>し<sup>し</sup>ょ<sup>ょ</sup>し<sup>し</sup> 生<sup>い</sup>き<sup>き</sup>や<sup>や</sup>欲<sup>ぶ</sup>し<sup>し</sup>や<sup>や</sup>や<sup>や</sup>せ<sup>せ</sup>が<sup>が</sup> 他<sup>よそ</sup>人<sup>た</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>玉<sup>たま</sup>黄<sup>くわ</sup>金<sup>がね</sup> 生<sup>い</sup>き<sup>き</sup>や<sup>や</sup>し<sup>し</sup>何<sup>ぬ</sup>  
し<sup>し</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>り<sup>り</sup> KA1-126[194]
- 白<sup>しら</sup>雲<sup>くも</sup>や<sup>や</sup>勝<sup>まさ</sup>り<sup>り</sup> 風<sup>かぜ</sup>連<sup>ちよ</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup>行<sup>い</sup>き<sup>き</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>り<sup>り</sup> 吾<sup>わ</sup>や<sup>や</sup>貴<sup>なまき</sup>方<sup>かた</sup>達<sup>たら</sup>連<sup>ちよ</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup> 行<sup>い</sup>き<sup>き</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>や<sup>や</sup>せ<sup>せ</sup>が<sup>が</sup>  
(行<sup>い</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>し<sup>し</sup>や<sup>や</sup>や<sup>や</sup>せ<sup>せ</sup>が<sup>が</sup>)  
KA1-127[160]
- 吾<sup>わ</sup>や<sup>や</sup>汝<sup>い</sup>等<sup>ら</sup>連<sup>ちよ</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup> 行<sup>い</sup>き<sup>き</sup>欲<sup>ぶ</sup>し<sup>し</sup>や<sup>や</sup>や<sup>や</sup>せ<sup>せ</sup>が<sup>が</sup> 先<sup>さき</sup>に<sup>に</sup>妬<sup>きし</sup>る<sup>る</sup>人<sup>ちよ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup> 居<sup>う</sup>れ<sup>れ</sup> ば<sup>ば</sup>何<sup>ま</sup>  
し<sup>し</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>り<sup>り</sup> KA1-128[271]
- 吾<sup>わ</sup>々<sup>々</sup>が<sup>が</sup>今<sup>な</sup>迄<sup>まが</sup>で<sup>で</sup> や<sup>や</sup> 妬<sup>きし</sup>る<sup>る</sup>人<sup>ちよ</sup>や<sup>や</sup>居<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup> 逃<sup>に</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>牛<sup>うし</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>如<sup>ごと</sup>に<sup>に</sup> 仰<sup>うし</sup>ぎ<sup>ぎ</sup> ば<sup>ば</sup>り<sup>り</sup>や<sup>や</sup>  
げ<sup>げ</sup> KA1-129[268]
- 一<sup>ちよ</sup>升<sup>わかし</sup>も<sup>も</sup>不<sup>いらぬ</sup>要<sup>要</sup> 二<sup>た</sup>升<sup>わかし</sup>も<sup>も</sup>不<sup>いらぬ</sup>要<sup>要</sup> 泡<sup>あわ</sup>盛<sup>もり</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>お<sup>お</sup>酒<sup>さけ</sup> さ<sup>さ</sup>み<sup>み</sup>ご<sup>ご</sup>賜<sup>た</sup>ぼ<sup>ぼ</sup>れ<sup>れ</sup>  
KA1-130[172]
- 泡<sup>あわ</sup>盛<sup>もり</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>お<sup>お</sup>酒<sup>さけ</sup> さ<sup>さ</sup>み<sup>み</sup>ご<sup>ご</sup>ち<sup>ち</sup>ぼ<sup>ぼ</sup>み<sup>み</sup>し<sup>し</sup>ょ<sup>ょ</sup>し<sup>し</sup> 其<sup>う</sup>れ<sup>れ</sup> が<sup>が</sup>祝<sup>ほこ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>や<sup>や</sup> 慶<sup>いわ</sup>で<sup>で</sup> お<sup>お</sup>し<sup>し</sup>  
ろ<sup>ろ</sup> KA1-131[029]
- 一<sup>いち</sup>代<sup>で</sup>ち<sup>ち</sup>ど<sup>ど</sup> 染<sup>す</sup>だ<sup>だ</sup>る<sup>る</sup> 末<sup>まち</sup>代<sup>で</sup>ち<sup>ち</sup>ど<sup>ど</sup> 染<sup>す</sup>だ<sup>だ</sup>る<sup>る</sup> 女<sup>うな</sup>子<sup>ぐ</sup>ア<sup>ア</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>花<sup>はな</sup>や<sup>や</sup> あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>ろ<sup>ろ</sup>こ<sup>こ</sup>れ<sup>れ</sup>ろ<sup>ろ</sup>  
(慌<sup>わ</sup>しい)  
KA1-132[047]

○男子清花や 七花に咲きゆり 女子 陋 しゃ花や あれろこれろ  
(慌しい)

KA1-133[052]

○遊ばそが為に 引き寄し てうしゃが ゆさり夜や此処に 遊で給ぼ  
れ

KA1-134[013]

○ゆさり夜や此処に 色々のおそび 明日じ面影ぬ 立て ばきやしゅ  
り

KA1-135[255]

○面影や立ちゆり し ぎ ららぬ時や 童声立てて ナ泣こぼか  
絶難い

り KA1-136[090]

○ (以下前記) KA1-137[273] KA1-138[258] KA1-139[170]

{この部分は、KA1-112以下が操返されると解釈し、KA1-112~114の3

首を想定し、別番号 (KA1-137~139) を付した。}

○八月ぬ節や 繕り戻り戻り 吾等が年頃や ナ何時戻ろ

KA1-140[211]

○吾等が年頃や 夜ぬ暮れ ど 待ちゆる 何時か夜ぬ暮れ て 吾  
自由なりゆり

KA1-141[264]

○今日ぬ祝しゃや 何時よりも勝り 何時も斯の如に あらし給ぼれ

KA1-142[119]

○何時む斯の如に あれば玉黄金 何がやこのしのけ わがよとりゆり

KA1-143[044]

○唄や高々と 波ぬ華心 吾体に柔々と 着きゆる如に

KA1-144[068]

○妾達が今迄で や 歌ぬ節知らぬ 先生れぬ叔父た 教して給ぼれ

KA1-145[267]

○先生れて 居て む 後生れて 居てむ 歌や吾が胸ぬ 教養掟

KA1-146[140]

○唄や吾が胸ぬ 寐あてむ なま足らぬ吾に 唄ぬありよみ

KA1-147[069]

○歌知らぬ童 節知らぬ童 酒と 盃寡 持ち来教し ろ

- しゅんにやしゅんにや<sup>いゝきや</sup>汝等や 吾等と歌相手しゅんにや 鱧釣ぬ如に  
曲ぎておしろ KA1-148[067]
- 鱧釣ぬ如に 曲げきれば曲げれ 貴方達に曲ぎられる 吾々やあらぬ  
KA1-149[158]
- KA1-150[142]

## 連歌編 [流れ. 又は並べ]

## ○かんでく並べ

- 1 ほう女童<sup>めらべ</sup>や 伝言<sup>ことづ</sup>けの 葎<sup>たばんこ</sup> とつけや 纏<sup>もつ</sup>れ 葎<sup>たばんこ</sup>  
KA1-151[230]

\*ほう (芭蕉のせんる) {他にも記載があるが、読み取れず不明}

- 2 纏<sup>もつ</sup>れ草取<sup>くさとりや</sup>人に 纏<sup>もち</sup>れろにし<sup>れ</sup>ば 縁<sup>えん</sup>ぬねだなし<sup>ゆて</sup>もつれな  
らぬ KA1-152[246]
- 3 縁<sup>えん</sup>と<sup>たま</sup>玉黄金<sup>こがね</sup> ぬかば他人<sup>よそ</sup>さらめ うちふらいふらい 離<sup>ぬ</sup>かば清<sup>きよ</sup>ら  
離 交際

く KA1-153[086]

- 4 うち交際<sup>あひだ</sup>いふらい 去<sup>ぬ</sup>したもそ行き<sup>い</sup>ゆり 声<sup>こゑ</sup>ぬ便<sup>いや</sup>りしゅま 繁<sup>しげ</sup>く賜<sup>たま</sup>  
ぼれ KA1-154[070]

- 5 声<sup>こゑ</sup>ぬ便<sup>いや</sup>りしゅま 繁<sup>しげ</sup>くし<sup>ろ</sup>し<sup>れ</sup>ば 吾家<sup>わが</sup>に照<sup>て</sup>り照<sup>て</sup>りと 来<sup>あき</sup>ん  
人<sup>ち</sup>ぬうらぬ KA1-155[128]

- 6 吾家<sup>わが</sup>に照<sup>て</sup>り照<sup>て</sup>りと 歩<sup>あき</sup>ん人<sup>ち</sup>やう<sup>て</sup>む 思<sup>おも</sup>わだなし<sup>ゆて</sup>言葉<sup>ことば</sup>  
情<sup>なさけ</sup> KA1-156[272]

- 7 思<sup>おも</sup>わだなし<sup>ゆて</sup>ど<sup>ど</sup> 声<sup>こゑ</sup>ぬかけ<sup>らり</sup>よめ<sup>よめ</sup> 想<sup>おも</sup>出<sup>め</sup>し<sup>や</sup>る節<sup>しち</sup>ど 声<sup>こゑ</sup>  
や差<sup>おし</sup>上<sup>ろ</sup> KA1-157[094]

- 8 思<sup>おも</sup>わばむ互<sup>たげ</sup>に 外<sup>そ</sup>ばさむ互<sup>たげ</sup>に ましりくち互<sup>たげ</sup>に 思<sup>おも</sup>て<sup>た</sup>給<sup>れ</sup>  
KA1-158[095]

- 9 ましりくち互<sup>たげ</sup>に 想<sup>おも</sup>い欲<sup>ぶ</sup>しゃやせが 貴方<sup>なまきし</sup>達<sup>ち</sup>妬<sup>ち</sup>る人<sup>ち</sup>ぬ 居<sup>う</sup>れ<sup>ば</sup>き  
やしゆり KA1-159[235]

\*ましりくち (何事でも)

- 10 吾等<sup>わがら</sup>が今<sup>いま</sup>がで<sup>で</sup> や 妬<sup>ね</sup>る人<sup>ひと</sup>や居<sup>い</sup>らぬ 逃<sup>にぎらし</sup>牛<sup>ご</sup>の如<sup>ごと</sup>に うしゃぎ<sup>う</sup> はり  
仰<sup>おほ</sup> 晴<sup>は</sup>  
やげ<sup>や</sup> KA1-160[268]
- 11 貴方<sup>なん</sup>と妾<sup>わぬいぬ</sup>縁<sup>ゆ</sup>や 焼<sup>やき</sup>山<sup>やま</sup>ぬ蔓<sup>かじら</sup> 先<sup>さき</sup>や枯<sup>か</sup>てむ 根<sup>むと</sup>や一<sup>ひと</sup>つ  
KA1-161[199]
- 12 懐<sup>きも</sup>しゃげ<sup>げ</sup> ぬ加<sup>か</sup>那<sup>な</sup>ぬ 想<sup>おも</sup>懐<sup>い</sup>ち<sup>ち</sup> かし<sup>か</sup>や<sup>や</sup> 吾<sup>わ</sup>体<sup>た</sup>に柔<sup>やは</sup>々<sup>や</sup>と<sup>と</sup> 着<sup>ち</sup>き<sup>き</sup>ゆ  
る如<sup>ごと</sup>に KA1-162[114]
- 13 吾<sup>わ</sup>体<sup>た</sup>に柔<sup>やは</sup>々<sup>や</sup>と<sup>と</sup> 随<sup>ちちき</sup>来<sup>いぬ</sup>たる縁<sup>ゆ</sup>ば 誰<sup>た</sup>が他<sup>ち</sup>人<sup>う</sup>ぬ居<sup>い</sup>てど<sup>ど</sup> 吾<sup>わ</sup>仲<sup>な</sup>破<sup>やぶ</sup>て  
(随<sup>ずい</sup>従<sup>じゆ</sup>来<sup>らい</sup>ん チ<sup>ち</sup> キュン) KA1-163[269]
- 14 加<sup>か</sup>那<sup>な</sup>が仲<sup>な</sup>吾<sup>わ</sup>仲<sup>な</sup> 入<sup>い</sup>りゆ<sup>ゆ</sup>ん人<sup>ひと</sup>や居<sup>い</sup>らぬ 花<sup>はな</sup>ぬ露<sup>つゆ</sup>こぼし 風<sup>かぜ</sup>ど<sup>ど</sup> 当<sup>あた</sup>る  
KA1-164[102]
- 15 貴<sup>なん</sup>方<sup>は</sup>と<sup>と</sup> 吾<sup>わ</sup>縁<sup>ゆ</sup>や き<sup>き</sup>や<sup>や</sup>し<sup>し</sup>る縁<sup>ゆ</sup>かい<sup>い</sup>な 離<sup>ぬ</sup>き<sup>き</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>りやと<sup>と</sup> 思<sup>おも</sup>ば<sup>ば</sup> 近<sup>ちか</sup>  
さなり<sup>さ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>り KA1-165[198]
- 16 昨<sup>きの</sup>日<sup>に</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>うと<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>や 夢<sup>いめ</sup>繁<sup>しげ</sup>さ<sup>さ</sup>や<sup>や</sup>せ<sup>せ</sup> が 懐<sup>きも</sup>気<sup>き</sup>ぬ加<sup>か</sup>那<sup>な</sup>ぬ 近<sup>ちか</sup>さ<sup>さ</sup>な<sup>な</sup>て  
不<sup>ふ</sup>思<sup>し</sup>議<sup>ぎ</sup>  
ど<sup>ど</sup> KA1-166[109]
- 17 夢<sup>いめに</sup>見<sup>み</sup>し<sup>し</sup>る時<sup>とき</sup>に 夢<sup>いめ</sup>語<sup>がたり</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>な 夢<sup>いみ</sup>や晶<sup>はる</sup>々<sup>はる</sup>ぬ 草<sup>くさ</sup>ぬ裏<sup>うら</sup>葉<sup>べ</sup>  
KA1-167[051]
- 18 二<sup>に</sup>三<sup>さん</sup>度<sup>ど</sup>ぬ飯<sup>めし</sup>や 食<sup>か</sup>み<sup>み</sup>や食<sup>か</sup>だ<sup>だ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>も 加<sup>か</sup>那<sup>な</sup>ぬ事<sup>こと</sup>思<sup>おも</sup>て<sup>て</sup> 肉<sup>にく</sup>や<sup>や</sup>な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ  
KA1-168[201]
- 19 哀<sup>きも</sup>気<sup>しやげ</sup>ぬ加<sup>か</sup>那<sup>な</sup>が 其<sup>う</sup>ん<sup>ん</sup>思<sup>おも</sup>い<sup>い</sup>な<sup>な</sup>れ<sup>れ</sup> ば (不<sup>ふ</sup>明<sup>めい</sup>) KA1-169[113?]
- 20 懐<sup>きも</sup>ぬ里<sup>さと</sup>が 其<sup>う</sup>ん<sup>ん</sup>思<sup>おも</sup>い<sup>い</sup>な<sup>な</sup>れ<sup>れ</sup> ば 夜<sup>ゆ</sup>半<sup>な</sup>風<sup>かぜ</sup>連<sup>ちん</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup> 忍<sup>しの</sup>で<sup>で</sup> 来<sup>い</sup>も<sup>も</sup>れ  
KA1-170[117]
- 21 御<sup>に</sup>座<sup>じ</sup>敷<sup>ひ</sup>ち<sup>ち</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>て<sup>て</sup>待<sup>ま</sup>ち<sup>ち</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>れ 枕<sup>まくら</sup>取<sup>と</sup>て<sup>て</sup> 待<sup>ま</sup>ち<sup>ち</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>れ 夜<sup>ゆ</sup>半<sup>な</sup>風<sup>かぜ</sup>連<sup>ちん</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup> 忍<sup>しの</sup>  
で<sup>で</sup>行<sup>い</sup>き<sup>き</sup>よ<sup>よ</sup>ろ KA1-171[206]
- 22 灯<sup>ちん</sup>燈<sup>ちん</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>わ<sup>わ</sup>買<sup>かう</sup>て<sup>て</sup>呉<sup>く</sup>れ<sup>れ</sup> ね<sup>ね</sup> 油<sup>あぶら</sup>買<sup>かう</sup>て<sup>て</sup>呉<sup>く</sup>れ<sup>れ</sup> ね<sup>ね</sup> 灯<sup>ちん</sup>燈<sup>ちん</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>わ<sup>わ</sup>ば<sup>ば</sup>と<sup>と</sup>ぼ<sup>ぼ</sup>し  
妾<sup>わぬ</sup>や<sup>や</sup>行<sup>ま</sup>ち<sup>ち</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>ろ KA1-172[173]
- 23 懐<sup>きも</sup>気<sup>しやげ</sup>ぬ加<sup>か</sup>那<sup>な</sup>ぬ 腕<sup>うで</sup>抱<sup>だ</sup>き<sup>き</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>る時<sup>とき</sup>や 息<sup>いき</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>上<sup>あ</sup>げ<sup>げ</sup> 下<sup>さ</sup>げ<sup>げ</sup> ぬ し<sup>し</sup> られ  
ぐ<sup>ぐ</sup>る<sup>る</sup>し<sup>し</sup>や KA1-173[115]

○懐か<sup>ない</sup>声聞<sup>ぐい</sup>けば 息<sup>いき</sup>やぬかれらぬ 時<sup>とき</sup>々やあらせ声<sup>ぐい</sup> きき<sup>たほ</sup>やし給<sup>たほ</sup>ぼれ  
KA1-204[195]

25 去<sup>い</sup>じゃる月<sup>ちぎ</sup>がでや ただ二<sup>だ</sup>ヶ月<sup>しき</sup>なりゆり 憶<sup>あわれり</sup>此<sup>こ</sup>の月<sup>ちぎ</sup>や 三<sup>み</sup>月<sup>し</sup>なりゆ  
り  
KA1-175[039]

26 去<sup>い</sup>じゃる月<sup>ちぎ</sup>がでや ただ三<sup>み</sup>ヶ月<sup>ちぎ</sup>なりゆり あわれ此<sup>こ</sup>の月<sup>ちぎ</sup>や 四<sup>よ</sup>月<sup>し</sup>な  
りゆり  
KA1-176[041]

27 四<sup>よ</sup>ヶ月<sup>ちぎ</sup>なりんがでや 袖<sup>すで</sup>ぬ下<sup>し</sup>にかくし 哀<sup>あわれ</sup>れ此<sup>こ</sup>の月<sup>ちぎ</sup>や 他<sup>よ</sup>人<sup>そ</sup>に知<sup>し</sup>れ  
る  
KA1-177[256]

28 他<sup>よ</sup>人<sup>そ</sup>ぬ目<sup>むい</sup>ぬ繁<sup>しげ</sup>さ 口<sup>くち</sup>ぬ恐<sup>うど</sup>るしゃや 片<sup>かたうや</sup>親<sup>や</sup>やしゆま 知<sup>し</sup>らしたぼれ  
KA1-178[259]

29 子<sup>こ</sup>ぬ可<sup>かな</sup>愛<sup>あ</sup>しゃあれば 何<sup>ぬ</sup>ぬ心<sup>しわ</sup>配<sup>あ</sup>りよめ 心<sup>しわ</sup>配<sup>あ</sup>ぬある時<sup>とき</sup>や 吾<sup>わ</sup>ぬに  
知<sup>し</sup>らし  
KA1-179[127]

30 (不明) KA1-180

31 (不明) KA1-181

32 (不明) KA1-182

33 風<sup>かぜ</sup>まわるまでに 雲<sup>くも</sup>まわるまでに 三<sup>さん</sup>十<sup>じゅう</sup>三<sup>さん</sup>流<sup>なが</sup>れ 此<sup>こ</sup>処<sup>ま</sup>じ止<sup>ど</sup>ろ  
KA1-183[098]

縁<sup>えん</sup>ぬ流<sup>なが</sup>れ (川<sup>かわ</sup>畑<sup>はた</sup>常<sup>じょう</sup>熊<sup>くま</sup>翁<sup>おう</sup>口<sup>くち</sup>伝<sup>でん</sup>)

1 二<sup>に</sup>十<sup>じゅう</sup>日<sup>にち</sup>夜<sup>や</sup>ぬ暗<sup>くら</sup>さ 脛<sup>はざ</sup>やひかれらぬ 一<sup>いち</sup>夜<sup>や</sup>ぬ宿<sup>やど</sup>やしゆま 借<sup>か</sup>らしたぼ  
れ  
KA1-184[214]

2 一<sup>いち</sup>夜<sup>や</sup>ぬ宿<sup>やど</sup>やしゆま 借<sup>からし</sup>欲<sup>ぶ</sup>しゃやせが 敵<sup>きび</sup>し親<sup>うや</sup>加<sup>が</sup>那<sup>なし</sup>志<sup>し</sup> 間<sup>ま</sup>ぬ近<sup>ち</sup>き<sup>き</sup>や<sup>さ</sup>  
KA1-185[171]

3 きびし親<sup>うや</sup>加<sup>が</sup>那<sup>なし</sup>志<sup>し</sup> 間<sup>ま</sup>近<sup>ち</sup>き<sup>き</sup>やて<sup>て</sup> やしが 妾<sup>わね</sup>が縁<sup>えん</sup>側<sup>がわ</sup>に 案<sup>と</sup>内<sup>も</sup>しおし  
ろ  
KA1-186[112]

4 縁<sup>えん</sup>側<sup>がわ</sup>に立<sup>た</sup>て<sup>て</sup> ば 他<sup>よ</sup>人<sup>そ</sup>の目<sup>むい</sup>ぬ恐<sup>こわ</sup>さ 蜜<sup>くわんぐい</sup>柑<sup>ぐい</sup>木<sup>し</sup>ぬ下<sup>した</sup>に 供<sup>とも</sup>しおし  
ろ  
KA1-187[085]

5 蜜<sup>くわんぐい</sup>柑<sup>ぐい</sup>木<sup>し</sup>ぬ下<sup>した</sup>や 狩<sup>かり</sup>まわすところ 妾<sup>わね</sup>が縁<sup>えん</sup>側<sup>がわ</sup>に 伴<sup>とも</sup>しおし  
ろ  
KA1-188[124]

6 縁<sup>えん</sup>側<sup>がわ</sup>に立<sup>た</sup>て<sup>て</sup> ば 他<sup>よ</sup>人<sup>そ</sup>の目<sup>むい</sup>ぬ怖<sup>こわ</sup>さ 一<sup>いち</sup>枚<sup>むい</sup>ある小<sup>くさ</sup>座<sup>ざ</sup>に 伴<sup>とも</sup>しおし  
ろ



24 去<sup>い</sup>じゃる<sup>ちぎ</sup>月<sup>か</sup>が<sup>で</sup>や 一<sup>ちひしき</sup>ヶ月<sup>ど</sup>なり<sup>り</sup>ゆる 憶<sup>あわれり</sup>此<sup>ちぎ</sup>の<sup>な</sup>月<sup>だ</sup>や 二<sup>だ</sup>月<sup>しき</sup>な  
り<sup>り</sup>ゆ<sup>り</sup> KA1-174[040]

## 雑集編

○山<sup>やま</sup>ぬ<sup>ぎ</sup>木<sup>か</sup>ぬ<sup>か</sup>枯<sup>か</sup>れて<sup>て</sup> 蟬<sup>あしやしや</sup>ぬ<sup>さとう</sup>里<sup>さとう</sup>下<sup>さとう</sup>れ<sup>さとう</sup>て<sup>て</sup> 蟬<sup>あしやしや</sup>ぬ<sup>さとう</sup>里<sup>さとう</sup>下<sup>さとう</sup>れ<sup>さとう</sup>て<sup>て</sup> 啼<sup>な</sup>か  
だ<sup>だ</sup>な<sup>な</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>戻<sup>戻</sup>り<sup>り</sup>よ<sup>よ</sup>る KA1-190[251]

○枯<sup>なり</sup>枝<sup>き</sup>踏<sup>た</sup>め<sup>め</sup>と<sup>と</sup>で<sup>で</sup> 一<sup>きひき</sup>なり<sup>なり</sup>木<sup>き</sup>引<sup>ひ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup> 落<sup>う</sup>て<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>ば<sup>ば</sup>む<sup>む</sup>ハ<sup>ハ</sup>カ<sup>カ</sup>チ<sup>チ</sup>  
加<sup>か</sup>那<sup>な</sup>と<sup>と</sup>一<sup>ちひみち</sup>道<sup>みち</sup> KA1-191[106]

○送<sup>おこ</sup>れ<sup>れ</sup>ち<sup>ち</sup>ば<sup>ば</sup>送<sup>おこ</sup>れ<sup>れ</sup> 浜<sup>はま</sup>所<sup>じよ</sup>迄<sup>が</sup>で<sup>で</sup> 送<sup>おこ</sup>れ<sup>れ</sup> 沖<sup>と</sup>乗<sup>な</sup>り<sup>り</sup>出<sup>で</sup>し<sup>し</sup>ば<sup>ば</sup> 潮<sup>しほ</sup>風<sup>かぜ</sup>頼<sup>たの</sup>も<sup>も</sup>  
KA1-192[088]

○清<sup>きよ</sup>妻<sup>らと</sup>ば<sup>し</sup>戴<sup>かむい</sup>て<sup>て</sup> 肝<sup>きも</sup>許<sup>ゆる</sup>し<sup>し</sup>う<sup>う</sup>く<sup>く</sup>な<sup>な</sup> 名<sup>な</sup>馬<sup>ま</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>手<sup>て</sup>縄<sup>な</sup> ゆる<sup>ゆる</sup>し<sup>し</sup>う<sup>う</sup>く<sup>く</sup>な<sup>な</sup>  
KA1-193[123]

○鼓<sup>つづみ</sup>く<sup>く</sup>わ<sup>わ</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>打<sup>う</sup>て<sup>て</sup>ば<sup>ば</sup> 馬<sup>うま</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>皮<sup>こ</sup>ど<sup>ど</sup> 打<sup>う</sup>ち<sup>ち</sup>ゆる<sup>ゆる</sup> 継<sup>ま</sup>子<sup>ま</sup>や<sup>や</sup>町<sup>ちやう</sup>て<sup>て</sup>ば<sup>ば</sup>  
他<sup>よ</sup>人<sup>そ</sup>が<sup>が</sup>謗<sup>をら</sup>う<sup>う</sup> KA1-194[170]

(百<sup>もも</sup>名<sup>な</sup>立<sup>た</sup>ち<sup>ち</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>り)  
○打<sup>う</sup>て<sup>て</sup>ば<sup>ば</sup>打<sup>う</sup>ち<sup>ち</sup>欲<sup>ぶ</sup>し<sup>し</sup>や<sup>や</sup> 夜<sup>よ</sup>鳴<sup>な</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>ゆる<sup>ゆる</sup>鼓<sup>ちやう</sup> 詰<sup>ち</sup>み<sup>み</sup>て<sup>て</sup>寄<sup>よ</sup>り<sup>り</sup>欲<sup>ぶ</sup>し<sup>し</sup>や<sup>や</sup>  
加<sup>か</sup>那<sup>な</sup>が<sup>が</sup>お<sup>お</sup>そ<sup>そ</sup>ば<sup>ば</sup> KA1-195

○浜<sup>はま</sup>打<sup>う</sup>ち<sup>ち</sup>ゆる<sup>ゆる</sup>波<sup>なみ</sup>や<sup>や</sup> 打<sup>う</sup>ち<sup>ち</sup>重<sup>かさ</sup>べ<sup>べ</sup>重<sup>かさ</sup>べ<sup>べ</sup> 大<sup>やま</sup>和<sup>と</sup>殿<sup>との</sup>様<sup>さま</sup>や<sup>や</sup> 肌<sup>ど</sup>衣<sup>み</sup>装<sup>しゆ</sup>重<sup>かさ</sup>べ<sup>べ</sup>  
KA1-196[071]

○坐<sup>お</sup>し<sup>し</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>て<sup>て</sup>唄<sup>うた</sup>し<sup>し</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup> も<sup>も</sup>も<sup>も</sup>だ<sup>だ</sup>る<sup>る</sup>さ<sup>さ</sup>や<sup>や</sup>せ<sup>せ</sup>が<sup>が</sup> デ<sup>デ</sup>吾<sup>わ</sup>等<sup>ら</sup>振<sup>ふ</sup>り<sup>り</sup>立<sup>た</sup>て<sup>て</sup>て<sup>て</sup>  
遊<sup>あ</sup>そ<sup>そ</sup>で<sup>で</sup>給<sup>た</sup>れ<sup>れ</sup> KA1-197[219]

○道<sup>みち</sup>端<sup>はた</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>堀<sup>く</sup>立<sup>た</sup>小<sup>こ</sup>屋<sup>や</sup> 七<sup>な</sup>枝<sup>な</sup>に<sup>に</sup>か<sup>か</sup>か<sup>か</sup>る<sup>る</sup> 吾<sup>わ</sup>々<sup>々</sup>や<sup>や</sup>貴<sup>な</sup>方<sup>かた</sup>袖<sup>そで</sup>に<sup>に</sup> か<sup>か</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>欲<sup>ぶ</sup>し<sup>し</sup>や<sup>や</sup>  
KA1-198[274]

○置<sup>お</sup>し<sup>し</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>し<sup>し</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>き<sup>き</sup>ば<sup>ば</sup>鳴<sup>な</sup>り<sup>り</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>み<sup>み</sup> 吊<sup>さ</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>と<sup>と</sup>き<sup>き</sup>ば<sup>ば</sup>鳴<sup>な</sup>り<sup>り</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>み<sup>み</sup> 懐<sup>きも</sup>げ<sup>げ</sup>  
ぬ<sup>ぬ</sup>恋<sup>こ</sup>人<sup>にん</sup>が<sup>が</sup> 弾<sup>ひ</sup>ち<sup>ち</sup>ど<sup>ど</sup>鳴<sup>な</sup>り<sup>り</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>る<sup>る</sup> KA1-199[239]

○吾<sup>わ</sup>々<sup>々</sup>達<sup>た</sup>頃<sup>ころ</sup>や<sup>や</sup> 夜<sup>ゆ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>暮<sup>く</sup>れ<sup>れ</sup>ど<sup>ど</sup>待<sup>ま</sup>ち<sup>ち</sup>ゆる<sup>ゆる</sup> 何<sup>い</sup>時<sup>じ</sup>が<sup>が</sup>夜<sup>ゆ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>暮<sup>く</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup> 吾<sup>わ</sup>自<sup>じ</sup>  
由<sup>ゆ</sup>な<sup>な</sup>り<sup>り</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>る<sup>る</sup> KA1-200[065]

○今<sup>き</sup>日<sup>ん</sup>風<sup>ど</sup>れ<sup>れ</sup>なり<sup>り</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>り 明<sup>あ</sup>日<sup>しやんと</sup>風<sup>ど</sup>れ<sup>れ</sup>なり<sup>り</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>り 鮎<sup>た</sup>取<sup>ふと</sup>人<sup>りや</sup>ぬ<sup>ど</sup>妻<sup>し</sup>や<sup>や</sup> あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>ろ<sup>ろ</sup>こ<sup>こ</sup>  
れ<sup>れ</sup>ろ KA1-201[264]

○西<sup>にし</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>む<sup>む</sup>寄<sup>よ</sup>り<sup>り</sup>よ<sup>よ</sup>り 東<sup>ひが</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>む<sup>む</sup>寄<sup>よ</sup>り<sup>り</sup>よ<sup>よ</sup>り 西<sup>にし</sup>東<sup>ひが</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>稻<sup>いな</sup>魂<sup>たま</sup> 今<sup>な</sup>ど<sup>ど</sup>寄<sup>よ</sup>り<sup>り</sup>よ<sup>よ</sup>  
り KA1-202[122]

り KA1-203[202]

KA1-189[083]

○五尺石垣ごしゃくいしがまに 葡はゆるもも蔓かじら 根むとや無ねだなしゆて 栄さかえ清きよらさ

KA1-205[135]

○潮風砂妬しゅからしなきじる 白浜しらはまに葡はゆる 先さきや定さだまらぬ 根ねなしから

KA1-206[154]

○鼓くわや打てば 馬ぬ皮どうちゆる 継しゃ子やうて°ば 百名立ち  
ゆり

KA1-207[170]

七七七五調編・・・・六調. 天草.

○息子蒔けまけ 大根種蒔せ おろし育てて 野菜肴

KA1-208[148]

○貴方さまはいくつか 二十二か三か 何時も変わらぬ 二十二、三

KA1-209[143]

○長い刀は さし方法ようがござる 前まえぬ上しりれは 尻下しりる

KA1-210[183]

○加那かなと話はなせば 枕まくらもいらぬ 互たがい違ちがいぬ 腕枕うでまくら  
里さと

KA1-211[103]

○何程なんぼ惚ほれても お庭にわの蘇鉄そてつ 垣かきの外そとから 見みたばかり

KA1-212[200]

○鶏とりは鳴うたたか まだ夜よは夜中よなか 心こころ静しずかに 寝ねてござれ

KA1-213[182]

○五尺手拭ごしゃくてぬげ°に 名前なまえば染そめ°て 汝やおが友ど°しこ達が 見みがなりゆ°み  
(いやきや)

KA1-214[137]

○五尺手拭ごしゃくてぬげ°に 名前なまえば染そめ°て 里さとが来いれば 好いい長ながさ

KA1-215[136]

○合あわん手拭てぬげ°ば 合あそうにし°れ°ば 夜よるの夜鳥ゆがらす 鳴なき明あかす

KA1-216[030]

○舟ぬ鱸きょらむんなんじ 美の女むすめば乗のせて 上のぼり下くだりの 舟ふねはらそ

○舟ば浮き<sup>ふね</sup>と<sup>と</sup>で<sup>で</sup> 清女<sup>きよらむん</sup>ばのせて 慕<sup>おも</sup>い青年<sup>ねせんきや</sup>達<sup>たち</sup>に 柁<sup>かじ</sup>とらそ

KA1-217[226]

○舟<sup>ふね</sup>ぬ新造<sup>しんぞ</sup>と 美人<sup>きよらむん</sup>のよいのは 人<sup>ひと</sup>が<sup>み</sup>見たがる のりたがる

KA1-218[228]

○沖<sup>おき</sup>の沖<sup>となか</sup>に オホ松<sup>た</sup>立てて のぼ<sup>のぼ</sup>り下<sup>くだ</sup>りの 舟<sup>ふね</sup>はうそ

KA1-219[225]

○裏<sup>うら</sup>の窓<sup>まど</sup>から 蒟<sup>こん</sup>蒟<sup>やく</sup>投<sup>な</sup>げて 今夜<sup>こんや</sup>来<sup>く</sup>るとの 知<sup>し</sup>しサ<sup>み</sup>み

KA1-220[087]

○阿母<sup>あま</sup>馬<sup>ま</sup>廉<sup>か</sup>ばか 芭蕉<sup>ばんしや</sup>に惚<sup>ほ</sup>れて あぎな舟<sup>ふね</sup>人<sup>ひと</sup>に 子<sup>こ</sup>ば嫁<sup>くれば</sup>て

KA1-221[081]

KA1-222[034]

{「あぎな舟人」の横に卑しい男との注あり}

○今<sup>いま</sup>の踊<sup>おど</sup>りは 踊<sup>おど</sup>り子<sup>こ</sup>が揃<sup>そろ</sup>た 踊<sup>おど</sup>り習<sup>なら</sup>わば 今<sup>いま</sup>習<sup>なら</sup>え

KA1-223[050]

○高<sup>たか</sup>い山<sup>やま</sup>から 谷<sup>たに</sup>そこ見<sup>み</sup>れば 老<sup>お</sup>いた (瓜<sup>うり</sup>や) 茄子<sup>なすび</sup>の 花<sup>はな</sup>ざかり

KA1-224[165]

○雨<sup>あめ</sup>の降<sup>ふ</sup>る日<sup>ひ</sup>に 笹<sup>ささ</sup>山<sup>やま</sup>入<sup>い</sup>るな 笹<sup>ささ</sup>の露<sup>ちり</sup>やら 泪<sup>なみだ</sup>やら

KA1-225[024]

○貴<sup>なぬ</sup>方<sup>わん</sup>と妾<sup>めかけ</sup>と<sup>と</sup>や 羽<sup>は</sup>織<sup>おり</sup>のひもよ 一<sup>いち</sup>代<sup>で</sup>末<sup>まち</sup>代<sup>で</sup>の 結<sup>むす</sup>び合<sup>あ</sup>い

KA1-226[196]

○此<sup>こ</sup>処<sup>こ</sup>は重<sup>しげ</sup>富<sup>とみ</sup> 越<sup>こ</sup>ゆれば吉<sup>よしの</sup>野 吉<sup>よしの</sup>野こゆれば 鹿<sup>か</sup>児<sup>ご</sup>の島<sup>しま</sup>

KA1-227[129]

## 七七七四調

○西<sup>にし</sup>ぬ仲<sup>なか</sup>原<sup>はら</sup>主<sup>しゅ</sup>よ 恥<sup>はぢ</sup>じきれてなかばる 其<sup>う</sup>れが<sup>し</sup>為<sup>やく</sup>たる役<sup>やく</sup>や 佐<sup>さ</sup>和<sup>わ</sup>伊<sup>い</sup>久<sup>く</sup>  
に奪<sup>と</sup>られて

KA1-228[204]

○佐<sup>さ</sup>和<sup>わ</sup>伊<sup>い</sup>久<sup>く</sup>や実<sup>まね</sup>久<sup>く</sup> マチ女<sup>ぢよ</sup>ク<sup>く</sup>ッ<sup>か</sup>や大<sup>おお</sup>島<sup>しま</sup> 黒<sup>くろ</sup>潮<sup>しほ</sup>離<sup>ひ</sup>め<sup>め</sup>と<sup>と</sup>で<sup>で</sup>よ 想<sup>おも</sup>い<sup>おも</sup>想<sup>おも</sup>  
い惱<sup>くる</sup>い

KA1-229[147]

○西<sup>にし</sup>ぬ実<sup>まね</sup>久<sup>く</sup>なんてよ 大<sup>たい</sup>和<sup>わ</sup>船<sup>せん</sup>ぬ破<sup>やぶ</sup>れたさ 潮<sup>うしほ</sup>凧<sup>と</sup>れ<sup>れ</sup> 凧<sup>と</sup>れ<sup>れ</sup> 凧<sup>と</sup>れ<sup>れ</sup>  
銭<sup>せん</sup>ぐわ<sup>せん</sup>銭<sup>せん</sup>ぐわ<sup>せん</sup>ひらおさ

KA1-230[203]

八月踊主題歌編

1 祝し°き°

- 本 ハレ夫婦が旦那様に  
ハレ殿地阿爾しゃれに  
ハレ真白髪御老人に
- ハレ祝し°き°で°差上ろ ハレ月ぬ立ち  
頃に ホニハレお祝見候れヨソノ  
エッハレ月ぬ立ち頃 (囉エッハリャオセオセ)  
ハレ月ぬ立ち頃に ホニハレお祝見候れ  
ヨソノ エッハレ月ぬ立ち頃

KA1-231[244] KA1-232[180] KA1-233[233]

- ク 祝し°き°で°差上ろ ハレ月ぬ立ち初 ホニお祝見候れヨソノ、ハレ  
月ぬ立ち初 (囉ハリャオセオセ) エッ月ぬ立ち初 ホニお祝見候れヨ  
ソノ、ハレ月ぬ立ち初

KA1-234

- ア 種子播しよんちえ・・・・・・・・

KA1-235[168]

2. 播け播け

- 本 息子蒔けまけ 大根種子播せ ソリャ播せ育てて ソノ野菜肴ヨ  
イキョラサ ヨイキョラサノ ハリャコリャ ヨウチ ヨイキョラサ

KA1-236[148]

- ア○西ぬ仲原主旦那よ 恥きれ°てなかばる 其れ°が為うたる役や  
佐和伊久に奪られて

KA1-237[204]

- 曲り高嶺なんて・・・・・・・・

KA1-238[231]

- ヤレコウヤレコウ

- 

3. 浦富 (宇宿踊りくわ)

- 本 浦富ヤ浦富 戻らぬヤ浦富 戻らぬヤ浦富  
うらと°み戻そしゅんや 島ぬヤ馬廉者ぬ 島ぬヤ馬廉者ぬ

KA1-239[079]

- ク きばて摺れし°れ 姉妹達 摺れはナ衣装 戴らしゅんどイネ  
シレシレ°ヨ アラユレユレヨ

KA1-240[110]

{少なくとも現在は<浦富>にクズシはついていない。}

- 宇宿踊りくわや いきやししかや踊りよる 左脛探て 右股ただし

KA1-241[057]

## 4. しゅんかね

- しゅんかねくわが節や 吾が熟しうしゃが 三味線持ちいもれ 着きておし。ろ

KA1-242[157]

\*江戸時代本土に広がったションガイ節が奄美に入り民謡化した

(久保ケン夫氏)

## 5 ねんごろ女 (ハイソーラ)

- 本 蓼入忘すれたが ハイソラ ねんごろ女が宿に 蓼のむ時  
思出しやが ソラヨイヨイ (のむときハイソラのむ時きたばんこ、蓼のむ時思出しやがソラユイユイ)

KA1-243[141]

- ク 喜界や湾泊 水慕れとりゆり 潮焦れ取りゆる 山田平田ヤヨ  
ンノ

KA1-244[107]

## 6 浜千鳥

- 本 浜千鳥千鳥よ 啼くな浜千鳥よ ハレ泣き。ば面影よ まさ  
で。立ちゆり

KA1-245[220]

## 7 近雲 (ヒヤルガフェ)

- 主 山嶽雲下がて エッ夏雨ぬ近きやさエッ夏雨ぬ近きやさ (囃ヒヤレヌ  
ドイドイ) 加那ぬ思下がて。 エッ吾に又近きやさ エ吾に  
又近きやさ

KA1-246[249]

## 8 芦花部一番

- 主 芦花部一番や 上殿地ぬバア加那よ ハレくばや一番や 実久く  
ば ヨユヌフェ

KA1-247[007]

\*くば 昔の大きい板着舟。

- ク 思てヨンソラ 死んだ方が勝り・・・・・・ KA1-248[093]

## 9 高さ坂

- 主 高さ坂登がてエンヤヨ 脚停み停み (囃ハリャオッセオッセ)

ハレ待ちゆれ。ば来吾がエンヤヨ

玉黄金

KA1-249[166]

## 10 港笹草

- 主 港笹草やヨ シュクぬ孵化どころ 吾阿母懐や 吾が生どころ

KA1-250[240]

11 ほう<sup>めらべ</sup>女童 (カンデクナラベ)○主 ほう<sup>めらべ</sup>女童ヤ <sup>こと</sup>言づけぬ<sup>たばこ</sup> 菘 <sup>たばん</sup>ハレ<sup>たばこ</sup> 菘 <sup>もつ</sup>ことづけや <sup>たばこ</sup> 縛れ<sup>たばこ</sup> 菘ヤシユ  
リヤ

KA1-251[230]

\*ほう 芭蕉の繊維 ウ° (緒) の転化 <sup>ことづけ</sup> {注が記されて  
いるが筆者が読み取れず}12 塩道長浜<sup>しゅみちながはま</sup>○本 塩道長浜<sup>しゅみちながはま</sup>なんて° <sup>わらべ</sup>ハレ<sup>な</sup> 童<sup>な</sup>ぬ泣<sup>な</sup>きんしょし° <sup>エ</sup>が、 <sup>わらべ</sup>童<sup>な</sup>ぬ泣<sup>な</sup>きん  
しょし<sup>う</sup>えが、 <sup>た</sup>其<sup>ゆい</sup>れや誰<sup>ゆい</sup>が所以<sup>ま</sup>いちば <sup>ち</sup>ハレ<sup>あし</sup>ケサ<sup>はだ</sup>松汗<sup>ゆい</sup>肌所以<sup>ケ</sup>  
サ<sup>ま</sup>松汗<sup>あし</sup>肌<sup>はだ</sup>ゆい

KA1-252[155]

\*塩道 喜界町早町の隣接の集落

\*所似 ……が原因で、 ……なって (広辞苑)

13 東明雲<sup>あがれあけぐも</sup>○本 東明雲<sup>あがれあけぐも</sup>ぬ <sup>い</sup>生き<sup>わか</sup>別<sup>み</sup>れ見<sup>れ</sup>° ば <sup>か</sup>加<sup>な</sup>那<sup>と</sup>° <sup>い</sup>生き<sup>わか</sup>別<sup>れ</sup>んヨ <sup>其</sup>れ°  
<sup>ご</sup>が<sup>と</sup>如<sup>に</sup>にんよ <sup>い</sup>生き<sup>わか</sup>別<sup>れ</sup>生<sup>き</sup>別<sup>れ</sup> <sup>か</sup>加<sup>な</sup>那<sup>と</sup>° <sup>い</sup>生き<sup>わか</sup>別<sup>れ</sup>んよ <sup>其</sup>れ°  
<sup>う</sup>が<sup>また</sup>其<sup>ごと</sup>れ° が <sup>また</sup>又<sup>ごと</sup>如<sup>に</sup>

KA1-253[002]

○ク 油<sup>あぶら</sup>だらだら <sup>か</sup>風<sup>ぐらん</sup>浪<sup>しゅ</sup>主 <sup>ま</sup>馬<sup>が</sup>がで° <sup>む</sup>持<sup>ち</sup>ち<sup>ち</sup>ゆて° <sup>さ</sup>砂<sup>た</sup>糖<sup>ひ</sup>曳<sup>ぎ</sup>きゃし  
<sup>お</sup>ハレ<sup>よ</sup>及<sup>ば</sup>らぬヤ<sup>め</sup>ゴ<sup>め</sup>シヨ女<sup>め</sup>ば <sup>ね</sup>ハレ<sup>ん</sup>妾<sup>ご</sup>し° <sup>ろ</sup>ろし<sup>ろ</sup> <sup>ち</sup>ヤ<sup>シ</sup>ユリ<sup>ヤ</sup>

KA1-254[022]

14 アガムラ

(又は夜明<sup>はと</sup>け<sup>き</sup>)○本 あ<sup>き</sup>が<sup>ん</sup>む<sup>ら</sup>く<sup>わ</sup>く<sup>わ</sup>や <sup>雲</sup>む<sup>ら</sup>ぬ<sup>歯</sup>ぐ<sup>き</sup>ヨ<sup>ハ</sup>レ <sup>き</sup>氣<sup>ん</sup>病<sup>む</sup>な<sup>れ</sup>° ば  
<sup>ゆ</sup>呼<sup>た</sup>ばし<sup>ほ</sup>給<sup>れ</sup> (又<sup>ち</sup>ハ<sup>ち</sup>呼<sup>み</sup>ばし<sup>ち</sup>一<sup>道</sup>)

KA1-255[005]

○<sup>き</sup>氣<sup>ん</sup>病<sup>む</sup>に<sup>な</sup>と° <sup>で</sup> <sup>ゆ</sup>り<sup>こ</sup>転<sup>う</sup>で<sup>居</sup>れ° <sup>ば</sup>よ<sup>ハ</sup>レ <sup>わ</sup>吾<sup>あ</sup>阿<sup>ん</sup>母<sup>ま</sup>馬<sup>ふ</sup>廉<sup>れ</sup>者<sup>わ</sup>や <sup>ユ</sup>  
<sup>と</sup>夕<sup>も</sup>ば<sup>供</sup>し

KA1-256[118]

15 岬頓原<sup>みさきとんばら</sup>○本 岬頓原<sup>みさきとんばら</sup>に <sup>ち</sup>一<sup>ぶ</sup>叢<sup>す</sup>ある <sup>じ</sup>芒<sup>し</sup>よ<sup>ハ</sup>レ <sup>う</sup>其<sup>れ</sup>° <sup>は</sup>が<sup>な</sup>花<sup>さ</sup>咲<sup>け</sup>ば <sup>み</sup>乱<sup>だ</sup>れ<sup>な</sup>り<sup>ゆ</sup>  
り

KA1-257[237]

16 屋仁川ぬ沙魚<sup>やんごら いぶ</sup>○主 屋仁川ぬ沙魚<sup>やんごら いぶ</sup>や <sup>い</sup>餌<sup>ど</sup>か<sup>ち</sup>けて<sup>釣</sup>り<sup>ゆ</sup>り<sup>イ</sup>ヤ<sup>ル</sup>ガ<sup>フ</sup>ェ <sup>ハ</sup>レ<sup>や</sup>ん<sup>み</sup>屋<sup>ん</sup>仁<sup>み</sup>ぬ<sup>女</sup>

<sup>わらべ</sup>童や <sup>さじし</sup>サジし <sup>ちりゆり</sup>ちりゆり

KA1-258[253]

## \*サチ 女の頭にかぶる布 (ウシクイ)

## 17 安実主

- 主 <sup>やん</sup>屋仁ぬ <sup>やしざねしゅ</sup>安実主や <sup>なはん</sup>那覇 <sup>いしゅこ</sup>ち衣装 <sup>いしゅ</sup>買いが <sup>いしゅ</sup>ナ衣装 <sup>なしきごろ</sup>や口 <sup>ぞれゆう</sup>実事 女郎連  
びがホマデンシヨイナ <sup>いしゅ</sup>衣装 <sup>なしきごろ</sup>や口 <sup>なしきごろ</sup>実事 ナシケムンヌナ女ムンヌナ  
ウマレンシヨイナ

KA1-259[254]

## 18 あじそい.

- 主 <sup>あしく</sup>脚踏 <sup>く</sup>み踏 <sup>なら</sup>み習 <sup>で</sup>て <sup>で</sup>手振 <sup>ふ</sup>り振 <sup>なら</sup>り習 <sup>で</sup>て <sup>か</sup>食 <sup>なら</sup>み習 <sup>で</sup>て <sup>から</sup>や <sup>まちげ</sup>間違  
ねらぬサアッチャミチャミ <sup>か</sup>食 <sup>なら</sup>み習 <sup>で</sup>て <sup>から</sup>や <sup>まちげ</sup>間違 <sup>ねらぬ</sup>ねらぬ

KA1-260[008]

{現在、本歌詞は<足くみくみ>の元歌で演唱されている。}

## 19 一合二合

- 主 <sup>いちごにこ</sup>一合二合 <sup>いちごにこさんごしごごごとくご</sup>一合二合三合四合五合六合 <sup>ななごはちごくごいしゅ</sup>ハレ七合八合九合一升 <sup>やい</sup>キョ <sup>ラ</sup>キョ <sup>ラ</sup>キョ <sup>ラ</sup>キョ  
<sup>やい</sup>キョ <sup>ラ</sup>ヤ <sup>オ</sup>キョ <sup>ラ</sup>サ <sup>ン</sup>キョ <sup>ロ</sup>ム <sup>エ</sup>サ <sup>ン</sup>キョ <sup>ロ</sup>ム <sup>エ</sup>

KA1-261[046]

## 20 赤木名観音堂

- 主 <sup>あかき</sup>赤木 <sup>な</sup>名 <sup>かんの</sup>観 <sup>のん</sup>音 <sup>だう</sup>堂 <sup>あかき</sup>赤木 <sup>な</sup>名 <sup>かんの</sup>観 <sup>のん</sup>音 <sup>だう</sup>堂 <sup>いづ</sup>伊津 <sup>か</sup>ち <sup>な</sup>移 <sup>ほ</sup>ろ <sup>な</sup>移 <sup>ろ</sup>移 <sup>ろ</sup>の <sup>な</sup>無 <sup>な</sup>噂 <sup>な</sup>ば <sup>か</sup>り <sup>ハ</sup>レ  
ヨイサヨイヨイサ

KA1-262[001]

- ア <sup>いねし</sup>稲摺 <sup>れ</sup>摺 <sup>れ</sup>よ、<sup>あ</sup>ら <sup>ゆ</sup>篩 <sup>れ</sup>れ <sup>ゆ</sup>れ <sup>れ</sup>よ。 <sup>きばて</sup>頑 <sup>張</sup>って <sup>し</sup>れ <sup>し</sup>れ <sup>れ</sup>  
<sup>うなり</sup>姉 <sup>な</sup>妹 <sup>き</sup>ん <sup>だ</sup>達 <sup>し</sup>れ <sup>れ</sup> <sup>い</sup>ば <sup>ナ</sup>衣 <sup>しゅ</sup>装 <sup>か</sup>戴 <sup>み</sup> <sup>ら</sup>し <sup>ゆ</sup>ん <sup>ど</sup> <sup>い</sup>ね <sup>し</sup>れ <sup>れ</sup>  
よ <sup>あ</sup>ら <sup>ゆ</sup>れ <sup>ゆ</sup>れ <sup>よ</sup>

KA1-263[110]

## 21 ちえんちえん.

- 主 <sup>はぜがちえ</sup>八月 <sup>しち</sup>の <sup>よりもど</sup>節 <sup>もど</sup>や <sup>ハ</sup>レ、 <sup>よりもど</sup>縫 <sup>もど</sup>戻 <sup>り</sup>、<sup>もど</sup>戻 <sup>り</sup>、<sup>フ</sup>ヌ <sup>ヌ</sup>ヤ <sup>ヌ</sup>ヤ <sup>ヌ</sup>イ <sup>ヌ</sup>ヤ <sup>ヌ</sup>ガ、<sup>ヨ</sup>ン  
<sup>ソ</sup>レ <sup>チェ</sup>ン <sup>チェ</sup>ン <sup>ヤ</sup>チェ <sup>ン</sup>チェ <sup>ン</sup>ヒ <sup>ヤ</sup>ヒ <sup>ト</sup>リ <sup>ヌ</sup> <sup>チェ</sup>ン <sup>チェ</sup>ン <sup>ヤ</sup>チェ  
ン <sup>チェ</sup>ン。

KA1-264[211?]

## 22 今ぬ風雲

- 主 <sup>いま</sup>今 <sup>かざくも</sup>ぬ <sup>い</sup>ま <sup>かざくも</sup>風 <sup>むら</sup>風 <sup>うい</sup>雲 <sup>に</sup> <sup>た</sup>ハ <sup>レ</sup>立 <sup>ち</sup>ゆ <sup>り</sup>ヨ <sup>イ</sup>ヨ <sup>イ</sup> ( <sup>な</sup>囃 <sup>ホ</sup>ラ <sup>ヨ</sup>ー  
<sup>イ</sup>ト <sup>コ</sup>セ ) <sup>わし</sup>ハ <sup>れ</sup>妾 <sup>と</sup>が <sup>の</sup>殿 <sup>じ</sup>主 <sup>さん</sup>や <sup>ハ</sup>イ <sup>ソ</sup>ラ <sup>にしぼる</sup>西 <sup>原</sup>に <sup>た</sup>ハ <sup>レ</sup>立 <sup>ち</sup>ゆ <sup>り</sup>ヨ  
イ ( <sup>な</sup>囃 <sup>ハ</sup>ラ <sup>ヨ</sup>イ <sup>ト</sup>コ <sup>セ</sup> )

KA1-265[049]

踊り止め

- 1. 有難<sup>おぼこり</sup>と<sup>あぶしまくら</sup>やりょうる 果報<sup>かふ</sup>しゃれとやりょうる 来年<sup>やね</sup>ぬ稲加<sup>いねか</sup>那志<sup>なし</sup>  
畦枕<sup>あぶしまくら</sup> KA1-266[074]
- 2. 風廻<sup>かぜまわ</sup>るまでに 雲<sup>くも</sup>まわるまでに (.....ぬ踊) 此処<sup>くま</sup>じ止<sup>と</sup>  
め<sup>ろ</sup> KA1-267[098]
- 3. ....ぬ遊び 七廻<sup>ななみ</sup>ぐり遊<sup>あそ</sup>で 八廻<sup>み</sup>ぐり廻<sup>むい</sup>くて こまじとめ<sup>ろ</sup>  
KA1-268[275]



## 資料3 実況演唱歌詞資料

本資料は宇宿集落の1987年度アラセツ行事（9月23～25日）における八月踊りの全演唱歌詞を記録したものである。

- ・左端3桁の数字は、アラセツ3日間における奏演曲の通し番号。〈〉内は踊り曲名。
- ・奏演曲目の右に各演唱での節番号と実況演唱歌詞番号（3桁 資料1の歌詞番号）を - で結んで列記した。演唱歌詞が不明のものには？を付した。基本的には奇数節は女性、偶数節は男性が演唱している。念のため歌い出しの一節目、もしくは不規則的な箇所、中断箇所の節番号の前に f（女性） m（男性）の記号を付した。また各曲でアラシャゲに変化する部分については、各歌詞の節番号の前に、[A1]のごとく〔〕内にアラシャゲ旋律通し番号（表1参照）を示した。
- 例：f[A2]4-119とは、女性により第4節目をアラシャゲ旋律[A2]により歌詞119を歌ったことを示す。
- ・ \* 記号はそれ以降録音できなかったことを示す。 / は、演唱が一時中断された部分を示す。

### ◆シカリ日（9月23日）

#### お宮

- 001〈祝つけ〉f1-119 f2-058 m[A1]3-244 f[A2]4-119 5-121 6-168 7-243 8-033  
 002〈まけまけ〉f1-148 2-119 3-200 4-143 5-182 [A4]6-119 7-211 8-264 9-018  
 [A5]10-204 11-211 12-211 13-264 [A6]14-130  
 003〈宇宿踊りくわ〉m1-079 2-057 3-119 4-044 5-018 6-012 7-267 8-074 9-132 10-036  
 11-074

#### 1軒目

- 004〈祝つけ〉 f1-244 [A1]2-244 [A2]3-119 4-121 5-168 6-243 7-033 8-043 9-119  
 005〈高さの坂〉 f1-166 2-166 3-119 4-018 5-012 6-004 7-255 8-090 9-273  
 006〈あがんむら〉 f1-005 2-118 3-163 / m4-211 5-264 6-193 7-119 8-170 9-006  
 10-131 11-? 12-074 13-036 14-074

#### 2軒目

- 007〈祝つけ〉f1-244 2-244 [A1]3-244 4-244 [A2]5-119 6-121 7-211 8-264 9-163  
 008〈まけまけ〉f1-148 2-096 3-183 4-143 5-024 6-200 7-137 [A4]8-119 9-019 10-019  
 11-119 [A5]12-204 13-211 14-264 15-158 16-142 17-? [A6]18-211 19-211  
 009〈ハイソーラ〉 f1-211 2-141 3-211 4-264 5-119 6-044 7-019 8-056 9-056 10-195  
 11-058 [A7]12-107 13-021 14-018 15-012 16-131 17-132 18-074 19-036 20-074

#### 3軒目

- 010〈祝つけ〉 f1-180 [A1]2-180 3-076 4-244 [A2]5-187 6-121 7-119 8-168 9-033  
 011〈しゅんかねくわ〉 f1-157 2-122 3-211 4-264 5-192 6-193 7-012 8-018 9-091 10-150  
 11-139 12-023 13-089 14-195 15-192 16-190 17-191 18-014 19-152 20-122 21-089  
 012〈宇宿踊りくわ〉 f1-079 m2-057 m3-058 f4-211 m5-264 6-119 7-131 8-132 9-036  
 10-074 11-074

#### 4軒目

- 013〈祝つけ〉f1-244 2-244 [A1]3-076 4-244 [A2]5-119 6-121 7-168 8-243 9-033 10-043

11-212 [A3]12-230 13-230

014<まけまけ> f1-148 2-148 3-096 4-119 5-103 6-200 7-148 8-096 9-024 10-226  
11-137 12-143 13-148 [A4]14-119 15-019 16-056 17-119 [A5]18-204 19-211 20-264  
21-192 22-158 23-142

015<浜千鳥>f1-220 2-220 3-090 4-273 5-258 6-020 7-187 8-012 9-014 10-152 11-268  
12-160 13-271 14-268 15-158 16-131 17-134 18-036 19-074 20-074

#### 5軒目

016<祝つけ>f1-233 2-233 3-244 4-058 [A1]5-076 6-244 [A2]7-187 8-012 9-014 10-168  
11-033 12-043 13-168

017<まけまけ> f1-148 2-148 3-183 4-200 5-137 6-182 7-024 8-200 9-148 [A4]10-119  
11-211 12-264 13-058 14-018 15-091 16-150 17-019 [A5]18-204 19-211 20-264  
21-026 [A6]22-130 23-211

018<ハイソーラ> f1-211 2-211 3-264 4-018 5-091 6-150 7-026 8-058 9-089 10-160  
11-271 [A7]12-107 13-211 14-264 15-088 16-131

#### 6軒目

019<祝つけ> f1-244 2-058 3-244 [A1]4-244 5-076 6-244 [A2]7-168 8-243 9-273 10-043  
11-033 12-058 13-119 14-192

020<港笹草>f1-240 2-100 3-174 4-211 5-211 6-264 7-187 8-267 9-140 10-160 11-271  
12-268 13-170 14-023 15-? 16-016 17-195

021<塩道長浜>f1-155 2-155 3-156 4-211 5-264 6-018 7-091 8-150 9-187 10-131 11-132  
12-074

#### 7軒目

022<祝つけ> f1-180 2-180 3-058 [A1]4-180 [A2]5-119 6-119 7-026 8-168 9-192

023<高さの坂> f1-166 2-089 3-058 4-004 5-255 6-090 7-273 8-258

024<足くみくみ>m1-008 2-211 3-264 4-187 5-012 6-190 m7-192 m8-122 9-177 10-131  
11-058 12-074 13-132

#### 8軒目

025<祝つけ>f1-244 2-244 3-058 [A1]4-151 [A2]5-119 6-119 7-192 8-121 9-168 10-243  
11-192 12-043 13-026 [A3]14-230 15-230

026<しゅんかねくわ>f1-157 2-122 3-211 4-264 5-264 6-018 7-091 8-150 9-187 10-012  
11-014 12-152 13-026 14-192 15-018 16-091 17-150 18-020 19-089 20-160 21-271  
22-268 23-211 m24-122 m25-037 f26-037 27-063 28-185 29-016

027<安実主>f1-254 2-254 3-211 4-264 5-026 6-149 7-116 m8-195 / m9-019 10-056  
11-160 12-271 13-131 14-132 15-074 16-036 17-074 18-074

#### 9軒目

028<祝つけ>f1-244 2-244 3-058 [A1]4-244 5-076 6-244 [A2]7-192 8-121 9-026 10-149  
11-116 12-168

029<塩道長浜> f1-155 2-155 3-211 4-264 5-187 6-012 7-014 8-152 9-202 10-020  
11-021

030<宇宿踊りくわ> f1-079 2-057 3-187 4-019 5-056 6-119 7-004 8-255 9-090 10-273  
11-258 12-131 13-132 14-074 15-074 16-074

#### 10軒目

031<祝つけ> f1-244 2-058 3-058 [A1]4-244 [A2] 5-119 6-121 7-026 8-149 9-116 10-168  
11-058

032<ほう女童> \*

033<浜千鳥> f1-220 2-220 3-211 4-264 5-192 6-195 7-058 8-119 9-202 10-013 11-?  
12-131 13-089 14-131 15-132 16-036 17-074 18-074 19-074

#### 11軒目

034<祝つけ> f1-244 2-244 3-058 [A1]4-244 [A2]5-119 6-121 7-168 8-243 9-211 10-264  
11-033 12-043 \*

035<岬とんばら> f1-237 f2-211 m3-211 f4-237 5-237 6-211 7-264 8-089 m9-018 f10-091  
m11-150 / m12-058 f13-187 m14-012 15-? 16-160 17-271 18-268

036<赤木名観音堂> f1-001 2-001 3-211 4-044 5-119 6-018 7-091 8-150 9-187 10-?  
11-026 12-149 13-116 [A10]14-110 15-119 16-018 17-132 18-036 19-074

#### 12軒目

037<祝つけ> f1-244 2-244 3-058 [A1]4-151 [A2]5-119 6-121 7-211 8-168 9-212

038<今ぬ風雲> f1-049 2-049 3-211 4-058 5-195 6-018 / f7-049 8-058 9-026 10-149  
11-116

039<東明け雲> f1-002 m2-002 f3-211 m4-264 m5-019 f6-026 7-026 8-149 9-211 10-264  
11-058 12-089 13-160 14-271 15-268 16-187 [A9]17-022 18-211 19-264 20-192  
21-089 22-004 23-131 24-132 25-074

#### ◆アラセツ当日 (9月24日)

##### 1軒目

040<祝つけ> f1-244 2-244 3-058 [A1]4-244 [A2]5-119 6-121 7-211 8-264 9-187 10-168  
11-192

041<まけまけ> f1-148 2-119 3-148 4-096 \* 5-200 6-143 7-137 8-226 9-024 10-182  
11-148 [A4]12-119 13-211 14-264 15-058 16-193 17-018 [A5]18-204 19-211 20-264  
21-158 22-142 23-004

042<ハイソーラ> f1-211 2-141 3-211 4-264 5-139 6-014 7-152 8-160 9-271 10-268  
11-089 12-205 13-172 14-056 15-119 16-044 17-058 [A7]18-107 19-134 m20-197  
f21-021 m22-023 m23-131 f24-132 m25-036 26-074 27-074

##### 2軒目

043<祝つけ> f1-180 2-180 3-058 [A1]4-180 5-076 6-244

044<宇宿踊りくわ> f1-079 2-079 3-057 4-119 5-057 6-193 7-189 8-197 9-134 10-089  
11-026 12-149 13-116 14-170 15-119 16-211

045<しゅんかねくわ> f1-157 2-157 3-157 4-119 5-211 6-264 7-134 8-197 9-187 10-012  
11-014 12-152 13-004 14-255 15-090 16-273 17-258 18-020 19-252 20-160 21-271  
22-036 23-074 24-036 25-131

##### 3軒目

046<祝つけ> f1-244 2-244 3-058 [A1]4-244 5-211 [A2]6-119 7-168 8-243 9-243 10-042  
11-042

047<高さの坂> f1-166 2-166 3-211 4-264 5-026 6-149 7-149 8-193 9-211 10-264 11-187  
12-012 13-012 14-058 15-170

048<赤木名観音堂> \* f1-058 m2-05 3-187 4-012 5-006 6-026 7-149 8-116 9-134 10-197  
11-134 [A10]12-110 13-211 14-192 15-074 16-036 17-074

## 4軒目

049<祝つけ> f1-244 2-244 3-058 [A1]4-244 [A2]5-119 6-119 7-211 8-168 9-192 10-058  
11-153 12-064 13-267 14-140 15-168 [A3]16-230 17-230

050<あがんむら> f1-005 2-005 3-118 4-211 5-264 6-018 7-091 8-187 9-012 10-202  
11-004 12-255 13-090 14-273 15-258 16-026 17-149 18-071 19-089

051<岬とんばら> m1-237 2-237 3-211 4-264 5-006 6-242 7-193 8-190 9-191 10-134  
11-197 12-134 13-014 14-152 15-131 16-132 17-036 18-074 19-074

## 5軒目

052<祝つけ> f1-244 2-244 3-058 [A1]4-244 [A2]5-119 6-119 7-211 8-121 9-187 10-168  
11-192 12-119 13-168 14-243 15-134 16-043 17-033

053<港笹草> f1-240 2-240 3-058 4-100 5-174 6-058 7-187 8-012 9-004 10-255 11-014  
12-152 13-089 14-088 15-219 16-262 17-010 18-236 19-177 20-205 21-160 22-271

054<ハイソーラ> f1-211 2-141 3-211 4-264 5-264 6-202 7-012 8-068 9-269 10-267  
11-140 [A7]12-107 13-211 14-264 15-134 16-197 17-058 18-131 19-132 20-036  
21-074 22-074

## 6軒目

055<祝つけ> f1-244 2-244 3-058 [A1]4-244 [A2]5-119 6-119 7-187 8-033 9-168 10-243  
11-192

056<まけまけ> f1-148 2-096 3-148 4-143 5-103 6-182 7-148 8-137 9-024 10-200  
11-050 12-184 [A4]13-119 14-211 15-264 [A5]16-204 17-211 18-264 19-264 20-058  
21-134 22-197 23-134 [A6]24-130 25-211

057<屋仁川ぬ沙魚> m1-253 2-253 3-211 4-211 5-193 6-134 7-197 8-177 9-160 10-271  
11-131 12-132 13-074 \*

## 7軒目

058<祝つけ> \*

059<港笹草> f1-240 2-240 3-058 4-240 5-174 6-058 7-211 8-264 9-195 10-193 11-134  
12-197 13-134 14-160 15-271 16-268 17-219 18-262 19-010 20-088 21-219

060<今ぬ風雲> f1-049 2-049 3-058 4-049 5-187 6-012 7-202 8-131 9-132 10-074  
11-074

## 8軒目

061<祝つけ> f1-244 2-244 3-058 [A1]4-244 5-134 [A2]6-119 7-211 8-264 9-264 10-168  
11-187 12-119 13-033

062<まけまけ> f1-148 2-119 3-119 4-143 5-103 6-137 7-024 8-226 9-103 [A4]10-119  
11-019 12-056 13-187 14-012 15-012 [A5]16-204 17-211 18-264 19-158 20-142  
21-036

063<しゅんかねくわ> f1-157 2-157 3-211 4-264 5-211 6-192 7-012 8-255 9-090 10-273  
11-258 12-088 13-219 14-178 15-250 16-227 17-018 18-091 19-150 20-131 21-132  
22-074 23-074 24-074

## 9軒目

064<祝つけ> f1-244 2-244 3-058 [A1]4-244 5-244 [A2]6-119 7-119 8-121 9-192 10-033

\*

065<ほう女童>f1-230 2-230 3-230 4-211 5-264 6-202 7-004 8-255 9-090 10-273 11-258  
12-058 13-012 14-230 15-026 16-149 17-116

066<東明け雲>m1-002 2-002 3-211 4-264 5-193 6-012 7-058 8-160 9-271 10-268  
[A9]11-022 12-211 13-264 14-058 15-082 16-211 17-264 18-074 19-036 20-074  
21-074

## 10軒目

067<祝つけ> f1-244 2-244 3-058 [A1]4-244 5-076 6-244 [A2]7-168 8-243 9-187 10-043  
11-192 [A3]12-230 13-230

068<安実主>f1-254 2-254 3-211 4-264 5-134 6-197 7-134 8-019 9-056 10-119 11-026  
12-149 13-116 14-004 15-255 16-090 17-273 18-160 19-271 20-268 21-073

069<近雲> f1-249 2-249 3-211 4-264 5-187 6-058 7-211 8-131 9-132 10-036

## 11軒目

070<祝つけ> f1-244 2-244 3-058 [A1]4-244 5-076 6-244 [A2]7-119 8-119 9-134 10-197  
11-192 12-193 13-012 14-255 15-090 16-273 17-258

071<まけまけ> f1-148 2-096 3-148 4-143 5-119 6-200 7-050 8-184 9-183 10-226  
11-184 [A4]12-119 13-019 14-056 15-026 16-149 17-116 18-202 19-004 [A5]20-204  
21-211 22-264 23-134 24-197 25-158

072<ハイソーラ>f1-211 2-211 3-264 4-202 5-026 6-149 7-116 8-202 9-004 10-255  
11-090 12-273 13-058 [A7]14-107 15-058 16-211 17-264 18-018 19-091 20-131  
21-074 22-036 23-074 24-074

## 12軒目

073<祝つけ>f1-180 2-180 3-058 [A1]4-180 5-076 6-244 [A2]7-119 8-119 9-187 10-033  
11-168 12-243 13-134 [A3]14-230 \*

074<港笹草>f1-240 2-100 3-090 4-273 5-026 6-149 7-116 8-192 9-012 10-054 11-250  
12-088 13-219 14-262 15-010 16-119 17-252 18-061 19-073 20-026 21-149

075<塩道長浜>f1-155 2-155 \*

## 13軒目

076<祝つけ>f1-244 2-244 3-058 [A1]4-076 5-076 [A2]6-119 7-168 8-243 9-187 10-033  
11-168

077<浜千鳥>f1-220 2-220 3-090 4-273 5-258 6-192 7-012 8-193 9-026 10-149 11-116  
12-071 13-170 14-071 15-195 16-020 17-073 18-193 19-018 20-091 21-150

078<岬とんぱら>f1-237 2-237 3-211 4-264 5-163 6-193 7-187 8-012 9-006 10-063  
11-267 12-140 13-195 14-160 15-271 16-268 17-134 18-131 19-132 20-036 21-074  
22-074 23-036

## 14軒目

079<祝つけ>f1-244 2-244 3-058 [A1]4-244 5-076 [A2]6-119 7-187 8-202 9-004 10-255  
11-090 12-273 13-258

080<宇宿踊りくゝ>f1-079 2-057 3-057 4-211 5-264 6-202 7-004 8-255 9-090 10-273  
11-119 12-063 13-267 14-053 15-185 16-053 17-211

081<塩道長浜>f1-155 2-155 3-156 4-195 5-187 6-012 7-014 8-152 9-212 10-074 11-074  
12-036

## 15軒目

- 082<祝つけ>f1-180 2-244 3-058 [A1]4-244 5-076 6-151 [A2]7-168 8-243 9-158 10-119  
11-012 12-121 13-134 14-197 15-134 16-043 17-158 [A3]18-230 19-230
- 083<まけまけ>f1-148 2-148 3-200 4-119 5-148 6-200 7-184 8-182 9-137 10-050 11-148  
12-137 13-103 [A4]14-119 15-134 16-197 17-134 [A5]18-204 19-211 20-264 21-163  
22-058 23-158 24-142 [A6]25-211 26-264 27-264
- 084<足くみくみ> f1-008 \* 2-255 3-090 4-273 5-258 6-122 7-195 8-195 9-211 10-264  
11-012 12-193 13-122 14-089 15-101 16-023 17-089 18-160 19-271 20-268 21-058  
22-131 23-132 24-074 25-036 26-036 27-074 28-074 29-074

## 16軒目

- 085<祝つけ>f1-244 2-233 3-058 [A1]4-244 5-076 6-244 [A2]7-119 8-121 9-187 10-168  
11-243
- 086<今ぬ風雲>f1-049 2-049 3-211 4-264 5-018 6-091 7-150 8-187 9-134 10-197 11-004  
12-255 13-015
- 087<芦花部一番>m1-007 m2-007 f3-211 m4-264 5-211 6-264 7-068 8-269 9-267 10-140  
11-195 12-188 13-242 14-131 15-132 16-074 17-036 18-036 19-074 20-074 21-074

## 17軒目

- 088<祝つけ>f1-244 2-244 3-058 [A1]4-244 5-076 6-180 [A2]7-168 8-119 9-121 10-033  
11-168 12-243 13-187 [A3]14-230 15-230
- 089<ハイソーラ>f1-211 2-141 3-211 4-264 5-187 6-012 7-006 8-185 9-267 10-140  
11-195 12-188 13-242 [A7]14-107 15-211 16-264 17-163 18-018 19-091 20-150  
21-089
- 090<高さの坂>f1-166 2-166 3-211 4-264 5-026 6-149 7-116 8-188 9-242 10-131 11-132  
12-036 13-074 14-074 15-074

## 18軒目

- 091<祝つけ> \* m[A1]1-244 f[A2]2-168 m3-119 4-211 5-121 6-026 7-058 8-158 9-142  
10-189 [A3]11-230 12-230
- 092<一合二合>m1-046 2-046 3-046 4-211 5-264 6-134 7-193 8-187 9-046 10-134 11-193  
12-134 13-018 14-187
- 093<宇宿踊りくゝ>f1-079 2-057 3-211 4-264 5-026 6-149 7-116 8-170 9-071 10-021  
11-ad1 12-073 13-023 14-123 15-037 16-227 17-195 18-053 19-185 20-131 21-132  
22-036 23-074 24-074

## 19軒目

- 094<祝つけ>f1-233 2-233 3-058 [A1]4-233 5-076 6-151 [A2]7-119 8-121 9-119 10-058  
11-192 12-192 13-158 [A3]14-230 15-230
- 095<安実主> f1-254 2-254 3-211 4-264 5-134 / f6-254 7-254 8-211 9-264 10-134  
11-197 12-134 13-193 14-019 15-056 16-119 17-044 18-211 19-264 20-? 21-185  
22-267 23-140 24-195 25-254 26-134 27-197 28-058 29-054 30-252
- 096<東明け雲>f1-002 2-002 3-211 4-264 5-134 6-197 7-187 8-012 9-018 10-091 11-150  
12-187 13-012 [A9]14-082 15-211 16-264 17-134 18-197 19-134 20-131 21-074  
22-036 23-074 24-036 25-074 26-074

## ◆アラセツ2日目 (9月25日)

## 1軒目

- 097<祝つけ>f1-244 2-244 3-244 [A1]4-244 [A2]5-119 6-121 7-211 8-264 9-192 10-058  
11-121 12-168 13-243 14-043 15-042
- 098<まけまけ> f1-148 2-096 3-200 4-143 5-103 6-183 7-050 8-119 9-184 10-226  
[A4]11-119 12-211 13-264 14-018 15-091 [A5]16-204 17-211 18-264 19-026 20-149  
21-116 22-158 [A6]23-211 24-264
- 099<ハイソーラ>m1-141 2-211 3-264 4-187 5-193 6-012 7-195 8-058 9-160 10-271  
11-268 12-089 13-134 [A7]14-211 15-264 16-163 17-026 18-149 19-131 20-132  
21-036 22-074 23-074

## 2軒目

- 100<祝つけ>f1-244 2-244 3-058 [A1]4-244 5-076 6-244 [A2]7-119 8-121 9-033 10-119  
11-192
- 101<しゅんかねくわ>f1-157 2-157 3-122 4-134 5-197 6-058 7-089 8-101 9-090 10-273  
11-258 12-122 13-058 14-134 15-025 16-088 17-219 18-250 19-021 20-023 21-ad1
- 102<宇宿おどり> f1-079 2-079 3-057 4-211 5-264 6-018 7-091 8-150 9-119 10-255  
11-090 12-273 13-258 14-131 15-132 16-036 17-074

## 3軒目

- 103<祝つけ>f1-244 2-244 3-058 [A1]4-244 [A2]5-121 6-119 7-058 8-168 9-243 10-043  
11-168
- 104<港笹草> f1-240 2-240 3-211 4-264 5-073 6-269 7-195 8-058 9-025 10-020 11-004  
12-255 13-090 14-273 15-258 16-026 17-258
- 105<足くみくみ>m1-008 2-008 3-211 4-264 5-018 6-091 7-264 8-134 9-211 10-192  
11-193 12-014 13-152 14-058 15-131 16-132 17-036 18-074 19-074

## 4軒目

- 106<祝つけ>f1-244 2-244 3-058 [A1]4-244 [A2]5-168 6-121 7-187 8-119 9-058 10-168  
11-192 12-012 13-? [A3]14-230
- 107<岬とんぼら> f1-237 2-211 3-264 4-018 5-091 6-150 7-187 8-193 9-089 10-160  
11-271 12-268 13-018 14-091 15-150
- 108<高さの坂>f1-166 2-166 3-211 4-264 5-134 6-197 7-134 8-160 9-271 10-268 11-073  
12-020 13-026 14-149 15-132 16-036 17-074 18-074

## 5軒目

- 109<祝つけ> f1-180 2-180 3-058 [A1]4-180 5-076 6-076 [A2]7-168 8-119 9-192 10-134
- 110<安実主>f1-254 2-254 3-211 4-264 5-026 6-026 7-149 8-116 9-187 10-012 11-071  
12-071 13-134 14-197 15-134
- 111<ハイソーラ>f1-211 2-141 3-119 4-044 5-160 6-271 7-268 8-026 9-149 10-116  
11-170 [A7]12-107 13-211 14-264 15-026 16-131 17-132 18-036 19-074 20-074

## 6軒目

- 112<祝つけ>f1-233 2-233 3-058 [A1]4-233 5-076 6-244 [A2]7-119 8-168 9-243 10-033  
11-192 [A3]12-211
- 113<まけまけ> m1-148 2-148 3-183 4-050 5-137 6-024 7-226 [A4]8-119 9-264 10-134

[A5]11-204 12-211

114<赤木名観音堂> f1-001 2-001 3-211 4-264 5-026 6-149 7-116 8-195 9-058 10-?  
11-160 12-271 13-192 [A10]14-110 15-211 16-264 17-131 18-036 19-074 20-074

## 7軒目

115<祝つけ>f1-244 2-244 3-058 [A1]4-244 5-076 6-151 [A2]7-168 8-243 9-033 10-043  
11-168

116<岬とんばら>m1-118 2-211 3-264 4-134 5-193 6-211 7-264 8-264 9-160 10-271  
11-268 12-192 13-191 14-134 15-197 16-134 17-160 18-271 19-058 20-058

117<港笹草> f1-240 2-240 3-058 4-240 5-211 6-264 7-134 8-197 9-134 10-026 11-149  
m12-071 f13-170 m14-131 m15-063 f16-074 m17-036 18-074 19-074

## 8軒目

118<祝つけ>f1-233 2-233 3-058 [A1]4-233 5-076 6-151 [A2]7-168 8-243 9-192 10-043  
11-033

119<屋仁川ぬ沙魚>f1-253 2-253 3-211 4-264 5-134 6-197 7-134 8-160 9-187 10-068  
11-269 12-063 13-185 14-202 15-012 16-071 17-170 18-170 19-158 20-142 21-134  
22-197

120<ハイソーラ> f1-211 2-264 3-211 4-141 5-134 6-197 7-134 8-202 9-004 10-255  
11-090 12-273 13-258 14-019 15-056 16-119 17-089 [A7]18-107 19-211 20-264  
21-131 22-132 23-004 24-255 25-090 26-273 27-074 28-036 29-074 30-074

## 9軒目

121<祝つけ>f1-244 2-244 3-058 [A1]4-244 5-076 [A2]6-119 7-119 8-033 9-168 10-243  
11-187 12-012 13-014

122<しゅんかねくわ> f1-157 2-122 3-058 4-192 5-211 6-264 7-134 8-202 9-004 10-255  
11-090 12-188 13-242 14-088 15-219 16-250 17-262 18-010 19-250 20-262 21-219  
22-068 23-192 24-019 25-056 26-119 27-219 28-188 29-242 30-101 31-090 32-273  
33-258 34-058 35-134 36-197 37-158 38-142 39-119

123<岬とんばら>m1-237 2-237 3-237 4-211 5-264 6-163 7-006 8-012 9-149 10-116  
11-071 12-119 13-044 14-160 15-131 16-132 17-074 18-074 19-036 20-074 21-074

## 10軒目

124<祝つけ>f1-244 2-244 3-058 [A1]4-244 [A2]5-043 6-119 7-192 8-121 9-168 10-243  
11-192 12-043 13-121 [A3]14-230 15-230

125<まけまけ>m1-119 2-148 3-143 4-103 5-200 6-024 7-226 8-226 [A4]9-119 10-019  
11-056 [A5]12-204 13-211 14-264 15-187 16-012 17-158 18-142 [A6]19-211 20-211  
21-187

126<あがんむら> m1-005 2-118 3-100 4-174 5-100 6-211 7-264 8-264 9-006 10-242  
11-160 12-271 13-268 14-267 15-064 16-195 17-195 18-012 19-131 20-132 21-036  
22-074 23-074 24-074 25-074

## 11軒目

127<祝つけ>f1-244 2-244 3-058 [A1]4-244 5-076 6-244 [A2]7-168 8-119 9-058 10-033  
11-168 12-243 13-192 14-012 15-188

128<塩道長浜>f1-155 2-155 3-156 4-068 5-211 6-264 7-026 8-149 9-118 10-058 11-134  
12-197 13-134 14-193 15-012 16-264



129<屋仁川ぬ沙魚> m1-253 2-211 3-264 4-211 5-193 6-134 7-014 8-211 9-026 10-149  
11-074 12-132 13-074 14-074

## 12軒目

130<祝つけ> f1-244 2-058 3-058 [A1]4-244 5-076 6-151 [A2]7-168 8-243 9-121 10-058  
11-119 [A3]12-230 13-230

131<しゅんかねくわ> f1-157 2-122 3-211 4-264 5-264 6-006 7-187 8-012 9-134 10-197  
11-134 12-202 13-089 14-? 15-219 16-139 17-219 18-061 19-227 20-053 21-195  
22-188 23-242 24-101 25-090 26-273 27-258

132<今ぬ風雲> f1-049 2-049 3-211 4-264 5-211 6-202 7-004 8-131 9-131 10-074

## 13軒目

133<祝つけ> f1-244 2-244 3-058 [A1]4-244 [A2]5-121 6-121 7-119 8-033 9-212 10-185  
11-267 [A3]12-230 13-230

134<まけまけ> m1-119 2-148 3-096 4-148 5-096 6-183 7-137 8-024 9-143 10-024  
11-184 12-119 [A4]13-211 14-264 15-202 16-004 17-255 18-090 [A5]19-204 20-211  
21-264 22-134 [A6]23-130 24-211 25-264

135<宇宿踊りくわ> f1-079 2-057 3-134 4-197 5-012 6-026 7-149 8-116 9-170 10-071  
11-? 12-061\*

## 14軒目

136<祝つけ> \*

137<高さの坂> f1-166 2-166 3-211 4-264 5-134 6-197 7-134 8-018 9-091 10-195  
11-195 12-026 13-149 14-004 15-255 16-090

138<赤木名観音堂> f1-001 2-001 3-211 4-264 5-089 6-202 7-004 8-255 9-090 10-273  
11-258 12-071 13-036 [A10]14-110 15-211 16-193 17-012 18-131 19-132 20-074  
21-074

## 15軒目

139<祝つけ> f1-233 2-233 3-058 [A1]4-233 [A2]5-119 6-121 7-119 8-168 9-243 10-192  
11-058

140<港笹草> f1-240 f2-240 m3-240 f4-058 5-100 6-211 7-264 8-195 9-202 10-255  
11-090 12-273 13-258 14-188 15-242 16-160 17-271 18-268 19-268 20-? 21-219  
22-250 23-262 24-010

141<近雲> f1-249 2-211 3-264 4-202 5-255 6-255 7-090 8-273 9-134 10-131 11-132  
12-074 13-074

## 16軒目

142<祝つけ> f1-244 2-244 3-058 [A1]4-244 [A2]5-043 6-119 7-192 8-033 9-168 10-243  
11-033 12-043 13-134 14-197 15-134 [A3]16-230 17-230

143<塩道長浜> f1-155 2-155 3-211 4-264 5-211 6-264 7-172 8-056 9-119 10-044 11-211  
12-264 13-018 14-091 15-150 16-192

144<浜ちぢよりゃ> \* m1-220 f2-220 m3-090 f4-273 5-192 6-134 7-197 8-134 9-205  
10-089 11-088 \*

## 17軒目

145<祝つけ> f1-180 2-180 3-058 [A1]4-180 [A2]5-121 6-121 7-211 8-119 9-134 10-197  
11-134

146<まけまけ>f1-148 2-096 3-183 4-200 5-137 6-143 7-103 8-182 9-024 10-119 11-050  
[A4]12-119 13-211 14-264 15-192 [A5]16-204 17-211 18-264 19-158

147<宇宿踊りくわ>f1-079 2-057 3-211 4-264 5-019 6-056 7-119 8-019 9-026 10-131  
11-132 12-036 13-074 14-074

## 18軒目

148<祝つけ>f1-027 2-027 3-027 4-058 5-180 [A1]6-180 [A2]7-058 8-119 9-119 10-202  
11-004 12-255 13-090 14-273 15-258 [A3]16-230 17-230

149<近雲>f1-249 2-211 3-058 4-192 5-211 6-264 7-211 8-193 9-089

150<ほう女童>f1-230 2-230 3-058 4-193 5-211 6-071 7-158 8-142 9-068 10-269 11-219  
12-250 13-262 14-088 15-073 16-193 17-122 18-037 19-037 20-132 21-153 22-074  
23-074 24-074 25-036 26-074

## 19軒目

151<祝つけ>f1-244 2-244 3-058 [A1]4-244 5-076 6-244 [A2]7-119 8-058 9-187 10-012  
11-014 12-152 13-192

152<まけまけ> f1-148 2-119 3-148 4-096 5-184 6-137 7-200 8-226 9-226 [A4]10-119  
11-211 12-264 13-211 14-264 15-211 [A5]16-204 17-211 18-264 19-058 20-202  
21-004 22-255 23-090 24-273 25-258 26-071 27-170 [A6]28-130 29-211

153<東明け雲> f1-002 2-002 3-058 4-002 5-211 6-163 7-264 8-006 9-242 10-101  
11-211 12-264 13-018 14-091 15-150 16-187 [A9]17-022 18-082 19-211 20-264  
21-026 22-149 23-074 24-131 25-132 26-074 27-074